新妹魔王の契約者 The Testament of Sister New Devil VI

契約者（テスタメント）

上栖綴人

イラスト 大熊猫介［ニトロプラス］

角川スニーカー文庫

The Testament of Sister New Devil

新妹魔王の契約者（テスタメント）VI

東城刃更

Basara Toujou

➤澪と万理亜の“兄”。特異能力《無次元の執行》の使い手

成瀬澪

Mio Naruse

➤先代魔王の娘で、刃更の"妹"になった少女

成瀬万理亜

Maria Naruse

➤刃更と澪を主従契約させた下の"妹"。ロリエロサキュバス

野中柚希

Yuki Nonaka

➤幼馴染の刃更が好きな、勇者一族の少女

野中胡桃

Kurumi Nonaka

➤柚希の妹で、最近は刃更の家で生活している

ゼスト

Zest

➤刃更に救われた魔族の美女。刃更に忠誠を誓っている

長谷川千里

Chisato Hasegawa

➤刃更達が通う高校の、美しすぎる養護教諭

「……今夜は年上の女を
滅茶苦茶にしてみないか？」

新妹魔王の契約者（テスタメント）VI

上栖綴人

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。
本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

第1章　少女達のアブない競泳水着
第2章　偽りの笑顔の裏側で
第3章　ずっと素直になりたくて
第4章　旅立つ前にあなたと
あとがき

——もうこれ以上、偽り続ける事はできない。
この想いだけは——嘘にしたくないから。

第1章　少女達のアブない競泳水着

1

澪や万理亜に加え、柚希も東城家で生活するようになったある日。

「――そうそう刃更さん。学校指定の競泳水着の準備は大丈夫ですか？」

夕食後にリビングのソファで寛いでいた東城刃更は、万理亜からそう問い掛けられた。

「いや、まだだけど……そういや、来週は水泳の授業があるんだったな」

刃更が転入したのは、夏休み明けの二学期からだ。その二学期も既に中盤へと入っており、普通の学校ならば来年の夏まで水泳の授業が行なわれる事はない。

――だが、刃更達が通う聖ケ坂学園は、屋内に温水プールが設けられている。

そのため水泳の授業は夏期に限定される事なく、一年中行なわれていた。

しかし刃更は、体操服と運動靴については転入してすぐに購入したものの、水着だけは買うのを後回しにしていた。授業とはいえ、プールに入るため水着姿になれば、当然ながら肌の多くを晒す事になってしまうからだ。

――東城刃更の全身には、過去のとある出来事によって刻まれた傷跡が無数にある。

それは普通の人が見た時に、あまり気持ちの良いものではない。だから、

「……どうするかな」

刃更が思案を深めていると、夕食の後片付けをする万理亜の手伝いを一区切りさせたのか、澪がリビングへとやって来た。そして刃更の隣――ソファの縁へと腰掛け、

「もしかして刃更、水泳の授業に出たくないの……？」

「出たくないって訳じゃないんだけどな……ちょっと考えちゃってさ」

この傷は過去に犯した消せない罪の爪痕のようなもので、刃更がずっと背負い続けなければならないものだ。過去への後悔を今も強く抱き続けている事もあり、あまり軽々しく他人に見せたくないというのが本音である。

……それに。

平穏な学校生活を送りたい刃更としては、あまり周囲の注目を集めたくないというのもあった。ただでさえ転入の挨拶の際に仙堂に抱き付かれ、澪には同居している事を宣言されてしまったため、現状は滝川以外にロクに話せる男子がいないのだ。体育の時はなるべく更衣室の端を利用するようにして、なるべく他の者には見られないように注意しているが、水泳授業ともなればどうしようもない。

現状、どこかの部活やクラブに入る訳にはいかないという事もある。

今からでも仲良くなれるとしたら、それはやはり同じクラスの連中しかいない。

それなのに体育の授業で傷だらけの身体を完全に披露して引かれでもしたら、いよいよ同じクラスの男子との関係は絶望的になってしまう。

……親父は人付き合いとか上手いんだけどなぁ。

いったい何がそんなに遅うのだろう。刃更がやれやれと嘆息すると、

「……ねえ」

ふと澪の声のトーンが落ちた。

「もしかして……あたしのせい？」

「いや、そんな事は――」

と顔を上げた刃更は、澪の首に薄っすらと浮かぶものがあるのを見た。

主従契約の呪いの発動時に出る、首輪のような痣だ。自分のせいで刃更が水泳の授業に出られないのかもしれないという申し訳なさから、後ろめたさを得てしまったのだろう。刃更は慌てて澪の手を取ると、そっと優しく握って、

「遅うって、澪が悪いんじゃない……これは俺自身の問題なんだ」

「……本当に？」

不安そうに尋ねてくる澪に、刃更は「ああ」と頷きを返した。

確かに澪が堕魔王派の魔族に狙われている現在、刃更までおかしな注目を集めるような事態は避けるべきだ。しかも堕魔王以外にも、澪の養父母の仇でもあるゾルギアという高位魔族が密かに澪の事を狙っており、その側近ですら湊川を凌ぐ力を持っているという。

よって下手に目立に注目を集めて、その度に敵が潜んでいないか気を張り続けていては、戦う前から消耗し、いざという時に本来の力で戦えなくなってしまう。そんな事態だけは避けなければならないが、かといって澪が思い詰めてしまっては何の意味もない。

「ほら……いつまでも、そんな顔してると」

「あ――」

刃更は、握っていた澪の手を強引に引いて彼女を抱き寄せた。

そんな事をされると思いもしていなかったのだろう。虚を突かれた澪は、そのまま刃更の方へと倒れ込んできた。そんな澪を刃更が優しく抱き留めると、ボリュームのある澪の胸がまずこちらの身体へ押し付けられるように密着し、

「……っ、潰れ俺……」

これも澪のためだ。澪から香る甘い匂いと、彼女の柔らかさに内心ドキドキしつつ、それでも刃更は冷静さを装いながら澪の腰に手を回して言った。

「迅の大人の余裕を自分なりに意識しながら、至近距離で澪を見詰めて、

「またお前を屈服させちまうぞ……それでも良いのか？」

「――っ」

こちらの言葉にビクッと澪の体が震え、カッと顔が赤くなった。

「……よ、上手くいった……」

怒らせてしまえば、澪がこちらへ後ろめたさを感じる事もなくなる。だから刃更は、強引に澪の体に触れるような真似をしたのだ。後は澪にしばかれれば、この話はお終いだ。

怒った澪がリビングを出て行くか、こちらが謝りながら退散するかは、流れに任せれば良いだろう。完璧だ……これで無駄に澪を辱めるような事をせずに済む――そう思い、

……あれ？

しかし、澪はいつまで経っても手を振り上げようとしなかった。

「？　えっと……澪？」

「……」

刃更が恐る恐る問い掛けると、澪は無言で刃更の首へと両手を伸ばしてくる。

え、マジ？　しばくんじゃなくて、そこ絞めるんですか？　窒息しちゃうよ？

しまった、やりすぎたか？　とっさに刃更が身構えると、澪の両手は刃更の首の横を通り過ぎ――そのまま後ろへと回された。

そしてギュッと抱きしめられる。澪の身体の柔らかさをいっぱいに感じ、

「へ……？」

思わず眼が点になったこちらに、澪が消え入りそうな声で言った――甘く囁くように、

「……刃更がしたいなら、良いよ？」

「っ――いや、えっと……澪さんっ？」

えっ？　あれっ？　何この展開？　何でこんな可愛いこと言い出してんのっ？

澪から予想外の反応が返ってきてしまった事に、刃更は即座にテンパって、

「と、取り敢えず、落ち着こう澪……なっ！」

刃更は澪の両肩をぐっと掴んで、互いの身体を離す事に成功した。ところが、慌てたせいで摑む場所を失敗した。その結果、刃更の手――左右それぞれの五指が、澪のブラトップの肩紐の下へと滑り込んでしまい、

「わっ、悪い……っ！」

刃更は慌てて両手を抜くようにして引いた――それがいけなかった。刃更の手が抜かれた澪の肩紐が、彼女の肩に戻る事なく二の腕の方へずり落ちてしまったのだ。

すると澪の形の良い巨乳がブラトップの戒めから解かれたようにたゆんと揺れ、刃更の眼前で先端ギリギリ近くまで露わになった。さらに密着が解消された代わりに、刃更と澪の距離は見つめ合うのに最適な距離になっていて、

「……」「……」

刃更は眼の前の澪を見た。刃更の眼に映る澪の瞳は、先程よりも潤んだものになっていて、完全にこちらを許しているように見える。呪いの催淫効果で体温が上がっているのか、澪の身体から発せられる甘い匂いが、まるでこちらを誘うかのように強くなっていた。

そして、

「……お兄ちゃん」

澪がとろんとした瞳でこちらを呼んできた。それは、主従契約の呪いが発動した時の澪が、刃更に屈服させて欲しい時に口にする甘えた呼び方だ。

ゴクリ、と刃更の喉が鳴った。澪の身体の柔らかさと、恥ずかしいながらも催淫状態で快楽へ堕ちる淫らな反応と――艶めかしい彼女の表情を思い出してしまったのだ。

このまま澪を破茶苦茶にして、また自分に屈服させてしまいたい衝動に駆られる。

そう思った時にはもう、刃更は傍へと手を伸ばしていた。
そして、もの欲しそうにしている艶かな傍の胸へと触れようとして、
「　それ以上は駄目」
「ゆ、柚希っ？」「っ　ぃ！」
真横からの制止の声に、刃更と傍はハッとなって慌ててソファの上で離れた。すると食後のお茶を淹れてくれたのか、トレイにティーセットを乗せた柚希がジト眼で傍を見て、
「　私から一眼を離した隙に刃更を誘惑するなんて、やっぱり成瀬さんは泥棒猫」
「た、誰が泥棒猫よっ　大体、あたしは刃更を誘惑なんて　」
慌てて外れた胴紐を直しながら傍が言い掛けると、テレビの画面がパッと変わり、
『ぃ、ぃぃ？刃更がしたいなら、良いよ？』
あ、これでは全く説得力が有りませんねえ」
「なに盗撮でカメラ買いで再生してんのよ、万理華っ！」
「てゆか、いつの間に撮影なんかしてたんだ？」
カッとなって怒った傍の横で、「それ半分に刃更が言うと、
「嫌ですね。私が傍さまのエロい姿を逃す訳ないじゃないですか。そのために、起動時間が短い機種を選んだのですよ」
勝ち誇る万理華に対し、傍が実力行使で反撃した。テレビに繋がれたケーブルを引っこ抜き、ビデオカメラを床に叩き付けたのだ。バキッと鈍い破壊音がリビングに響き渡り、
「あ――――っ」
「どう？　これでもう撮影できないでしょ！」
頭を抱えながら悲鳴をあげた万理華に、フィと傍が言い放つ。すると何故か万理華は「あっあっあ」と低い声で笑い出すと、おもむろに懐から何かの封筒を取り出して掲げ、
「甘いですね傍さまっ。どんな事もあろうかと、あのビデオカメラは物損付きの五年延長保証に入っていて――熱っ！　ああっ、保証書まで燃やすなんて酷いですっ」
「酷いのはどっちよ馬鹿っ！　少しは反省しなさいっ！」
火炎魔法で切り札を燃やされ泣きながら抗議する万理華に、傍は顔を真っ赤にして怒鳴る。その首にはもう、主従契約の呪いの痣は浮かんでいなかった。
ふぅっ、危なかった　。
東城刃更は右手をギュッと握りしめると、ホッと胸を撫で下ろした。
危うく理性が十代の青少年の衝動に負けて、傍を襲ってしまうところだった。

そんな刃更と同じく、先程の状況を制止した柚希もまたホッと胸を撫で下ろした。

全く油断も隙もない。
とはいえ、傍が単に刃更を誘惑しようとした訳ではない事は柚希も理解している。
当初、傍は刃更を巻き込まないように、この家から追い出そうとしたという。
たが、それでも自分を守ろうとしてくれる刃更に対し、傍は自身も迷わない事で応える事にしたらしい。そして傍は自分が足手纏いにならないよう、今も必死に強くなろうとしているとの事だった。そこまでは良い　たが、
問題なのはそのやり方。
刃更と傍は魔法による主従契約を結んでおり、互いの居場所が解ったり、主従の信頼関係を深めれば戦闘力が上昇する代わりに、傍が刃更に対して後ろめたさのような裏切りの感情を覚えると、詠唱した魔力の特性に応じた呪いが発動してしまうのだという。
そして　万理帥の魔力で契約した傍への呪いは、「淫魔の『催淫』」というのだ。
同居してすぐ、実際に見たらが早いという事で、不意を突かれる形で万理帥に勢いよく背後から抑された柚希が、刃更と絡み合うような体勢で床に倒れると、それを見た傍が瞬時に駆られたのか、速攻に呪いを発動させた。そして柚希は、傍が刃更によって呪いを解いて楽にして貰うまでの　部始終を見たのである。
その時は呪いの症状は軽くて、服のようにばらく胸を揉まれたたけで回復したが、それでも催淫状態に陥り快楽に乱れた傍は、柚希が息を呑む程の色気があった。
あれでも充分だったのに。
万理帥の話では、実際に主従契約を結んだ時や、胡桃や尚志と戦う前などは、刃更と傍はあの時の比ではない程に淫らな行為をし、主従関係を深めたのだという。
とんでもない話だ。確かに、傍はまた魔王派の襲撃から狙われている、厳しい戦いを生き抜くためには、今後もそうした行為が必要になるのかもしれないが、
このまま成瀬さんにたけ許すのは駄目。
たから万理帥から「傍さまのように刃更さんと主従契約を結びませんか？」と提案された時、柚希はすぐさま頷いた。刃更と互いの位置を感じ合えるようになる戦略的プラスのメリットもあるが、せっかく同居したのたから昔のように刃更と色々仲良くしようと思っていたのに、そうした柚希と刃更を見たら傍に呪いが発動してしまい、刃更が傍にいやらしい事をしなければならなくなるなんて、とてもじゃないが納得できない。よって、
もうひとつの辛抱。
来週には満月だ。刃更と主従契約を結べば自分も傍と同じ条件になる、同じ手を持つ配下同士が対象の場合は、主従逆転が掛からないよう、城址で呪いが発動する事もなくなるという。これまで傍は、柚希よりも数ヶ月も先に刃更との同居を始めていたのたし、その遅れは何としてでも取り戻させて貰う。そのため、
当面の問題は今の状況。
尚志達との戦いが終わった後、柚希もこの東城家で生活するようになったのたが、傍は自分のせいで刃更が幼馴染みの胡桃や尚志と戦わなければいけなかった事や、刃更達の関係が修復できないまま別れるしかなかったのを間近で見ていたせいか、柚希の眼から見ても傍は責任を感じて少しナーバスになっていた。先程の刃更の水泳の授業の件で呪いが発動してしまったのも、きっとその事が尾を引いているのたろう。

でも。

既に充分に苦しんだであろう澪が責任を感じすぎる必要はない。大体　それで自爆みたいに呪いを発動させて刃更にいやらしく報復する様を見せられる羽目になっては、そっちの方が柚希としては大問題だ。よって、

「刃更：：やっぱり刃更も、水泳の授業には出た方が良い」

「？　何でだ？」

キョトンと問い返してくる刃更に、柚希はお茶を注いだカップを渡しながら、

「成瀬さんはなし自意識過剰すぎる。もし刃更が授業を休んで、また自分のせいだと勘違いして発狂されたらかなわない」

は、発情　って、あたしは別にそんなはしたない真似してないわよ」

カッとなって、澪はこちらへ反論する。

「人体、誰が自意識過剰だっていう訳ぇ？」

「澪さまっ、この状況で手札を入れられますと、私の命が非常に危ない事にっ！」

尚を絞められていた万理亜が、慌てて澪の手から逃れた。そして、

「ですが：誰かに刃更さんがプール授業に出るべきというのは賛成ですね。澪さまを取り巻く状況は、いつどのように曲くか解りません。授業に出る事が難しくなったり、それこそしばらく学校へ行くのを控えた方が良くなる事もあるでしょう。そういう場合に備えて、普段はなるべく真面目に授業へ出席しておくべきです」

さもないと、と万理亜。

「刃更さんだけ留年して、澪さま達は進級するとかしたら、お兄ちゃんの刃更さんが格段とかいうおかしな状況に　あれ、ちょっと倒錯してそれもアリですかね？」

「感染もねえ。まあでも、誰かにそれは嫌すぎるな。留年すると、今以上に仲の良い奴を作るのが難しそうだし　やっぱり出た方が良いか。まあでも、今から注文したんじゃ流石に来週の授業には間に合わないか」

と、大を仰ぐようにして言った。

誰かにそうだ、と柚希は思った。同じ年B組の女子で、以前水着を紛失してしまった者がいたが、担任の坂崎に頼んで学校から業者に注文してもらったところ、届くまでに何だかんだで一週間近く掛かっていた事があったからだ。すると、

「ご安心を刃更さん。聖ヶ坂学園の指定競泳水着を作っているメーカーなら、私が知っています。通販サイトで買えば、営業日以内に発送して貰えますから充分間に合います：」

「本当か？　それじゃ助かるけど　何でそんなもの知ってるんだ？」

不思議そうに問う刃更に、万理亜はうふふと笑って、

「ホラ、澪さまのお胸ってちょっと規格外じゃないですか：。だから既製品だと、バストとウエスト、どちらかのサイズが合わないのですよね、澪さま？」

「な、なに勝手に人の個人情報漏洩してんのよ：馬鹿っ」

澪は顔を赤くして万理亜を怒ると、恥ずかしそうにしながら柚希と刃更へ向き直り、

春の身体測定の時に、長谷川先生から『金銭的に余裕があるなら、業者にオーダーメイドしたらどうだ？』って薦められたのよ。あの人も胸が大きすぎて、特注にしないと競泳水着とかは合わないみたいで色々調べたみたい」

とはいえ、

「メーカーの通販は利用したけど、やっぱり結構いい値段になっちゃうし、結局オーダーメイドまではしなかったよね　嬉しい自分に合う水着を作るためとはいえ、本格的なアスリートでもないのに、スリーサイズを人に教えたくなかったし。それこそ、本当にきちんと体形に合わせたいなら、メーカーまで直接出向いて向こうの人に測って貰ったり、体つきをしっかり把握するために写真まで必要とか言うのよ？」

澪は嘆息して、

「だから実際には既製のものを買って、届いてから理亜の魔法で私の身体に合うものにして貰ったのよ。そのうちが最寄りとかるのも全然早いしね」

道理で。成瀬さんのおかしい体形で着られるなんて何かあると思っていた」

説明を聞いた柚希が、学期の水泳授業の際に得ていた疑問を解消していると、

「無駄やたらと魔法で解決するのは感心しないけど、この件に関してはそれで良いと思うぞ　そういうのは不安なのを我慢してまでやるもんじゃないしな」

と刃更。

「それにほあの理亜、メーカーのサイトのアドレスを教えてくれ。後で注文するからさ」

「了解です。　ところで私、今ちょっと思ったんですけど」

刃更に頷きを返した万理亜が、ふと澪を見て、

「澪さまも、競泳水着をもう着買いませんか？」

「？　何であたしまで？」

キョトンとなった澪に、万理亜はうふふと笑いながら、

「もう澪さまってば、そんなおとぼけをい：従契約を結んで刃更さんの配下になってからというもの、報復させて貰う度にお胸をいっぱい揉まれたせいで：ただでさえ派だったおっぱいがさらに成長して、ブラとか水着とか窮屈になってるじゃないですかー」

「つ　：：」

万理亜の指摘に、澪は顔を真っ赤にすると、サッと両腕で胸を庇うように隠した。

その反応は、万理亜の指摘が事実だと言っているようなものだ。

：：やっぱり。

万理亜が口にしたのは、柚希もまた感じていた事だった。このおっぱい女　恥ずらずにもまた育っているかと思ったら、よもや刃更に大きくして貰っていたとは。

許せない　と柚希が嫉妬と険悪の炎をメラメラ燃やしていると、

「あら、澪さまってば、そんな初々しい反応もちゃって。まさかサキュバスの私が、そんなエロい変化に気付かないとでも？　というか、刃更さんが気付いているのに、この私が気付かない訳ないじゃないですか」

え？」

万理亜の言葉に、ギョッとなったように澪が刃更を見ると、

「　　あ　」

刃更は頬をかくしながら、気まずそうに澪から視線を逸らす。その反応に、

「つ……？」

瞬で顔はおろか、うなじや首筋まで薔薇色に染まった澪に、

「何をそんなに驚いてるんですか　澪さまの胸を揉みまくってる刃更さんが、触り心地やボリュームが変化している事に気付かない訳ないでしょう」

とり即答。懐から採寸用のメジャーを取り出し、

「サイズが合っていないものを身に着けていては、せっかく綺麗なお胸の形が崩れてしまいます。ここは発注し直して、色んな意味でHになったそのお胸にピッタリなものにいたしましょう。さあ澪さま、おっぱいです。手始めに、そのHなおっぱいを出していただきましょうか　」

人きなお世話にも程があるわよ　私はね、今の水着で充分満足してるの　」

と澪。

「大体、仮にあたしの　その、胸が本当にちょっと大きくなってて、サイズが合わなくなっていたとしても、とうせ魔法でサイズを変えるなら、何も新しく買わなくても今あるものを変化させれば良いでしょ　」

「まあ、澪さまがそれで良いなら、別に私は構いませんけど」

やれやれと息を吐く即答。そのまま仙希へと向き直り、

それでは仙希さん　どうです？　よければ、水着を新調されてみませんか？」

「私？」

「いや　仙希たって水泳の授業にはもう参加してるんだ。水着なんて持ってるだろ」

「そうよ、それに野中は無理にサイズを変える必要なんてないじゃないっ」

「確かに、仙希さんは手持ちの競泳水着でも大きな問題はないかもしれません　」

それぞれ異を唱えた刃更と澪に、万即亜は頷きながら言った。

「ですが　やはり既製品はどこまで行っても既製品です。しっかりと仙希さんに合わせて変化・調整すれば、仙希さんの身体のラインをより美しく浮かび上がらせる事ができるようになります……それこそ澪さまのように」

そして、

「女の子なら、可能な限り自分を綺麗に見せたいと思うのは言わば本能　まして仙希さんは、澪さまと同じく刃更さんと主従契約を結んでくれるおつもりなんでしょう？　授業で着てクラスメイトの女子にしか見せないものとは別に、主である刃更さんへより綺麗な自分を見せられる水着が欲しいとは思いませんか？」

「ちょいと待て、俺はまた仙希との主従契約について仕完全に納得した訳じゃ　」

「私が水着を新しくして、綺麗になったら　刃更は喜んでくれる？」

口を挟もうとした刃更を遮るように、仙希は万即亜に頷くと、

勿論です　Hでどうこう言っても、刃更さんも元気な男の子ですから。私に任せていただければ、せっかく刃更さんに大きくして貰っ

たお…ぱいを窮屈な水着で見苦しくギュウギュウに潰れても構わないとか言っている、どこかの女子力の低い女なんて思いっきりなくしてあげます」

あ、アタね　」

万即亜の挑発にムッとなりつつも、反論できずにいる澪を横目に、野中仙希はしっかりと頷いて　そして言った。

「　瞬った。私も新しく水着を買う――だから、成瀬さんより女子力を高くして」

2

明けて翌週。

男子より　足先に、澪や仙希ら女子のプール授業が行なわれる体育の前日、澪達が学校から帰宅すると、ネットで注文した刃更や仙希の競泳水着が配達されていた。そして、

さあ、明日の授業の前にさっそく試着とゆきましょう！」

そう言って、万即亜がノリノリで仙希を促した。さらに万即亜が、仙希たけか水着姿になるのは不公平だなどと無茶苦茶を言い出した結果、全員で水着に着替える事になり、

「まったく…何でこうなるのよ」

自分の部屋に競泳水着を取りに行っていた澪は、着に購入した水着を片手に部屋を出ると、階段を下りながら嘆息した。そして　階へとりると、同かった先は脱衣所。特にサイズ変更を行なう必要のない刃更には、　足先に水着に着替えてリビングで待機して貰い、澪達は女子たけで脱衣所へと集まって着替える事になっていた。

水着を新調していない澪は、別に試着する必要はない。それでも万即亜の提案に従う事にしたのは、仙希たけか水着姿になる事に嫌な予感を感じたからた。

たって。

初めてのプール授業の時　澪は水着姿の仙希に眼を奪われてしまった。

同じ水着を身に纏っているのに、仙希は澪や他のクラスメイト達とは別次元の透き通るような美しさを満えていて、その姿に思わず息を呑んでしまったのた。同しなの子の澪ですらそうたったのた。刃更なとそれこそ釘付けもいいたろう。でも、

……っ、あたしたって！…。

仙希への対抗心を抱きながら、澪は脱衣所の扉を開けて中へと入った。すると、

「仙希さん、個室に　そっと糸と生地の隙間にカッタ　の刃を入れるんです」

「……こう？」

でぎり光に着替えていると思っていた仙希が、万即亜の指示に従って自分の水着に何かの作業を行なっていた。そして、

そうです。そのまま、ゆっくりとカッタ　を水平に滑らせて　ね上手です　」

万即亜が賞賛の声をトげた瞬間や　仙希の水着から白いものが切り取られ、脱衣所の床へと落ちた。するとホッと胸を撫で下ろしたように、仙希が軽く息を吐く。

「　ア・タ達、何やってんの？」

タダでも取っていたのだろうか　そう思い、何気なく床に落ちたものを見た澪は、

「　って、本当に何やってんのよア・タ達ぃっ」

それが何か解り、とっさに無悔の声をあげた。

柚希が切り落としたのはタダではなかった。水着の股間部分の内側に縫い付けられている、大事な場所の形が布地に浮きでるのを避けるための『前当て』だ。

思わず唖然となった澪に、万理亜は「し」と人差し指をたてて、

「澪さま、お静かに。せっかく柚希さんが頑張っているのに、大きい声をあげてネタバレしちゃったら、刃更さんへのサプライズにならないじゃないですか」

「サプライズって　ちょっと野中、そんな水着を着たらどうなるか解ってるのっ」

信じられないとばかりに問うと、柚希はカッタ　を片手に「当然」と頷いて、

「万理亜は親切　どうすれば刃更が喜ぶか聞いたら、ちゃんと教えてくれた」

そう言うや、続けて両脇のパッドも綺麗に切り落とした。

「　万理亜っ　」

澪が咎めるまもなく脱むと、万理亜はにれっと笑って、

「おや、とうとう澪さま　柚希さんは、自身の競泳水着をできるだけ刃更さんの喜ぶものにしたいと言ったんです。別に私は嘘をついてはいませんよ。下着は布地が透けているからより刺激的じゃないですか。水着だってそうです。作中の男の子である刃更さんに喜んで貰うなら、これが最も簡単で確実な方法です」

どうです？

「予備のカッタ　をお貸しますので、良かったら澪さまも」

「こよ、万理亜みないわっ　前に言っていたのかある野中と違って、あたしはこれしかないのよ」　そんな事したら、明日の授業で着るものがなくなっちゃうじゃない　」

澪が顔を真っ赤にして叫ぶと、

「そう言うと思って、この万理亜、ちゃんと澪さまの分も買ってあるのです　」

「ごめん、と万理亜は両手で新品の競泳水着を掲げてる。そして、

まったく　本来なら、こういう事は刃更さんの下僕である澪さまこそ率先してやらなければいけないというのに。柚希さんに遅れを取るなんて　澪さまは恥ずかしいと思わないんですか？」

「そんな水着を着るのが、よっぽど恥ずかしいわねっ　」

澪が真っ向から反論すると、柚希がキョトンとなって、

「？　刃更が喜んでくれるのに、成瀬さんがやりたがらない意味が解らない。たったらどうして刃更と主従契約を結んだの？」

「いざという時に、刃の位置を瞬時に取れるようになるために決まってんでしょっ　」

「やれやれ。刃更さんは色々なものを犠牲にしながら澪さまを守ってくれているというのに、澪さまは刃更さんのためにちょっと恥ずかし

い想いをするのさえ嫌なんですね」

「っ　それは　」

苦い表情になったこちらに、

まあ、良いんじゃないですか？　刃更さんは優しいから、普通の競泳水着を着た澪さまの事もきっと愛めてくれますよ。ただ、その刃の道ばたに転がっているようなごくごく当たり前の水着の澪さまと、刃更さんのために勇気を出した水着の柚希さん。どちらに刃更さんが眼を奪われるかは、お　人で並んで見せればすぐに解る事です」

そこで万理亜はわざとらしく嘆息して、

「さあ柚希さん、こんな解らず屋は放っておいて刃更さんに貴女の水着を見せに行きましょう。私も、こういう時のために用意しておいたとっておきのスク水がありますので。まあ　もしかしたら、後から普通の水着を着てノコノコやって来る気の毒な方がいるかもしれませんが、とうか無視してあげて下さい。どうやらその方、人に仕見せられないような身体をしているみたいなので」

「んI　解った」

万理亜に言われた通り、扉いた競泳水着を掴いて上半身は裸の状態だ。

「　何か、剛ケ　ムみたいだな」

水着に着替え、人でリビングで待機を始めてから既に　時間近くが経過している。

待ち時間を使って日課の筋トレを行なったのだが、待っている内にいつものメ・ェ　を　セット終えてしまった。

「仕方ない　Iもうちょっとだけやるかな」

そして、刃更が　セット目に取り掛かろうとしたタイミングで、

いやい、お待たせしました刃更さん。澪さまと柚希さんの支度に、ちょ・とばかり手間取りまして。でも喜んで下さい、その分とっても良い仕上がりになりましたので」

満面の笑みで万理亜がリビングへとやって来て、こちらにピッと親指をたててくる。

「随分と饒舌が良いな。いや、それより何なその格好」

刃更は怪訝に問い掛けた。万理亜の格好が、紺色のスク　ル水着姿なのだ。

東城刃更は、リビングで待っていた。

万理亜に言われた通り、届いた競泳水着を着いて上半身は裸の状態だ。

確かに全員で水着に着替える事にはなったが、学校へ通っていない万理亜がスク　ル水着を持っている道理が解らない。すると、
「私のような駄菓のロリボディに最も映える水着なんて、スク水以外にあり得ないというのに　　刃更さん、もっと年相応に性の知識を磨いていたたかないと困ります」
「お前が俺に覚えさせようとする知識は、いつも厳しい偏ってるなろうか　　調教モノのエロゲ　なんて、常識外れなモノ教科書にさせやかいて」
「聞き捨てなりませんね。たとえ刃更さんでも、言って良い事と悪い事があります。温厚な私でもこまいには怒りますよ。調教モノの　体どこが悪いっていうんですか」
「キに年齢制限たよっ」
エロゲ　をディスられて激キレとか、どんな幼女だお前は。
「で、澪と柚希はどうしたんだ？　もう支度は済んだんなろ？」
あっ、そうでした　刃更さんに調教モノを御教示されて、少し我を忘れてしまいまたか、私かお　人を呼び込む手筈になっていたんでした」
とな即亜が言うと、廊下からリビングへと　人の少女が入ってきた　その瞬間、
「　　」
東城刃更は、思わず息を呑んだ。
初めて目の当たりにした競泳水着姿の澪と柚希に、完全に見惚れてしまったから。
「ふっふっふっ」「ふっふっふっ」
同じデザイ　の競泳水着に身を包んだ彼女達は、少し恥ずかしそうにしていた。
たが、刃更は　人を見るのをためられなかった。
最近また　段と胸が大きくなり、黙実的なプロポ　ションに拍車か掛かった澪。
太股から尻にかけての魅惑のライ　が眩しく、抜群のスタイルを誇っている柚希。
そんな　人の水着姿に、刃更は完全に意識と眼を奪われていた。そのため、
「っ？」
東城刃更が、万理亜の「支度に手間取った」という言葉の意味と、澪と柚希がひとく恥ずかしそうにしている理由に気付くのに、そう時間は掛からなかった。
とうです刃更さん　澪さまと柚希さんの身体に完全にフィットした水着の破壊力は。お　人とも、とっても綺麗でしょう？」
悪戯っぽい笑みを浮かべて万理亜がそう言った瞬間、
「ふっふっふっ」
澪と柚希は、恥ずかしそうにビクンと身を震わせた。
それでも、東城刃更は見てしまう。
澪と柚希は水着のドから胸の先端を浮かせ、股間にいやらしい食い込みを作っていた。

成瀬澪は、頬を赤く染めながら刃更の視線を感じていた。
刃更に見られると、どうしてもそこを意識してしまう。そのため、
「ふっ、やだ……」
澪は刃更の視線を感じた己の胸の先端が、いやらしく尖ってしまうのを止められない。
これでもし、下まで反応してしまったら――そう思うと、すぐにでも手でそこを隠してしまいそうになる。
たが、澪は必死に思い止まった。隣に柚希がいたから。
パットや前当てを削ったトに、万理亜の魔法で身体に水着をフィットさせられているのは澪だけではない。柚希もまた、澪と同じ条件同し状態でこの場に立っている。
胸の先端も澪と同じくらいに浮いてしまっている、あそこたって同じだ。
何より――柚希も、澪と同じように恥ずかしそうにしていた。
それでも柚希は、自分を　払隠さずに刃更へと見せていた。たから、
「ふっふっふっ」
負けたくない。そう思い、澪がその場に踏み止まっていると、
とうです刃更さん、お　人ともお似合いですよね？」
「　　いや、勿論！　それは、たから　　」
横からの万理亜の言葉に、途端に刃更がどろもどろになった。
あ　　
そんな刃更の慌てた反応が、澪と柚希の緊張を和らげた。たから恥ずかしさを得なからも、少した精神的な余裕を取り戻し、
「ねえ刃更　今、あたしと野中のとこを見てたの？」「！　千両に答えて、刃更」
悪戯っぽい笑みと共に、からかうように尋ねた澪と柚希に、
いやっ、お前らかそんな格好してたら！　見ちまうに決まってるなろ」
降参とばかりに言ってきた刃更に、澪は心の中で笑った。いつもは刃更に翻弄させられてばかりたか、たまにこうやってからかう側に回れるのはやはり楽しい。すると、
「　さて、それではそろそろお風呂場へ移動しましょうか」
とな即亜が言った。
「な、何で風呂場に行く必要があるんたよう」
困惑する刃更に、万理亜はふぁっと笑って、
「ご心配なく。この事は、澪さまと柚希さんには既に承知していただいてますので」
「　　そうなのか　人共？」
ギョッとなってこちらを見た刃更に、
「　　うん」「亜証！」

澪と柚希はコク、と頷きを返した。

隣に　自分達は、与助邸から宿舎へ移動する流れを聞いている。

そして、そこで自分達が刃更に何をしてあげるのかも。たから、

「さあ刃更さん、とうぞこちらへ。お楽しみの時間です♥」

与助邸に手を引かれる刃更と共に、澪と柚希は宿舎へと向かった。

澪と柚希がリビングへ来るのが遅れたのは、水着の準備だけが理由ではない。

明日は女子のプール授業があるのとは別に、夜に行なわれる大切な用事がある。

それは、この人間界では満月の夜にだけ使える魔法による儀式、主従契約だ。

結ぶのは刃更と柚希。だが、その前に与助邸は一つの注文を付けてきた。それが、

「これから皆さんには、お風呂で主従としての親睦を深めていただきます」

宿舎へと移動すると、与助邸はこちらへと振り返って言った。

「これは明日、刃更さんと柚希さんが主従契約を結ぶ前に必要な事です」

「ちょっと待ってくれ？　どういう事だ？　全然理解が解らないんだが」

「柚希さんが刃更さんと主従契約を結ぶという事は、同じ配下として澪さまとも仲良くする必要があります。本気で仲違いをして、主である刃更さんの足を引っ張るような事になっては、配下として失格ですから」

困惑する刃更に、与助邸は先ほど澪達にした説明を繰り返して、

これは柚希さんだけでなく、澪さまや刃更さんにも言える事です。心から柚希さんを新たな刃更さんの配下として認め、受け入れなければいけません。これから先、今までの強敵との戦いが待ち受ける可能性がある以上、一つの小さなムワクの乱れが命取りに繋がってしまいかねませんから。この事は、先程言ったように澪さまと柚希さんにはご納得いただいています。後は、刃更さんだけです」

「いや、でも俺は　」

「解っています。刃更さんはまだ、柚希さんとの主従契約を迷っているんですよね？」

苦い表情になった刃更に、与助邸は頷いて、

ですから刃更さん、こう考えてみてはどうです？　これは刃更さんと柚希さんが、本当に主従契約を結んでも大丈夫かどうかを見極めるためのテストだと」

「テスト……？」

刃更が眉を顰めながら言うと、水着姿の与助邸は「はい」と頷いて、

恐らく刃更さんが心配しているのは、私の魔力を使って主従契約を結んだ事で刃更さんや柚希さん、そして澪さまが後悔してしまう可能性についてですよね？」

「ぅ……ぅぅ……」

その問い掛けに、束縛刃更は肯定の沈黙を返した。

主従契約魔法は、魔族の魔法である。そのため刃更と柚希が主従契約を結ぶとしたら、与助邸か澪の魔力で詠唱するしかないのだが、先代魔王ウィルヘルトの力を受け継いでいる澪に詠唱を任せれば、呪いが発動した特点で柚希は重力魔法で圧し潰されて肉塊になってしまいかねない。つまり刃更と柚希が主従契約を結ぶとしたら、澪と同じようにサキュバスである与助邸の催淫特性に縛られるしかないのだ。

しかし――柚希は、催淫の呪いが強く発動したらどうなってしまうかを知らない。

無論、戦闘面だけで言えば澪と主従契約を結んだ事は間違いではない。主と配下の関係が深まる事で得られる戦闘能力の強化がなければ、『魔槍』『白死』を操る高志通との戦いに勝利する事はできなかったろう。

……たけど。

先日のリビングであったやり取りのような、澪の方から刃更へ抱き付いてくるような事は、主従契約を結ぶ前には考えられなかったものだ。

無論、澪があいう反応をしてしまうのは催淫の呪いのせいだろう。

たが刃更も主従契約を結ぶ前は、たとえからかう目的であっても、あんな風に澪を抱き寄せるような真似は間違ってもしなかったし、何よりできなかった。

しかも最近は、澪に対して独占欲にも似た感情が芽生えているような気がする。

妹として、家族として澪を人一倍に大切にしたいと思う力で　彼女の全てを自分のものにしてしまいたいという衝動に駆られてしまう瞬間がある。

勿論　それは刃更くらいの年頃の男子としては正常な反応なのかもしれない。血の繋がっていない女の子と一つ屋根の下で暮らしているのだ。それが澪や与助邸のような、とびきりの美少女であれば尚更である。むしろ、よく理性を保てているんだろう。

そして、何たかんたで信頼関係が深まっていると実感できる事も少なくない。それはこれからの戦いを生き抜くとで、自分達が困難を乗り抜けるための助けになる筈だ。

それでも快楽を用いて万一にも主を堕落し、関係を深めてきた代償として、刃更と澪の関係が普通の家族や兄妹とは言えないものになってきているのも事実である。

しかし、今はこの主従契約を解消する訳にはいかない。澪を狙っている現魔王派や、ノルギアやその配下を相手にするには、現状の自分達の戦闘力ではまだ心許ないのだ。

それに。

先日、都心の繁華街でデートしている最中に柚希が突然姿を消した時は、それこそ刃更は気が狂いそうになる程の焦燥を味わった。これから来る強敵と戦い勝利するためにも、澪や与助邸、さらには柚希を守るためにも、柚希と主従契約を結んでおくというのは有効な手立てのつである事は間違いない。

でも。

高志通との戦いの後、もう一度と会えないかもしれないと思っていた柚希と、こうして一緒に暮らせるようになった。やっと昔のような関係に戻れる機会を得たのだ。

それなのに、もし柚希と主従契約を交わし、彼女を快楽で屈服させるような事になれば　たとえ幼馴染みという事実は変わらないとしても、これまでのような関係ではいられなくなってしまうかもしれない。無論、良い方向に変わるなら良い。たが、悪い方向へ変わる可能性もあるそう思うと、どうしても刃更は躊躇ってしまっていた。すると、

「　ですから、キ従契約を結ぶ前に試して確かめてみるんですよ」

と乃理弥。

「柚希さんが、嫌がる事なく心から配下として刃更さんに服従できるのか　また刃更さんも、柚希さんの事をきちんと屈服させる事ができるか。そして、そんなお二人の事を澪さまも認められるかどうかを」

恐らく乃理弥は、これまで刃更達ができたような事を柚希に見せたり――それこそさせたりする事で、柚希にキ従契約の真実を見せようとしているのだろう。発動した呪いを解く為に、配下がキに屈服させて貰うのとは別に、キ従関係を深めるには、時にキが配下を強烈に屈服させる事が必要になる。それを明日の本番の前に試してみる事で、刃更と柚希が本当にキ従契約を結んでも問題ないか見極めてはどうかと言っているのだ。

「　ま、瞬った」

たから、刃更は了承の頷きを放った。恐らく自分達は、いつものようにサキュバスである乃理弥を責めるような事をさせられる羽目になるのだろう。

たが、東城刃更は仕方がないと納得する事ができた。それ位の事もできないままキ従契約を結んでしまったら　自分達はいつか、必ず後悔する事になるのだから。

4

それでは、刃更さんはこちらの椅子に座って下さい　澪さまと柚希さんは、刃更さんの身体を洗うご準備を」

そう笑みと共に乃理弥に言われ、

「ふ～ふっつ」

成瀬澪はゴクリと喉を鳴らした。澪と柚希は脱衣所で水着に着替えていた際に、乃理弥から、ういうやりかで刃更の身体を洗うかの指示を受けている。たから、

っ、これくらい、別に平気なんたから　っ。

澪は口を噤いだせた。今の刃更は勇者の　核ではないのに、澪のせいで現魔王派の魔族との戦いに巻き込まれ、かつての幼馴染み達と戦わなくてはいけなくなった。

学校や日常での生活たって色々と制限されている。それらは刃更が澪を大切に想ってくれているからこそ、仕方なく我慢してくれているものだ。だから澪は、そんな刃更の気持ちに報いるためにも、申し訳ないと思うような事たけはしたくないと思っている。

でも。

だからといって、刃更の優しさをただ享受して、彼に甘えているだけのつもりはない。

もしも自分に刃更が喜ぶような事をしてあげられるなら、何たってしてあげたかった。

それはきっと、柚希も同じなのたろう。

柚希は五年前の悲劇の時、刃更に命を救って貰いながら、「罪」から追放される刃更を黙って見送る事しかできなかった事を後悔し続けているらしい。また先日の尚志や胡桃との戦いの時も、刃更に色々と心配を掛けてしまっていた。簡単にそれらの罪滅ぼしができるなどとは思っていないそうたが、刃更とキ従契約を結ぶ事で少しでも彼の役に立てるなら構わないと言っていた。無論それ以外にも、澪たすか刃更とキ従契約を結び、刃更に屈服させられている現状は不公平たとも言っていたが。

そうよ。

澪のためにも、柚希のためにも、刃更は多くの犠牲を払ってくれている。

これは、少しでもその恩返しができるチャンスなのた――そう自分に言い聞かせ、

「　始めるわよ、野中　」「　いつでも」

こちらの呼び掛けに、隣の柚希が応じて　そして澪は柚希と向かい合わせになると、それぞれ紐紐をずらして自分達の水着を脱ぎ始めた。

そんなこちらに、

「う　」

バスチェアに腰掛けている刃更がとさに息を呑んたが、先程の乃理弥の説明で、澪達がどういう事をするか、おおよその察しか付いていたのたろう。頬を赤くしながらも、こちらから視線を外したり、制止したりしてくる事はなかった。刃更なりにキとして、配下の澪がする事を受け止め、配下になろうとしている柚希の事を見定めてくれようとしている　そう思うと、恥ずかしさはあったけれど、そんな刃更の気持ちに応えたくて、

「……っ」

澪と柚希はお互の肩紐を外すと、意を決して両手で水着の胸元の辺りを下へと引っ張った。すると　人の胸が、まるで勢い良く、露れるように露山して　その先端までもが露わになった。そして、そのまま騎が見えてしまう所までずり下げると、

つ　ああ。

また刃更に見られてしまった。そう思うと、恥ずかしさに澪の躰が熱くなった。

これから自分達が刃更に何をし、そして彼に何をされるのかを想像する。

しかし、同時に覚悟も決まった。ここまで来たら、もう止める事などできない。たから、

「ふ～ふっふっ」

澪はギディノブの蓋を開けると、自分の胸へと掛けていった。そして、とろりとした液体をたっぷりと己の胸のトや谷間に絡めると、かに直接刃更の方へ行く事はせずに、

「野中　」

同じように競泳水着を下ろし、胸を露山した柚希へと向き直った。すると、

「　ん」

柚希もコクンと頷き、澪へと向かって膝立ちになる。たから、こちらも同じように膝立ちになって彼女と目線の高さを合わせた。そして刃更のすぐ眼の前で、互いに胸を赤くして見つめ合った澪と柚希は、相手の背中へ両手を回すと――どちらからともなく抱き合い、刃更によく見えるように、ながら、お互いの胸をいやらしく擦り合わせ始めた。

「なっふっ」

「どうしたんです刃更さん？　そんなにビックリする事でもないでしょう？」

驚きの声を上げた刃更に、方理弥がふふっと笑いながら言った。

「キの服を乾かせるのも配下の務めですよ……」

その言葉の通りの事を澪達はしていた。自分にも柚希にも断ってこんな趣味はない。

だが、刃更が喜んでくれるなら――その一心で、澪はボディソープでヌルヌルになった胸を柚希と擦り合わせ、いやらしい形にしながらクチュクチュと泡だてゆく。すると、

「っ、ト、やだ、あたし、っ。

感覚としてはくすぐったいだけなのに、刃更に見られている――その事実に躰の奥が甘い熱を持ち、澪と柚希の胸の先端がとんとんと弾き始めてしまう。そして、

「い、成瀬さん、私……」

柚希が甘い困惑の声をあげた。見れば澪のすぐ眼の前で、また新たな従契約を結んでいないため快楽に不慣れな少女が、いつの間にか始めかしい女の顔になっていた。

「野中さ……」

いつもの感情を見せない柚希からは信じられないようなその表情に、澪は自分がとれだけ恥らな事をしているのかを即解する。それでも、

っ、刃更のためだもん。

そう思い、澪は予め即席から教わった通りの事をした。両手で胸を掴んで柚希と胸の先端の位置を合わせると、いやらしく円を描きながら互いのそこを擦り合わせ始める。

「んぐ――あ、や、ん――ぁ、っ――あ、はぁ、んぐ」

慣れない行為に最初はぎこちなさが目立ったが、やがてコツを掴んだら、澪も柚希も愛しい手へできるようになった。あっという間に、澪と柚希の胸の先が言い訳できない位に硬らに張り詰めてしまって、刃更に見られている羞恥と興奮で甘い声が漏れてしまうのを抑えられなくなった頃には、

「成瀬さん、」うん」

澪は柚希と共に膝がちの状態を止め、互いの腰にギュッと両脚を絡め合わせていた。

そして互いの乳首を強めると、ボディソープを追加して互いの胸を激しく擦り合わせ、

あんっ、やぁ、は、」やぁ、ん、あ、あぁんっ」

淡い快楽を得ながら、より泡だちを強めてゆく。すると甘い熱を得て柔らかさを増した澪と柚希の胸のよで、フワフワの泡が山来上がった。たから澪は柚希と足を絡め合うのをを止めると、互いの躰の間にスペースを作り、

「刃更、来て」

瞳をとろんとさせながら、自分達を見ている青年を誘うようにして呼んだ。

「……」

刃更は何も言わなかった。ただ澪達と同じように、刃更もとっくに覚悟を決めていたのだろう。刃更は服ったままバスチェアから立ちあがると、澪達の間に胡座をかくようにして腰を下ろしてくれた。余計な言葉がなくても想いが伝わっている事が嬉しくて、

「始めるね」「……刃更、私達が綺麗にしてあげる」

澪と柚希は頷かがこそうに言うと、刃更をた仏から挟むようにして足を絡め合い　自分達の胸で刃更の全身を洗い始めた。柔らかい乳房

と、硬り詰めた先端――その両方を余すところな〜使い、澪達は刃更の身体へいやらしく胸を滑らせ始めた。その感触、

「あぁんっ……やぁ、んうっ……ふあぁん♥」

澪の口から、勝手に甘い声が出てしまい、

うそ、刃更が相手とは急に……っ

澪は、柚希と胸を擦り合わせた時とは得られる感覚が全く違う事に気が付いた。

先程までの　すくったさとは明らかに異なる、熱く甘い感覚――それはきいと、澪の躰がまた　段と開発されてしまったからだ。そのため、柚希が恥ずかそうにしながらも大胆に刃更を洗えているのに対し、澪は上手く洗ってあげられずにいた。今の澪はもう、刃更の配下として彼に触れられたり、彼に奉仕できる事に悦びを感じてしまう躰になってしまっていた。その事実に愛えるような羞恥を覚える　方で、自分を大切にしてくれている刃更に己を捧げられているとも思え、澪は淫かに混ら〜さにも似た悦びを得る。

しかし、そんな事を思っている内に、柚希に刃更の背後へと回り込まれ、

「……刃更、背中を洗ってあげる」

彼女に、刃更の背中へ胸を滑らせるのを許してしまった。

キへの奉仕として、重要なポジションを取られた格好になり、

「おやおや澪さま　ほんやりして先を越されるなんて、先輩として失格ですね」

「う　」

意地の悪い笑みを含んだ力開亦の指摘に、澪はキュッと唇を噛むと、

「お願い刃更……あたしの胸で、貴方の手を洗って」

回かい合うようにして刃更の膝の上に座ると、彼の手首を掴んで己の胸へと導いた。

澪が胸で洗ってあげるのではない　そんな事は、とっくに胸の谷間で挟んで腕から手首まで綺麗にしてあげている。

澪は刃更に己の泡だらけの胸を触らせると、自分の手を重ねるようにして、

「んっ……いいよ、刃更の手の平も、指の間も……あたしの胸で綺麗にして」

そんな澪の言葉の意図を開解したのか、刃更はしばし沈黙してから、

「……行くぞ」

そう言うなり、刃更は澪の胸を強引に揉み始めた。刃更の指と指の間からはみ出るほど強く揉まれ、自分の胸が刃更の手に合わせていやらしく形が変わったのを見た瞬間、

「やっ　はぁっ、ぁあぁぁあんっ♥」

柚希とた　ふりと泡だたせ合い、さらに刃更の躰にも擦りつけて快楽を得ていた澪は、あ……という間にビクンと達してしまった。

っ、大丈夫か」

とっさに刃更がこちらの胸から手を離そうとするが、

「途中で止めちゃ、駄目……ちゃんと綺麗になるまで続けて……っ」

澪は刃更の手の上に自分の手を重ねて、己の胸を刃更に触らせ続けた。

柚希はまた刃更の背中を洗っている。澪が先に声をあげる訳にはいかないのだ。

すると、絶頂した澪に刃更は無言で頷いて、澪の胸で手を洗うのを再開した。
あっ♥　ああぁ…？　やっ、はあっ　ああぁんっ♥　はっ、あぁぁぁぁぁっ♥」
たから、澪はあっという間に絶頂の痙攣へ呑み込まれた。刃更の膝の上ではしたなく腰を浮かせ、激しい快楽にいやらしく尻を震わせながら、何度となく快楽を噛まらせてゆく。
それでも、今度はもう澪がどれだけ嬌声を上げても刃更は止めないでくれた。
たから――そのまま五分が経過した頃には、澪は完全に理性を快楽にとろけさせ、
「あ　ん　あ、あ　っ　ぁぅ　」
刃更の膝の上で、甘い吐息を漏らす事しかできなくなっていた。そんなこちらへ、
「いけませんねぇ、澪さま…。奉仕する答えた澪さまが、主である刃更さんにそのように甘えてしまうとは」
意地の悪い笑みを浮かべながら、万理華が言ってくる。
そんな澪さまには、お仕置きをしなければいけませんね」
「…ぉ…ぉ…ぉきぃ…？」
とろんとした瞳で澪が問うと、万理華はこちらを無視して、
「刃更さん、柚希さん…ちょっと良いですか？」
そう言って、何事かを刃更と柚希に囁いた。すると、
「それは…流石にそれはやりすぎだろ」
私も仮付けやりすぎとは思わないけど、ダメにされるのは嫌」
刃更と柚希は明らかに難色を示す。たが、それでも万理華は譲らずに、
「この配役は仕方がないですよ　配下を屈服させるのは、主である刃更さんの役目。そして柚希さんはまた刃更さんの主式を配下ではない以上、屈服させられるお手本は澪さまが見せるしかありません。柚希さんは主となる刃更さんを手伝いなから、先輩である澪さまから主従契約を結んで配下となる事の心得を学んで下さい。より強く、より深く、より効果的に主が配下を屈服できるように手伝うのも、配下としての重要な務めですよ」
そして、
「刃更さんも…いざという時に、澪さまがどういう事になるかを知っておきたいとは思いませんか？　それに柚希さんとも従契約を結んで後悔したくないというなら、これ位の事をやらないと本当に問題ないかどうか見定める事などできないと思いますよ」
」
万理華の言葉に、刃更はしばしの無言の後、
「…ったく、解った。お前の言う事も一理あるし…やろう」
その気になっていたたけて良かったです。柚希さんはどうします？」
「刃更がやるなら、私も構わない　万理華の言った通りにする」
そして、と柚希。
私とも従契約を結んでも問題ない事を、刃更にきちんと証明する」

「結構…それでは、早速始めましょうか」
万理華は満足そうに頷くと、澪の見ている前で刃更にあるものを手渡した。
澪は意識をとろけさせたまま、刃更が受け取った物の名称をうわごとのように呟く。
メ…ャ　？」
そう――それは探す用のロ　ル型メ…ャだった。しかも、澪はそのメ…ャに見覚えがあった。先程、競泳水着を澪や柚希の体に魔法で合わせる際に使用したものだったからだ。間違いない。本体の側面にある「5M」という表記が、探す用のものにしては珍しい長さだった事もあってよく覚えている。すると、
「ごめんな、澪…」
申し訳なさそうに眼を伏せた刃更が、メ…ャの本体から計測に使うビニ　ル製のテ　プ部分を引き出すと、澪の胸から背中へと巻き付け始めた。
「やぁ　ん、刃更…何、を　っ」
絶頂の余韻で体に力が入らないまま、それでも澪が身をよじらせると、
成瀬さん、動いたら駄目」
いつの間にかこちらの背後へ回った柚希に両手を掴まれ、澪は頭の後ろへ己の両手を持っていかれる。
「野中　んっ、離して　」
とうにかして逃れようとするのだが、まるで力が入らなかった。そうこうしている内に、澪は刃更の手で肩から鎖骨を通って胸の谷間をトからトへとテ　プを通され、乳の乳房の下をバ　スライ…に沿うように背面へ　そして肩の後ろを抜けてよに持って行き、今度は乳房から同ようにの胸へと通されていた。そうして胸の周囲でめの図を描くようにして繰り返しメ…ャを巻かれた澪は、自分の胸がいやらしく強調されている事に気が付いた。ここまで来れば、万理華が刃更にさせようとしている事が嫌でも解る。
…これ、って…。
澪は　刃更によって、いやらしく縛られていた。
「やっ…駄目え、あぁ…っ」
何とか抵抗しようとしたが無理だった。澪の胸をいやらしく拘束　終えた刃更は、柚希によって頭の後ろに回された澪の両手を残りのテ　プでグルグル巻きにして縛り、さらには腰のタオル掛けのバ　へと結び付けて澪を繋いでしまう。
い　とうして、こんな事　？」
絶頂の甘い余韻で力が入らず、発情の床に乙女座りになった状態で問う澪に、
「澪さま　これは、もしもの時に備えた訓練ですよ」
こちらの隣に腰を下ろした万理華が答えた。
「　訓練？」
そうです　今までは幸い、澪さまが敵に囚われるような事はありませんでしたが、今後これまでのような強敵と戦っていかなければならない事を考えると、澪さまが敵の手に落ちてしまった場合のリスクを知っておく必要があります。主従契約を結んで配下となっている澪さまは、敵の手に落ちてしまうと主である刃更さんの足手纏いになったと感じて、呪いを発動させてしまう危険性がありますので　」

ですから、
「ここは敵に囚われてしまった状況を想定し、身体の自由が利かない状態で呪いが発動するとどうなるかを経験しておきましょう　度でも経験しておけば、そうなってしまった時への心構えや対処が全然違ってきますから」
「この状態で、呪いを？」
そんなの　体どうやって　そう儚が思っていると、
「それでは刃更さん、柚希さん　お願いします」
とり即事が言った。
たから儚は、横の方向事から刃更達を見るために下面へと視線を戻し、
「あ――――　」
そして成補儚は、方即事が口にした言葉の意味を理解した。
儚の見ている前で刃更が柚希を後ろから抱きしめ　彼女の胸を揉み始めて、
「　っ？」
その光景を目の当たりにした儚が、反射的に喊妬の炎を燃えトからせたのは必然だった。
淫猥の呪いか発動したのは――その直後の事だった。

柚希は刃更に胸を揉まれながら、眩に繋がれている儚の前に浮かんだものを見た。
キ従契約の呪いが発動している事を報せる、首輪のような紋――そして、
「やっ　ああ　っ、あああああああああ　っ」
激しい淫猥状態に陥った儚が、泣きそうな顔になりながら甘い嬌声を上げた。
普通なら、すぐにでも刃更が儚を楽にしてやるのたろうが、今回ばかりはそうはいかなかった。そう簡単に解放しては、囚われの身になった場合を想定した訓練にならない。
それに。
気の毒だとは思うが、これは柚希が刃更とキ従契約を結ぶためにも必要な事である。
だから、柚希は己の役目を果たした。
ん・　お願い刃更、もっとして　」
自分か胸を揉まれている様を儚に見せつけるように　て、刃更へと懇願した。
「私かこの五年でどれだけ変わったかを、ちゃんと知って　私と刃更の寸場は少し違ってしまったけれど――それでも私達かまたあの頃に戻れるって証明して」
儚を焦始させられるように、自分と刃更の絆を強調するのも忘れない。
だが、柚希か口にしたのは紛う事のない本音でもあった。
おかしな遠慮をする必要などなかった、あの頃の自分達に戻りたい　それは柚希か刃更と再会した時から抱いていた願いた。幼馴染みとして当たり前の事を言い、そして仲間として最善の事をする。家族同然のように付き合い、生き抜くために必要な事ならそれを当然のようにに行なっていたあの頃に。勿論、五年前は足を引っ張る事しかできなかったけれど、今はもう違う――刃更の隣で、彼と肩を並べて戦う事ができる。たから、
お願い、刃更　」
儚が囚われた場合を想定するための行ないをしながらでも良い。野中柚希は、東城刃更とキ従契約を結んでも大丈夫な事を知って欲しかった。すると、
「　柚希」
刃更はそっと柚希の名を呼ぶと、本格的に柚希の胸を揉かめ始めた。
儚ほどの巨乳ではないか、この五年の間に大きくなった形の良い胸を刃更の手で揉まれ、その柔らかさを確かめるようにいやらしい形状へと変化させられて、
「はあ、ぅんっ、ふぅ……ああ！♥」
柚希はいすぐったさの中に、痺れのような感覚を得て甘い声を漏らした。すると、
やっ、何でそんな　野中は、キ従契約　結んでないのに　」
こちらを見ていた儚が、おかしな事を言い出した。たとえキ従契約などなくても、好きな男の子に触れられた女の子がどうなるかなど、儚自身が知っているたろうに。
そう。柚希は今、間違いなく女の快感を得ていた。
幼い頃は触れられてもくすぐったいだけたったが、その行為の意味を知っている今は、たとえサキュバスの淫猥状態ではなくても、儚かな羞恥と快楽を得る事ができる。
たとえ儚のようにキ従契約を結んで躰を開発されたり、淫猥の呪いか発動したりして絶頂へ至るような強烈な快楽を得る事はできなくても。本来の性感を刃更に刺激された事で、純粋な快感を得る事は柚希にもできるのた。たから、
「っ、刃更、お願い、もっと」
胸か切なくなるような感覚に甘えた声で呼ぶと、腰まで下ろしていた水着の後ろから中へと手を入れられ、尻を揉まれた。すると胸よりも強い痺れが腰から下腹部へと走り、
や　あぁっ、刃更ぁ♥」
刃更の腕の中で彼の名を何度も呼びながら、柚希はいやらしく躰をくねらせた。すると、どんとん柚希の水管がずり落ちて　やがて、とうとう床へと落ちてしまう。
それは柚希か、完全に裸の状態になったという事た。たから、
やぁ、駄目」
刃更に胸と尻を揉まれた状態で、野中柚希は激しい羞恥に身をよじらせた。
柚希の最も恥ずかしい場所を、背後の刃更が見る事はできない。
たか眼の前の儚には、柚希のそこが女の反応を示しているのが丸見えた。
自分と刃更の関係を見せ付けるのは良い――たが、そこまでを見せるつもりはなかった。

たから――手の取りかえさに、柚希は慌てて手でそこを隠した。そして、

「……っ」

勇気を振り絞り、澪が一体どんな顔でこちらを見ているのかを確認する。

だが、柚希が得た心配は全くの杞憂に終わった。

柚希と刈更の行為がエスカレートした事で、抱いた嫉妬も薄くなってしまった結果、催淫の効果が薄れよかったのだろう。

「……ぁ」

甘い吐き声を漏らす澪の瞳は、もはや完全に焦点を失っていた。

5

何だろう、これ……？

視界に薄っすらと白い霧が掛かったような状態で、成瀬澪は幸せを得ていた。

先程まで壮おおい程の切なさを得ていたのだが、いつの間にかそれは消え去り、今はひたすら甘い心地良さしか感じなくなっている。

体、自分はどうしてしまったのだろう　ぼんやりとした視界の中、澪は周囲の様子を窺うように視線を巡らせた。すると、

あ　野　中　？

すぐ眼の前に柚希の顔があった。だが、彼女の瞳はこちらを見ていない。柚希は、澪の左胸の先を夢中になって吸っていた。そして――成瀬澪はこれまでの事を思い出す。

そうだ……あたし達、お風呂場で刈更を悦ばせる事になって……。

自分達は、刈更を楽しませるようにと命事から指示されていた。柚希は、その続きをしているのだろうか。柚希に胸の先端を吸われる度に、仄かに甘い感覚が胸の奥に広がって、

……野中、何か赤ちゃんみたい……。

柚希の事が可愛く感じられ、ふわっと笑った澪は彼女の頭を撫でてあげようとした。

たが　失敗した。何故か、両手を動かす事ができないのだ。

え、どうして……？

同事かと思った澪は、そこで新たな事実に気が付いた。自分の胸が何か紐のようなもので縛られており、さらに背後から誰かの手で両手首に縛められている。

柚希は、そうして誰かに揉みしだかれている澪の胸を吸っていた。

何、これ……？

自分の胸が信じられない程いやらしくされている事に驚いた澪は、まずは己の胸を縛っているものが　体何なのかを確認した。そして、

これって……ブラジャー？

その正体を思った直後、成瀬澪は完全に己が置かれている状況を思い出し、

「っ」

思わず息を呑むと、澪の意識が戻った事に気付いたのか、柚希はこちらの胸から口を離した。すると、澪の胸の先端から柚希の唾液がいやらしく糸を引いて、

「　やっ　野中あ　」「成瀬さん　」

澪が甘い声を漏らすと、柚希は催淫の呪いが発動していない筈なのに、とろんとした瞳でこちらを見ている。完全に女の顔になった柚希は、壮絶に綺麗だった。そこへ、

「ふふっ、澪さま、お早うございます」

水着姿の与明が、晴れやかな笑みを浮かべながら迎えの言葉を掛けてきた。

きっと澪が覚えていないだけで、こちらが催淫の呪いで意識を飛ばしている間に、色々な事があったのだろう。柚希がこんな状態なのも、そのせいに違いない。そして、

「ご自分がどのような状態だったかお知りになりたいでしょうか、あれだけの絶頂を迎えればそろそろ体力も限界の筈です。後できちんと教えますから」

さあ、

とうか刃更さんに屈服して――楽になられて下さい」

「え――？」

と困惑の声を上げると、澪は背後から躰を抱えられた。

そして後ろを向かされると、それまで背後から自分の胸を揉んでいた人と眼が合う。

「　刃、更　？」

澪は茫然と彼の名を口にした。先程までタオル掛けに繋がれていた筈なのに、いつの間にかテ　ブは解かれ、代わりに澪は刃更の膝のように座っていたようだ　た。そして、

「ごめんな、澪　」

そう告げた刃更の唇が、ゆっくりと澪の右胸へと近付いていく。たから、

やあっ　主、待って刃更、そこは駄目え　っ　」

澪は嫌しい係りを得た。刃更に胸を吸われるのはこれが初めてではない。

胸の先端を刃更にしゃぶられる事で得られる、凌ま　しい愉悦を澪は知っている。

たが、そこはたいた今まで柚希が口を付けていた場所なのだ。

先程まで刃更と柚希がしているところを見せられたたけでも、あんな事になってしまったのに。もしそんな事をされてしまったら　そう思って必死に身をよじらせるのに、既に何度となく絶頂を迎ねていた澪は抗う事ができなくて。そして、

「あ＋、ああぁ、っ！」

もう逃げられないのだと悟った瞬間　澪は己の両脚を刃更の腰へキュッと絡めた。

そして、恐れていた事が現実になったのは直後の事だった。

あ、やい　はあっ　っっああああああああああああっ♥」

刃更に左胸を吸われてしまった澪は、即座に催淫の呪いを発動させ、かつてないような絶頂と共に盛大に嬌声を響かせた。

野中柚希は、刃更に胸を吸われた澪が激しく絶頂する瞬間を見た。

前にも一度、澪が刃更に屈服させられるのを見た事はあったが、

凄い、こんなに　"

その時とはまるで比べものにならない。女の快楽を極めている今の澪は、壮絶に艶やかだった。そして澪は、あまりの絶頂からか刃更の膝の上で腰を跳ねていて、

あ　"

柚希は、澪が腰をいやらしく振る度に「クチュ、クチュ♥」といやらしい水音がしてしまう位に己を濡らしていて、

「　綺麗でしょう？」

ふと　そんな澪を見ていた柚希の耳元に、与明が笑みを含んだ声で囁いてきた。

「大丈夫です、柚希さんもすぐですよ　もう、あれだけの事ができるんですから」

「　っ　」

柚希は先程まで自分が刃更と共にしていた事を思い出し、頬を茜色の色に染めた。

そうだ――自分は先程、澪の見ている前で刃更に胸と尻を揉まれて甘く喘え、さらには催淫の呪いで意識を朦朧とさせた澪を薬にする刃更の手伝いをした。

澪の最大の弱点である胸を、柚希は刃更と一緒になって滅茶苦茶に愛撫し、意識がしっかりするまで何度となく彼女を絶頂させた。快楽によって澪が意識を朦朧とさせる程の呪いを発動させておきながら、それ以上の快楽を与えて呪いを解いてやったのである。

そして柚希の手と口が、ボリュ　ムのある澪の胸の柔らかさと、その先端の感触や味をた　ふりと知った頃　与明が柚希にも駄付きをくれたのである。これだけできるのなら、明日の夜に刃更と主従契約を結んでも何の問題もないだろうと。

驚いた柚希が刃更を見ると、彼はこちらの頭のトに手を置いて、そして優しく撫でてくれた。言葉は無くてもそれだけで許されたのが解って　嬉しくなった柚希は、そこから夢中になって澪への愛撫を手伝った。刃更の期待に応えようと、彼の配下として役に立てる事をより証明しようと思ったからだ。

澪が意識を取り戻したのは、その少し後の事だった。

「＋＋＋＋＋」

そして、柚希は初めて絶頂を得たままでいる澪を見ながら思った。

自分も、もうすぐ刃更の役に立てるようになる。

そのためには明日の夜　自分はき　と、今の澪のようにならなくてはならない。

刃更の配下として、彼の両腕の中で。

成瀬澪のそこは、まるで熱湯を掛けられたように熱く濡れていた。

それは澪が初めて得た禁断の快楽。

自分の胸の先端で、刃更と柚希に間接キスをされて　その興奮に悶絶の呪いを発動させながら、激しく達してしまった絶頂だ。自分が着ている水着どころか、刃更の膝の香りまでぐしょ濡れにしてしまっている事実に、い　その意識を手放してしまいたいのに、

「……やあぁっ、何これぇ……っ？」

成瀬澪は激しい絶頂感に晒されながら、驚愕と共に知った。

余りにも強すぎる絶頂は、意識を飛ばす事さえ許されないのだと。

「つ……あ……」

絶頂の嬌声で肺の中にあった空気を全て吐き出した澪は、それでも刃更の膝の上で快感を噛まらせたまま、彼に胸を吸われる度にいやらしく体を震わせていた。

すると、澪の胸を吸っていた刃更がチュポッと口を離して、

「　いつまでもこんなまま……辛いよな」

澪が苦しそうにしている原因が、縛られたままでいる事にあると思ったのだろう。

こちらの手首を縛っていた結び目を解いた――その時だった。

「え……？」

澪にとって、予期せぬ展開が出来した。

一つ目は、刃更の手がうっかりメノヤ　の巻き取りボタン　を押してしまった事。一つ目は、縛られていたのを解かれると、血流が回復してその場所が敏感になってしまう事。そして一つ目は――抱かれたボディソープのせいで、巻かれていたテープと澪の体との摩擦が減ってしまっていた事。その結果、

「……あ　。

いけない、と思った時にはもう遅かった。まるでスローモーションのようにメノヤ　がふわっと緩んだ次の瞬間には、気に早送りの速度でテープが巻き取られ始めて、

「つっ～～～

まあ、お前がそう思うんならそうなんだろうよ……お前の中ではな。

つ　かなあ。

東城刃更はぼんやりと思う。

誰かに意識を飛ばしたら、その場でこばかれる事はないかもしれないが　後で意識が回復した時の事とか考えないのたろうか、と。

そして案の定、刃更の予想は的中した。

夜中に自室のベッドでぼんやりしていると、いきなり偽の絶叫と騒音、そして万理亜の悲鳴が聞こえてきたからだ。

今夜はまた、　段と騒人たな」

たから刃更はやれやれと吐くと、そっと部屋の電気を消した。

特別は既に深夜の　時半。

偽の絶叫と万理亜の悲鳴は、途絶える事なく続いている。

第2章　偽りの笑顔の裏側で

1

成瀬万理亜の朝は早い。

今はでき先代魔王ウィルベルトの力を受け継いだ、彼の　人娘である成瀬偽――そんな偽の護衛として、万理亜は自身が所属する組織より派遣されている。

よって、新聞を届けに来た配達員が、朝刊を東城家の郵便受けに入れた瞬間、

「　　」

万理亜は護衛としての働きを見せた。家の外でキこん偽かな物音に反応し、ベットの布団の中で眼を開けたのた。そして同じベッドで寝ている偽を起こさないようにそっと布団から出ると、カ　テ　を他かに開けて窓から外を見る。

すると黒のバイクが走り去るところたった。見覚えのある後ろ姿は間違いなくいつもの配達員のもので、万理亜は小さく嘆息しながらカ　テ　をそっと戻す。

そして万理亜は「ん～っ」とその場で伸びをつすると、足音を立てないようにしてベッドの傍らへと戻った。ベッドにはまだ夢の中にいる偽かおり、そんな彼女の寝顔を見つめながら改めて思う。自分は、この偽を守るためにここに居るのたと。

「　　」

しばし万理亜が無言で見ていると、眠っている偽の頬が徐々に紅潮を始めた。そして、

「ん　あ　やあ　お兄ちゃ　ん♥」

熱の籠もった寝言を偽が漏らした瞬間、

「つ　　ね」

万理亜は、くわっと両目を大きく見開くや、神速で動いた　ベットの下からビデオカメラを取り出し、連写で　脚ボタ　を押す。むふ　ん、と鼻息を荒くしながら、

こんな機会、滅多にありませんよっ

これは、エロく眠えている偽の寝姿を録画する事たけか目的ではない。いや、勿論それもバッチリ撮影するつもりなのたが　万理亜が収めたいのは偽が視ている夢のうた。

思うに偽は現在、刃更に屈服させられる夢を視ているのたろう。そしてここからが大事なのたが　偽が視ているのは、サキュバスの万理亜が見せた幻夢ではない。偽が自分自身で視ている夢なのた。それは偽の潜在にある願望か、無意識の深層心理によるものか。

……いずれにせよ、良い傾向です。

サキュバス的には、偽さまがエロくなってきている事はとても喜ばしい事ですし、おまけに夢の中では理性や自制心が緩みやすいので、もしかしたら夢の中で偽さまはこれまでネットに控らな事をされて乱れている可能性も　いや　ん偽ってきました　っ

興奮爆発の万理亜としては、すぐにでも偽に触れてその夢を視きたいところなのたが、

いぇ、それでは足りませんっ

成瀬万理亜は、日光の欲望をぐぃと我慢した。たとえ夢を覗けても、そんなものは 時的な満足しか得られない。夢の内容を後でからかったところで、確たる証拠がない以上、澪にとぼけられでもしてしまえばそれまでだ。

澪に突き付けれれば逃げ場を塞げるような、決定的な証拠とするためにも。

澪のはしたない姿を記録した、秘蔵ショクョンを充実させるためにも。

澪さまが視ている夢を録画・保存する事こそ下僕っ

こういう場合に備えて、万理亜は自身のビデオカメラにとある細工を施していた。ちょっと中身をいじって、魔力を流し込めるように改造しておいたのだ――それは最早、刃更に開眼させられる際の澪や柚希の淫らな姿を収めるたけとなった普通のビデオカメラではない。対象の脳波に同期して夢を録画できる、サキュバス特製のビデオカメラだ。

そして電源と魔力が入った、名付けて「汎用型淫魔撮影兵器トリ ムカメラ君初号機」を万理亜は構えた。果たして澪は、どんなはしたない夢を視ているのか 期待にゴクリと喉を鳴らし、万理亜は食い入るように小型の液晶画面を覗き込む。ところが、

「…なっ？ 澪さまのシンクロ率が……」

成瀬万理亜は唖然に無惨した。液晶には澪が視ている夢が映し出される筈 それなのに、画面が何故か真っ暗だったからだ。

まさか 暴走…？」

過いました。万理亜が顔をトげてヘッドの澪を見ると、布団がもぞもぞと動き、

「ふ…ぅ…ん」

喉を鳴らすような吐息と共に、両眼を開いた澪がゆっくりと身体を起こした。

それは誰が見ても美少女と疑う余地のない可愛らしい顔と、大人の女性顔負けの艶っぽい魅裂肢体という、至高の 律背反を誇る少女。

ノブラのため豊かな両胸の先端がパジャマの生地を内側から押し上げるように浮いてしまっている――恐らく刃更の夢を視て、澪の敏感な躰が反応してしまったのだろう。今日も朝からエロすぎて素晴らしい。

たから 心、通常の録画モードで撮っておく。撮ってはおくか しかし万理亜が撮りたかったのは、無防備であられもない澪の寝起き姿ではない。

夢の中で、己の本能のままに澪かとれたけ乱れるかを撮りたかったのだ。

「ん あ、万理亜。おはぅ――って、どうしたのアタ？ 何で朝っぱらからビデオカメラ構えながら思いっきり泣いてるの？」

そりゃ、涙も出ますとも。むしろ血の涙を流さないだけ褒めて貰いたいくらいです。

しかし、成瀬万理亜は諦めなかった。またも法はある あるのだ。たから、

「…澪さま、随分と色っぽい寝言でしたが 体どんな夢を見てたんです？」

「なっ」

お見通しの笑みを浮かべて言った万理亜に、澪がカッと顔を赤くした――その瞬間、

「さあ澪さま、私と共にもう一度夢の続きを見るのですっ！」

夢に押し入った者に再起を促す常套句のような言葉と共に、いきなり万理亜は眼の前の澪に手をかざし、サキュバスの保夢魔法を放った。

普通ならば魔力タイプの澪に、万理亜の魔法が通用する筈はない。

たか、疑問という無防備な状態のところへ、不意打ちを仕掛ければ話は別だ。

「えっ ぇぁ…？」

驚きに見開かれた澪の両眼が、あっという間にとろんとなり 仰向けにベッドへと倒れていった。そして静かに寝息をたて始めた澪に、

「くうっ…すみません澪さま。しかし、これは仕方のない事なのです」

先程まで視ていた夢を思い出させ、意識を誘導する形で淫夢魔法をかけた。これなら間違いなく、先程までの夢の続きを視る筈。

「さあ、澪さまの心の奥底に秘められた恥ずかしい欲望を拝ませて貰いますよ……」

画面を操らせたり万理亜は、ビデオカメラで澪の夢の録画を開始した。体とんな組んず解れつか展開されているのか 万理亜は無駄に腰をクネクネさせ、サキュバスの尻尾をぴょこぴょこさせ、握りながら、液晶画面を食い入るようにして見る。

すると 液晶画面に映し出されたのは、深夜の澪の部屋だった。窓から月明かりが差し込んだ室内で、ベットの上に仰向けになった澪か恥ずかしそうにこちらを見ている。

先ほどの澪が発した寝言とこの状況から、万理亜は澪が視ていた夢の内容を推理する。

「おおっ これはもしや、澪さまは刃更さんに復讐されたい願望とかあったんでしょうかね？ もや やっぱり澪さまってば、超ドMさんなんじゃないですか」

素直になれない性格なように、羞恥心の強い澪は、基本的に自分から刃更に迫るような事はない。しかし、刃更にされる事ならば、表面上は多少抵抗や拒絶をするものの、最後は必ず受け入れている。つい 昨日も、澪は聖ヶ坂学園の女子シャワー室で刃更に滅茶苦茶にされて服従していた。そうして自分が乱れても良い免罪符を得た時の澪は、このような色気と艶 ぱさがあるのたが――袋を返せば、それは受け身とも取れる。

そういうところは、刃更の幼馴染みの少女、野中柚希とは対照的だ。

柚希さんは積極的ですからね。

かといって柚希に羞恥心かなく平然とそれらを行なっているかというと、そうではなく。

あの、やや幸たい感じのする柚希が、恥ずかしいに顔を染めながら、それでも刃更に対して自らいやらしく迫るのは、サキュバスの万理亜としてはかなりポイントが高い。

それに。

柚希が恥ずかしからも刃更に対して積極的なのは、澪がいるからだ。

そして 澪もまたそんな柚希には負けたくないと思っている。基本的に柚希か刃更に迫れば彼女を止めようとするのたが、いざ止められないと解ると、柚希に対抗するように自分も淫らな行為をしてしまうのだ。万理亜は頭に手をやり、うんうんと頷きながら、

や 、互いを高め合うライバル関係で本当に良いものですよね。 ん？」

カメラの液晶画面に映 ている夢の中の澪――ベットで仰向けの彼女か、恥ずかしそうにしながら、何かを待つようにこちらを見ていた。

澪の視線の先にいるのは恐らく刃更なのたろうか、そのまま特に動きや展開がない事に、

ちょっとちょっと 何してるんですか、澪さまの夢の中の刃更さんは。まさか、ここまで来てとんた腰抜け野郎たったりしないでしょうね？ お風呂場でケ キ誤りたいったあの鬼畜っぷりはどこ行ったんですか、お巷の間か退廻ちゃいますよっ」

うがー、と怖れったさを爆発させた万理亜は、

「あ…　もしかして、これって」

ふとカメラを持っているのとは逆の手で、そっと澪の頬に触れてみた。すると液晶画面の中に手が現れ、実際と同じように夢の中の澪の頬へと触れる。そして夢の中の手は乃亜のものではなく刃更の手だ。澪はその手に戯れかかるようにしながらも頬ずりしていて、

「私とした事が、『淫夢魔法の鏡賞タイプ』と『参加タイプ』を間違えてしまうとは」

正確です、と額に手をやりながら乃亜は、本来、女性淫魔のサキュバスの瞬眠魔法のほとんどは、実際に眠っている対象に淫夢を見せながら淫らな行為を行なう『参加タイプ』である。これは眠っている男性と性行為をする事で、対象から精を吸い取れるからだ。

しかし澪の深層にある願望を覗きたかった乃亜としては、彼女自身の意識や欲望が夢の内容に反映される『鏡賞タイプ』を掛けるつもりだった。ところが澪の深層心理を覗きたいという想いが強すぎたせいか、うっかりオノドックスな『参加タイプ』の方を発動させてしまったらしい。そのため、乃亜が刃更に設定されてしまっているようで、

「うん弱りましたねぇ　私、黒役なんてやった事ないですし」

乃亜は軽くため息を吐くと、

「あ　まあ、でも仕方ないですかね？　澪さまが本当はとれたけエロいか知りたいです」。いつもは刃更さんが、澪さまをア・ア・言わせてるのを横で見てるだけでしたが。実は前から面白そうだと思ってました。ここは私が叩悦くしかないですかね　？」

やれやれと言いながら、乃亜は澪が寝ているベットから一日離れた。そしてチェストの上に置かれている無数のぬいぐるみの中から、バッグのそれを手に取ると、背中のファスナを開けた。そして慣れた手付きで中綿の素材をぶっこ抜くと、代わりに録画中のビデオカメラを収納してレンズの位置を小さなバへと合わせる。

「こういう時、タテ型のビデオカメラにといて良かったと思いますねー。開発された方もきっと泣いて喜んでいる事でしょう」

開発した者が聞いたら違う意味で泣きそうな事を言いながら、乃亜はカメラが内蔵されている事が解らないように巧妙に偽装すると、くるりと振り返り、

いや、でも今回ばかりは参りました。本当はこんな事やりたくないんですけど　本当ですよ？　でも、こんな早朝に刃更さんを起こす訳にいかないですし。この機を逃す訳にもいきません。サキュバスである以上、この状況で澪さまにエロい悪戯をしないのは失礼に当たりますし。あ　これはもう仕方ないですよねっ」

最後の方は眼を血走らせ、熱くアハァ言いながら乃亜は澪の眠るベットへ。

カメラには乃亜が刃更として映っている筈だ。だから「んんご」と喉払いをひとつすると、乃亜は無駄にキリっとした表情と声で、

「待たせたな澪。お前の愛しいご主人様、刃更が来たぜ？」

完璧です。乃亜の考える刃更のモノマネをしながら、澪への悪戯を開始した。

仰向けに寝ている澪のように馬乗りになると、パジャマのトから両胸を揉んだのだ。

「んご　はぁん、あぁ　ん　や　ん♥」

途端に澪が艶っぽい声を漏らしながら甘く身をよじらせ始める。

わぁ。

澪の胸を揉みながら、乃亜はホクホクの笑顔になった。

これは『想像以上に良いっ　パジャマ越しでも最高たっぷりの澪の胸の大きさと柔らかさを堪能できるトに、感じている顔まで見る事

ができるとは。同せ発動しているのは『参加型』の淫夢魔法だ。澪に触れる事で、彼女が見ている夢の光景の視覚共有も行なえる。本当の澪は眠っており、実際は眼を瞑っているのだが　夢に入り込んだ乃亜には、澪の意識があるように見え、自身の声も刃更のもので聞こえる。

こ、これは　色んな意味でいけない気持ちになっちゃいますねぇ。

ふぁぁ、と低く笑いながら、乃亜が着ているパジャマのよ　その前を留めているボタンへと手を伸ばした。そして一番トのボタンを開けると、

「あ、やっ　駄目」

澪が恥ずかしそうに胸元を手で隠した。しかし、

「駄目じゃないだろ　澪、その手を退けるんだ。お前の全てを俺に触してくれ」

澪の夢の中、声だけでな　姿までも刃更に変化させた乃亜がノリノリで告げる。

そしてら乃亜は、澪の耳をツッと見詰めた。しかし、顔を赤くした澪がこちらから眼を逸らして「駄目」と、同じ言葉を繰り返してきて、

うーん、やっぱりそうですよね。

驚きと共に見れば、澪の両耳に嵌っているらしき片輪のような物が浮かんでいる。

本従契約の呪いが発動していた。自分がされたいのではなく、「刃更がしたいなら」と、刃更のせいにしようとしている事に後ろめたさを感じているのかもしれない。

そして、澪はゆっくりと胸元を隠していた手を退かしてゆき、

「良いよ　あたしの事、好きにして」

潤んだ瞳で、こちらを見上げてくる。それは乃亜が思いもしなかった、不意打ちのような反応だった。まさか、澪がここまで刃更の事を想っていたとは――そして、それ程に乃亜を驚かせたのは、澪が浮かべた表情だった。

それは、十五歳の普通の女の子が浮かべて良いような表情ではなかった。

それは――男を知らぬまま、狂わられない程の快楽を心と躰に刻まれてしまった儚たけか見せられる、恋を存むような色香を湛えた「女」の顔だった。

「っ」

いけない。自分はちょっとした悪戯で落ませるつもりだったのに。

……っ、澪さまがいけないんですよ。

ズクリと喉が鳴った。たとえ男じゃなくても、こんな反応を見せられて我慢できる筈がない。万理亜は、理性としての本能に完全に火が付いてしまったのを感じながら、

「ふ……ふ……ふ……」

無言で、澪のパジャマのボタンをゆっくりつずつ外していった。そして澪の前を全て開くと、万理亜は澪の内側に両手を入れ、鎖骨から肩の後ろへと滑らせて上半身を完全にはだけさせると、量感のある澪の大きな胸が露わになり、

「あ……」

恥ずかしそうに声を漏らす、澪の仕草は非常にそそるものだった。先程まで自分で慌てていた夢と、催眠魔法の中で刃更に化けた万理亜に揉まれた事で、澪の胸の先端は快楽を得ている事をキュッと張るようにツンと張り詰めていて、

「こんなにして　いやらしいんだな、澪は」

んっ　違うよ　あたしの胸、こんなにこったのは兄ちゃんが　」

「俺が？」

ふふっと笑い、万理亜は澪の右胸を揉みながら左胸へと口を寄せると、敏感な場所をわざと避けながら、いやらしい胸の曲線に沿って舌を這わせた。

「ああっ　や、はぁ　ん　、あ、ぁ　ぁ　んぅ♥」

途端に、澪は切なげな声を漏らし始めた。はしたなく腰をくねらせ、左右の太股の内側を擦り合わせると、除々にヘッドのシーツにいやらしい皺が生まれてゆく。

そうやって、万理亜がゆっくり焦らすようにしていると、

「っ……お願い、意地悪しないで」

やがて耐えきれなくなったのか、澪が甘く濡れたような声で言った。

とうやらじっくりばかり苛めすぎてしまったらしい。しかし、

澪さまぁ……っ。

万理亜が「C」の行ないを後悔する事はなかった。澪の可愛らしく艶っぽいその表情と声に、完全に理性が飛んでしまったからだ。なから、万理亜はビンと張り詰めている澪の胸の先端を口に含んで、そして思いきり吸った――すると、

「っ♥」

途端に澪がビクンと体を跳ねさせる。その反応が余りにも可愛くて。

そこからはもう――万理亜はひたすら澪を攻める事に夢中になっていた。

キス従契約の下、刃更によって調教され開発された澪の体は面白いくらいに敏感で。

首筋に手を這わせながら、半脱ぎ状態だった上着を剥ぎ取ろうとした時は、また形だけの抵抗は見せていたものの、形が変わるくらい強く胸を揉んであげながらパジャマの下を脱がしてショーツ一枚にすると、ほとんどこちらへ逆らわなくなり――そして、

「あれ？」

ふと万理亜が我に返ると、何故か快楽にとろけきった顔をした澪が眼の前で四つん這いになり、こちらへ尻を向けていた。そして万理亜の左手は、何故か澪のショーツへと掛けられている。おまけに、いつの間にか時計の長針も十五分ほど進んでいた。挙げ句には、

「おや　私は何でこんなものを？」

万理亜は、自分の右手があるものを握っている事に小首を傾げた。

極太のバイブだった。このバイブには見覚えがあった　澪や柚希に食べさせるため、万理亜がいつも購入しているものだ。ちなみに一本（税込み九八円。基本的には同五本のものが多い中、万理亜は敢えてサイズが大きめの一同一本のものを買っている。

それは成績も理亜の小さな幸せのため。

万理亜は以前、早朝に刃更の部屋へ忍びこみ、男の生理現象を起こしている刃更のとある部分のサイズを厳密に計測していた。そして、スパでそのサイズに最も近く、かつ硬い勝手の良い食材を探しに探し、そしてとうとう見つけたのである。

それこそがバナナ：英語で正しく発音するならバナーナだ。

最近では買ってきたバイブを澪や柚希が食べる前を見ては、ひとりでニヤニヤするのが万理亜の密かな楽しみ――ストレス解消のリフレッシュタイムになっていた。

まあ、質感を追求するなら松茸とかコンビニのビッグフランクとか、硬さを追求するならズッキーニとかの方が良いんですが。

牛筋とビッグフランクでは硬さと太さが足りないし、かといってズッキーニは皮が硬すぎるため、生のまま澪が咥えてくれる筈もない。松茸では繊維性すぎて情緒にかける。

その点、バイブなら即効性の高い栄養補給が行なえる事もあり、プロのアスリート選も認めて咥えている。また美肌や抗酸化作用もあり美容効果も高い。早い話が、贅沢心を持たれずに、簡単に澪達に咥えさせられるという訳だ。

そんなバナナが今、万理亜の右手に握られていた。

「ふむ、これは　体……？」

万理亜は、空白の十五分を思い出そうと試みる。すると、闇が乗りまくった自分が「お前の全てが欲しい」などと言ってしまった記憶がぼんやりと甦ってきて、

という事は、つまり」

もしや自分はこのバイブで、澪の初めてを奪おうと……？

「あ、危なっ……うっかり澪さまにドのおこでバナナを食べさせちゃうところでした。澪さまの初めての相手が一同一九八円のバナナとか、幾らなんでも手抜きすぎます」

しかも、

「一本の単価たと　ナ　ナナナ円じゃないですか　こんなの割り切れませんよっ」

とはいえ、こんな格好までさせてしまっているのだ。

ここは男として、最低限の責任は取らなくちゃですよね　男じゃないですけど。

ですが人として、女の子への礼儀は守らなきゃですよね　人じゃないですけど。

サキュバスですけどっ　よって、万理亜は悩まなくして　つの答えを出した。

結論。

「……パンツの上から、先っちょを少し位なら問題ないですかね」

これ位ならギリセ　ノです、と自信を深めていると、

　　お兄ちゃん？」

僕が駆けつけるとそこにこちらを振り返った乃明亜は慌てて、

　えっと。こんな時、刃更さんだったら　。

刃更が普段、僕を屈服させる時にどう言っているかを思い出した。

そして乃明亜はいそいそと自分もパジャマを脱ぎ、てぃとパ　ツを放り投げ、極太バナナをそっと股間に挟んでビンっと角度を調整。僕の尻を両手でがっしりとホ　ルドすると、遠う事なく言い放つ。ロリSサキュバス全開の表情で、

「待たせたな僕　今、楽にしてや」

　アホかあああ　」

実に込みと共に、真下から硬い何かが乃明亜の両股部へと振りドろされた。

「ぎゃひぃんっ　な　　ぁ　」

その衝撃で僕の夢から現実へと引き戻された乃明亜か、慌てて背後を振り返ると、

「ば、刃更さん＋＋体いつからそこに？」

馬鹿な　まるで気配を感じませんでしたよ？

「お前が服を脱ぎ山すちょっと前からたよ　あと言っとくか、九八を。で調べた答えは　ナ　ナハナとゃなくて、　ナナナたからな」

　ァと愕然しながら言われたので、

「た、駄目じゃないですかっ。女の子の部屋へノックもせずに入るたなんて　」

「したよ何度も。でも返事はないし、かといって寝てると は思えないおかしな声が聞こえてくるし。仕方なく中に入ってみれば十　ったヽ、朝っぱらから何やってんたお前は」

「何を、って　見て解りませんか？」

「解らないから訊いてるんだ」

そうたろうか　小舌を噛げた乃明亜は、ノョ　ノ枚で四つん這いになってこちらに尻を向けている僕と、全裸でバナナを股間に挟んでいる自分とを交互に見て、

　そうですね。そうかもしれませんね」

残念そうに股間に挟んでいたバナナを取ると、途中でとめられたやるせなさをぶつけるように、軽いスイングで極太バナナを振り抜いて僕の尻たぶをペチンと叩いた。

「あんっ♥」

良い振動の角度で入り、すっかり敏感になっていた僕がそれだけでヒクンと反応し、

「たから、何をやっとるんたお前は　」

顔を赤くした刃更に、強引にバナナを引いたられてしまった。

……ここまで、ですかね。

こちらは全裸だというのに、最後の砦だったパンツまで脱がれてしまいました。これでもう、私には何もありません　完全な丸腰です。

抵抗なんて見苦しい真似はしませんとも。

だから、ふっと寂しそうに笑うと、成瀬万剛弥は明後日の方角の虚空を見上げた。

「私はただ　もう少しだけ見せてさしあげたかったんです」

そして、遠くを見詰めながら告げる。

「澪さまが悦ていた、夢の続きを――……」

2

良い感じの雰囲気の言葉で誤魔化そうとしましたが私目でした。

刃更からもう　発注件を頂戴し、一段のたんこぶを頭にこさえた万剛弥は、ちえ　と不満そうにしながら澪への催眠術法を普通の睡眠魔法へと変更、きちんとパジャマを着させて布団を直すと、刃更と共に部屋を出た。本格的に起きるにはまだまだ早い時間だったが、どうせなら『度寝をする』より、いつもより早起きをする事にしたのだ。

それからも弥はエプロンを着けてキッチンにながら、朝食の準備に取り掛かった。

「本当に手伝わなくて良いのか？」

リビングのソファの定位置に座っている刃更から、気遣いの声を掛けられ、

「はい、これは私の仕事ですから。早起きをされたからといって、お手伝いいただく必要はありません。刃更さんはのんびり出来上がるのを待ってて下さい」

万剛弥は澪の護衛だけでなく、彼女の身の回りの世話も　通り行なうように命令を受けている。よってこの東城家では、炊事　洗濯　掃除といった家事全般は万剛弥の仕事だ。

それに良い機会ですから、前から作ってみたかった、ちょっと手の掛かるお料理に挑戦してみようと思いまして。出来上がったら、まずは刃更さんに味見をお願いしたいんです。上手くいったら澪さまや柚希さんにも召し上がっていただきたいので」

万剛弥は笑顔でそう言うと、さっそく料理を始めた。

作るのは新鮮な高級素材を贅沢に使った煮込み料理だ。まず準備するのは出汁を取ったスープ。洋風に作るなら、鍋で野菜や鶏ガラなどを煮込んで出汁を取ったブイヨンスープで作るのだが、いかに早起きしたとはいえそこまでの時間的な余裕はない。となれば、

「やはりここは繊細な和風のお出汁で勝負ですよねー」

絶品する高級素材に見合うのは、やはり最高級の利尻産昆布しかあるまい。

軽く湿れ布巾で拭いた昆布を水と共に鍋に投入。ゆうせなら繊細な味にこだわりたいため、いきなり火に掛ける事はせずに、水に馴染ませるためしばし置いておく。

その間に行なうのは、主役の煮込む食材の力の下ごしらえだ。なるべく素材の味を活かせるように、最低限の仕事に留めて味付けも薄めに

したいところである。

「ふむぅ……どんな所ですかね」

そして必要な下ごしらえを終えた後、万剛弥はキッチンのカウンター越しにリビングへと視線を向けた。すると、刃更はノアで配信された新聞を読んでいた。

「　」

新聞をめくり、ゆっくりと紙面を読み進めてゆく刃更の姿は、どこか父親の威厳の面影を強く感じさせ、普段よりも大人びた雰囲気を漂えている。

おお、結構カッコイイ感じですよ刃更さん。

うんうん、と万剛弥は満足そうに頷いた。父親という立場だけでなく、かつて戦神と謳われた最強の勇者という経歴もあり、弥の存在は色んな意味で大きいものである。しかし彼が親密へと近いてこの家を空けている現在、東城家の人無性は問題いなく刃更だ。そしてこれまでにも、自分達は何度となく刃更に危ないところを助けて貰っている。だから、

そのお礼をしなくては。

成瀬万剛弥は決意を新たにすると、そっと鍋を火に掛けた。

リビングのソファで朝刊を読んでいた刃更が一通り紙面を読み終えると、

「よし、完成ですっ！　刃更さん、ちょっと味見をお願いします」

ふと、キッチンのほうから万剛弥の明るい声がした。

おー、できたのかー」

ノアからぴょこんと立ち上がると、刃更はゆっくりと万剛弥のドへ。すると、

「はい、とうぞ刃更さん。口来たてですよ」

万剛弥は満面の笑みと共に、両手で持った深皿を差し出してきた。皿の中央、湯気のたつスープに浮かんでいたのは、真っ白なまん丸の物体だ。刃更は皿を受け取りながら、

「　これ　て　はんぺんかっ？」

そう。それは見た目には、おでんのはんぺんだった。手の掛かる料理と聞いていたため、刃更は若干の困惑から疑問を得る。勿論、おでんも立派な料理だし、朝からきちんと作るには手間の掛かる料理である事は否定しないが。すると、

まあ、まずは食べてみて下さい。はんぺんだと思ってたらビックリしちゃいますよ？」

「はんぺんじゃなかったら、何なんだョ　？」

と、刃更は食べやすい口サイズにちぎろうとして、

あ、刃更さん。ここはぜひ男らしくかぶり付いて、何なのか当てていただけると」

「ここまあ良いけどな。こやあ、食べるぞ」

ガブッと　口からぶり付くと、染み込んでいた出汁がじゅわっと口の中に溢れた。しかし、

「つ　　？」

陰かにそれは、はんぺんではなかった。ぐにゅっとしていて噛み切れないのだ。

想像していたものとはまるで異なる食感。ところが刃更は、その何かを丸ごと口の中へと入れた。かぶり付いた事で溢れ出した出汁から零れそうだったし、一度口を付けたものを皿に戻すような真似もしたくなかったから。

ところが、どうにも噛み切れない。

必死に噛もうとしても、くにゅくにゅとするだけで、まるで歯がたたないのだ。

「つ…おい万理華、本当に何なんだ…これ…？」

「おや刃更さん、解らないんですか？　刃更さんの大好物ですよ？」

「俺の好物　？　味は美味いけど、こんな食べにくい食感のもの初めてなんだが」

行儀が悪いと思いながらも、口にものを入れたまま刃更が疑問を投げると、

「食べにくいとは失礼なっ。澪さまのパンツの一体どこが食べにくいと言うんです！」

へ　　つ？」

最高潮が解らず箸で摘み返した刃更は、しかしすぐに万理華の発言を理解した。

たから反射的にギョッとなり　それが不幸な結果を生んでしまう。

突然の事に驚いて、とっさに唾を飲み込んでしまった経験はあるだろうか。

とっさに身体を硬直させた刃更は、ゴクッと喉を鳴らした。しまった――と思った時にはもう、先程までは噛み切れないはんぺんらしき物体だったものが、刃更の喉の奥へと飲み込まれ、食道を滑り落ちてゆく感覚があって、

喉…たろ…。

呆然となった刃更が万理華を見ると、万理華のロリエロサキュバスは嬉々として、

「どうです刃更さんっ？　朝摘みの取れたて、新鮮な妹のパンツのお味は？」

その言葉に、刃更は皿と箸をカウンタ　の上に置き、

「……」

「刃更さん、なぜに無言で戦闘の具現化をっ　まさか牛で行きたかったんですか？　食べやすいようにと、こっくりコトコト煮込んでロールパンにしたのが善意にっ」

「裏も表もあるか　人に向けてモ　食わせやがるんな、このロリエロサキュバスっ　妹のパンツを食べるとか、人にとんでもない十字架背負わせやがって！」

闘撃の事実にも程がある。こんなの背負いきれねえよ　いや待て、それよりも、

「パンツって化学繊維だよな？　そんなの消化不良どころじゃ済まないだろ…」

倫理的にアウトなだけではない。男性用のものと比べれば、女の子のショーツの布地はちないか、それでも飲み込んでしまえば開腹手術が必要になる可能性だってある。

というか、病院で開腹手術をして、胃の中から女の子のパンツが出てきたら、医者やナースは一体どう思うのか。このままでは、うっかり明日の朝刊に『都内の私立高校に通う男子生徒、自宅で妹のパンツを食べて救急搬送』なんて見出しで報じてしまいかねない。

思わず血の気が引いて顔を青ざめさせたこちらに、

その必死で心配なー、体内に入るとタンパク質に変換される魔法を掛けてあります」

「性、本当かー？」

「勿論。私が本気で刃更さんを害するような真似をする筈がないじゃないですかー」

その言葉に、刃更がひとまずホッと胸を撫で下ろすと、

「これで澪さまのパンツが刃更さんの血肉となり、そして明日への活力にー　くふっ」

「ふ…ふ…ふ…」

「ああ、刃更さん　なぜに無言で戦闘を振りトげるんですっ？」

安心しろ――峰打ちだ。刃更はジリジリと万理華へと近付こうとして、

「つ？」

ふと、背後から視線を感じて慌ててそちらを振り返った。すると、そこにはひとりの少女が立っている。聖ヶ坂学園の制服を着ているが、澪ではない。

「柚希…？」

そう。リビングの入り口に立っていたのは、明るい、褐のある澪とは好対照な、思わず息を呑んでしまいそうになるほど過き通る美しさを持つた野中柚希た。

た、助かった…。

もしも澪に刃更が彼女のパンツを食べてしまった事がバレたら、刃更も万理華も生命の危機について考えなければいけないところだ。刃更がホッと胸を撫で下ろしていると、

「　えっと　柚希さん？」

刃更は思わず敬語になって問い掛けた。こちらを見る柚希の表情が、ぬ　んと不機嫌なものになっていたから。とうやら刃更が、澪のパンツを食べさせられた事を聞かれたらしい。澪にバレなかったのは良いが、かといって柚希に聞かれて良い話でもない。すると誤まずい空気の中、リビングを抜けて刃更達のいるキッチンへとやって来た柚希に、

「ち、違うんだ柚希…今の話は」

「　…　…」

事情を説明しようとしたこちらに対し、眼前に立った柚希が無言のまま「ある行動」に出た。傍かに前屈姿勢になり、自身のスカートの中へ両手を下から差し入れたのだ。

「へ　　？」

刃更の眼の前で、恥ずかしそうにスカートをたくしあげて両手を中に入れた柚希が、その手をゆっくりと下ろし始めた。両の親指に引っ掛かるようにして、スカートの中から下りてきたのは、柚希が穿いていた白のショーツだ。太股から膝まで下ろしたところで、柚希は左右の足を順番に抜くと、それを小さく丸めてこちらの方へと差し出して、

「刃更　あ　ん」

「いやいやいやっ、『あ　ん』じゃないってー　何やってんだ柚希っ！」

脱ぎたてのパンツをこちらへ食べさせようとしてくる柚希に、刃更は首をブンブン横に振った。事態が経めようと回かって徒競走を始めている。すると、

「遠慮しなくても良い　まさか刃更の大好物が女の子のパンツだとは知らなかった」

不覚、と自分を責めるように言った柚希に、方朗弟はうんうんと頷いて、

「柚希さんが知らなかったのも無理はありません。離れていたこの五年の間に、刃更さんは成長されたんです。　度の飯より女の子のパンツが食べたいお年頃へ」

「この五年で変わった事は否定しないが、そんな変態野郎になった覚えはねえよ」

データメを言うロリエロサキュバスの頭を、刃更が軽い良くしばくと、

　恥ずかしがらなくても平気。これからは毎日、私のを好きなだけ食べさせる。取り敢えず今日の放課後、駅ビルに入ってるランジェリーショップへ行くから付いてきて。私はどのパンツの味や食感が刃更の好みか解らないから、刃更が選んだものを買い占める」

「全然平気じゃないっ　お前は俺を殺す気かっ？」

と、さらに刃更が叱る口調で窘めると、途端に柚希はむーと不満げな顔になった。そして、

「　澪のパンツは食べられて、ウチのは食べられへんって言うの？」

唐突的になった時に伝る涙のある口調で、ズイッとこちらを問い詰めてくる。

「いやっ、別に澪のも食べたくて食べた訳じゃ」

「はいはい、とうせ私のせいって言うんですよね　刃更さんは。都合の悪い事は、いつも私のせいです。澪さまが十従製紙で刃更さんの下僕になったのも、お風呂でケ　キまみれにされて感涙苦悩にされたのも、全部私のせいですよね」

ああ　それは全部お前のせいだな」

いいけたプリのメさくさで責任逃れをしようとすんな。

「とにかく柚希、悪いが俺はお前のパンツは食べない、帰りに下着を買うのも付き合えない。組む、お願いたから離井してくれ　死んでやうよ。　日万理事を置いておき、刃更が柚希への説得を試みると、

「　そう、ぷうってもあかんねや。それやったら、もうええもん」

口を尖らせてそう言うなり、柚希は着ているセラ服のトを脱ぎ始めた。

「ちょっ、柚希、　体何をっ？」

刃更の前で柚希はトを脱ぎ去ると、さらに背中に両手を回してブラジャ　を外し、

「前にお風呂で背中を洗わせて欲しいとお願いした時も、刃更は最初断った。せやけど裸になってお願いしたら、ウチの言う事聞いてくれたもん。たから今回も――」

「待てっ　何たそのおかしな思い詰めりっ？」

「つ：：別におかしくない。澪のパンツは美味しく食べられて、ウチのは食べられへんなんて・そんな贔屓、絶対あり得へんもん」

ああ、そんな贔屓は絶対にあり得ねえ、そもそもしてもいないっ　って、お待て柚希っ、それ以上はヤバイって」

とうとうスカートのホックに手を掛けた柚希を、刃更が思わず制止すると、

「そうです柚希さん　上半身は裸でトはスカ　トは脱がずにパンツだけ脱ぎ、それなのに靴下は穿いたままとか　今の方がある意味、最強装備かもしれません」

こんな時まで何を眼ェ輝かせて楽しんでやがる、このロリエロサキュバスっ」

「　刃更、お願い　」

「　つ？」

とうとう柚希に抱き付かれてしまい、刃更は思わず硬直した。

しかし、それは柚希に抱き付かれたからではない。

まるでドラマか何かのように　よりによ　てこのタイミングで、最もこの場に来てはマズイ少女がリビングの入り口に立　ている事に気が付いたからだ。そして、

「：：朝っぱらから随分と楽しそうな事をしてるのね」

口元をヒクつかせて少女が言うと、その全身から背白い光が四開の空間へと放たれてバリバリと乾いた音を鳴らした。雷撃魔法の発動を止めている事で起こる放電現象だ。

「ところで聞いてくれる？　今日に限っていやにおかしい夢を見ちゃった上に、眼が覚めたら何故かパンツを穿いてなかったの。とこを探しても見つからないし、不思議だったんだけど　気のせいかしら、あたしのパンツを方朗弟が料理して刃更が食べたとか、聞き捨てならない話が聞こえたわ。ねえ　人世　もう　度、今の話を聞かせてくれる？　柚希が服を脱いで刃更に抱き付いている現日と併せて、細に」

そう言って、成瀬澪は冷たい笑みを浮かべながらゆっくりとこちらへやってくる。

そんな澪を前に、半裸の柚希に抱き付かれたままぢ尽くしかできずにいる刃更の隣で、方朗弟が料を鎮めて嘆息した。

「はいやれやれ　またこのパタ　ンですか」

「つ　お前が言うなああぁぁぁっ」

刃更が思い切り叫んだ直後、東城家のリビングに澪の訊が容赦なく落とされた。

3

危うく朝から雷撃を食らうところでした。

まさか、澪さまがあんなに怒るとは。

修羅場の後の気まずい朝食を終え、どうにか刃更邸を学校へと送り出した後――キッチンで洗い物をしながら方朗弟は澪の反応が想像以上だった事を振り返った。

手加減されたとはいえ、澪の電撃を食らったのは久しぶりの事だった。

最近、同居している柚希の存在があるため、この手の悪戯をしても澪が怒る事はめっきり少なくなっている。刃更のためだと言えば、彼に対して明確な好意がある事を隠さない柚希は日な事をされても大抵は受け入れる。そうして柚希が、刃更はもちろん、ときに方朗弟の事も許しているが、澪も許さなければ負けた気がしてしまうのだろう。

上って今回も行けると踏んだのだが、

「澪さまは、相手が好きな男の子でもパンツを食べさせたら怒るんですね」

除菌もできる食器用洗剤「ピュピュット」で食器をカピカピになるまで、成瀬方卿弁はふむと唸った。

柚希の方は問題ないだろう。案の定、澪に先を越されたと知ったら負けじとばかりに対抗してきた。とはいえ、まさか自分からパンツを脱いで「あーん」をやってくるとは。

「私もまた修行が足りませんね　もっと精進しないと」

何より、あそこの動画を観れなかった事が悔やまれた。刃更にしばかれていた手前、先程はまた夢の中の澪を撮影したカメラをぬいぐるみの中から回収できていなかったから。

「せめて家事が一通り終わったら、忘れない内にアレを回収しておかなくては」

これで澪が今朝視ていた夢の動画まで手に入らなければ、自分は朝っぱらから刃更と澪にしばかれたたけで、骨折り損のまま終わってしまう。

よし、と洗い物を終えた方卿弁は、続いて掃除と洗濯へと取り掛かった。

脱衣所で洗濯物を洗濯機のドラムの中へと入れ、

今日は良い天気ですし、乾燥は止めておきましょうか」

自動乾燥をコースから外してスタートボタンを押せば、ドラムが回転して洗濯物の量を計測。最適なりに適量の洗剤と柔軟剤を入れると、タイミングを見計らったかのように蛇口からホースを通って水がドラム内へと注がれ始める。そして、ちゃんと通電が始まったのを確認すると、方卿弁は家中の掃除を同時並行で開始した。

澪とみたりきりだった頃は、必ず方卿弁も学校へ同行して陰から澪を見守った。

たが、刃更と同居を始めてからは登下校時の送り迎えだけになり、柚希とも休戦して同居するようになってからは、方卿弁が学校まで付いてゆく事はほぼなくなっている。

よって視える時間が多くあるため、家中の掃除と四人分の洗濯をやっても、大抵は午前中に終わってしまう。今日は天気が良いため四人分の布団を干しシーツも洗濯する事にしたため洗濯機を回す回数も増えたが、それでも昼過ぎには一通り片付いた。

そしてあり合わせのもので簡単に昼食を済ませると、午後から方卿弁が始めたのはパソコンを使った情報収集と研究である。

現存の刃更、澪・柚希の人にとって、最も大切なのは主従関係を深める事だ。

そのためには、彼らが困る事のない驚きや新鮮さに満ちた行為やイベントを常に提供しなければならない。おまけに柚希と過ごす今の澪はまた自身の刃更に対する気持ちを「好意」とは解っていても、それが「恋」だとまでは理解できていない。

とはいえ、そう遠くない内に澪も自覚する筈だ――その時、果たして澪がどのような反応を見せるか、想像すると今から楽しみである。もしかしたら、たかがパンツの一枚や二枚食べられたところでキャーキャー騒ぐ事もなくなるかもしれない。

それところか、逆に刃更さんのパンツを食べたいと懇願するようにいや、流石にそこまで変態さんになっちゃうと、ちょっと醒めますね」

何事にも例外というものはある。たとえ今後どれだけ調教されようと、澪や柚希には恥らいを持ち続けて貰わなくては刃更に服従するための原動力が、種の作業のようになってしまったら、個室で結ばれている主従関係はお終いだ。

たからリビングの窓際にあるテラスのウッドデッキに腰掛け、風になびく洗濯物たちを前に、刃更の部屋から持ち出したノートパソコンを膝に載せると、

さあ、今日も始めるとしましょうか」

成瀬方卿弁は真剣な面持ちでそう言って、新作エロゲの体験版のダウンロードを開始する。めぼしいものがないか、プレイして内容をチェックするために。そして使えそうなものがあったら、すかさず製品をポチって後で刃更に遊び入れるために。

こうした日々の弛まぬ努力が、刃更達の主従契約を支えていると思うと、

とてもじゃありませんが、手を抜く事はできません」

それに刃更達に遊い事をやられては、こちらも欲求不満でムラムラして辛抱たまらなくなってしまう。次にまた今朝と同じようなイベントに遭遇した際に、今度こそ気付いたら本当にバイトで澪の初めてを奪ってました　などという事にならないよう、ちょっと酌めますね」

「――なんて、思っても決して言えないこんな世の中で。

たから成瀬方卿弁は、刃更達の主従関係強化と己の性欲を満たすため、今日も真摯にエロゲと向かい合う。台詞をスキップする事を固く禁じ、イヤホンで全ての台詞を最後まで聞きながら、心を込めてプレイしてゆく。

ひとりでいると陰でいまう、暗い気持ちを振り払うように。

そうしてパソコンでゲームに没頭していると、当然のように午後の時間はあっさりと過ぎてゆき――気が付けば時刻は、時を回っていた。

おやつの時間だ。先程から調教エロゲの口淫シーンが続いていたが、

とうりで、ちょと前からロが寂しかった筈です」

そう言って、方卿弁は膝からごそごそとあるものを取り出した。それは、太くて良い感じに反り返った臨場なアイス　朝に使い損ねてそれっきりだった　バイトだった。

ひとりで過ごす寂しい昼下がり、せめてお口で刃更さんを感じるとしましょう」

刃更や澪が居たら、パンツを脱ぎながら「もちろんトのコで、しかも後ろから前から」とか言ってからかうのだが、ひとりでそれをやると色んな意味で虚しいので止めておきます。優しい手付きで皮を剥くと、バナナへと口を寄せていった方卿弁は、

ええ、何ですかこれ、皮を剥いたら刃更さんのサイズと違っちゃうじゃないですか　とんだ誤造的欠陥　ええいバイトのクセに、よもや性的な事でサキュバスの私を欺るとは　はっ　という事は、今まで澪さまや柚希さんが食べるところを見てドキドキしていた私は、ぬか喜びも良いところじゃないですか　とんだピエロですよっ」

本当なら、ここから十分くらいかけてチェバチェバいやらしくしゃぶってから食べるつもりだったというのに。刃更と同じサイズじゃないなら、そんなものは何の意味もない。

方卿弁がプリプリ怒りながらバイトを食べ始めると、ふと東城家の庭に来客が訪れた。

「おや、来たんですか……」

方卿弁は自然と表情を笑みへ。すると来客は、ゆっくりとした足取りでテラスへと近付いてくると、方卿弁が腰掛けているウッドデッキへぴょんと飛び乗ってきた。そしてこちらを見上げて、にゃ　と可愛らしい鳴き声をあげる。

毛並の艶やかな　た。この猫と仕以前、スパへの買い出しの帰りに見つけて追い掛けた後、結局追に逃ってヒッチハイクで帰てきて以来の付き合いだった。

猫には生活を送るトでのテリトリ　があるため、見つけたス　バ　のところまで連れて戻ったのだが、乃剛亜に懐いてくれたのか、それとも東城寮がこの猫の生活圏の範囲内にあったのか　たまにこうしてから　と奇　てくれるようになっている。

雌猫は「ょ　」と、何かを訴えるようにノッとこちらを見てきた。

それが自分の手にあるバナナへと注がれている事を察して、

「　これが欲しいんですか？」

乃剛亜が尋ねると、雌猫が肯定するかのように「にゃ　」と鳴いた。

「うん　カリウムが多いので、あんまり女の身体には良くないと思うんですけど」

とはいえ、この雌猫は首輪をしていない。恐らくは飼いネを持たない野良だろう。

これまでも空腹を覚えた時は、生きるために眼の前にあったものを食べてきた筈だ。

「まあ、ちょっと位なら良いんですかねょ？」

乃剛亜は食べかけのバナトの先を少し手切ると、雌猫の前へと置いた。

すると雌猫はフ　フ　と匂いを嗅いだ後、美味しそうにバナナを食べ始める。

その頭をな剛亜は優しく撫でながら、

そのバトト社波を剝くまで、ウチの刃更さんのと同じ太きだいたんですよ　？」

などと語り掛けていると、あっという間に食べ終えた雌猫がこちらを見上げ、もう　度「にゃ　」と鳴いた。たが、それはバナナのお代わりを求めているものではなくて、

ああ、はいはい　とうぞ」

乃剛亜がノ　トパソコ　を横に退けると、雌猫はそのまま空いた乃剛亜の膝のよへと乗ってくる。この雌猫がやってくると、乃剛亜はいつも彼女に自分の膝を貸していた。そしてこちらの膝のトで「へあ」とあくびを　つすると、雌猫はいつものように小さく丸まって眼を瞑った。乃剛亜はふっと笑みを浮かべると、そんな雌猫の頭を撫でてやる。

乃剛亜は、この猫に名前を特に付けていない。

下手に情を移してしまいたくないからだ。たがそれは雌猫も同じようで、ここへやって来るのも毎日という訳ではないし、こうして膝を貸しても小　時間もすればどこかへ行ってしまう。たまたま山会って意気投合したが、互いに馴れ合うような事はない　しかし名前は知らなくとも　緒に居ると心地良い、大人の女同ょのような今の関係を乃剛亜は結構気に入っている。そんな彼女とぼんやり過ごす、昼下がりの時間も。そして彼女に膝を貸し終わる頃に山かけると、混雑するタ　前にス　バ　へ着いて買い物ができる。

たが　今日はそうはならなかった。乃剛亜は笑顔で雌猫を膝に抱いたまま、

「　ょ何の用です。ここへは来ないという約束の筈ですが」

昼休中の彼女を起こさないように、静かな口調で言った。しかし、

「　」

雌猫は乃剛亜が発した空気を敏感に感じ取ったのか、パチっと眼を開けた。

そしてこちらの膝のトから飛び退くと、驚愕したように身を低くして威嚇を見せ始める。

すると、東城寮の庭の空間がぐにゃりと歪み、美しい女魔族が現れた。

褐色の肌をしたその女魔族――ゼストは冷たい瞳でこちらを見下ろして、

「　ノルギア閣下より、直接貴女に伝えるようにと命を受けました」

そして言った。

成瀬澪からウィルベルトのカを抽出する準備が整　たとの事です。決行は明日　貴女にも働いて貰いますので、そのつもりで」

「　」

ゼストの言葉に、乃剛亜は無言を返しながら思う――ついにこの時が来た、と。

たが、これは乃剛亜も覚悟していた事だ。昨日、乃剛亜は滝川八雲と　ラ　スと学校で話し掛けられ、とっさに応えたところをタイミ　グ悪く刃更に目撃されてしまったのだ。

ノルギアが澪を拉致して彼女やその力を自分のものにしようとしている事は、同じ澪の中に眠　ているウィルベルトの力を手に入れようとしている現魔王ヴォ　ルトにとっては、邪魔以外の何ものでもない。そしてラ　スは、現魔王ヴォ　ルトが遣わした現在の澪の監視役である。そんな彼からいきなり声を掛けられ、こちらの狙いを見透かされたような事を言われれば、最低限知られ有ぜぬ位の言い訳はしなければならない。

ラ　スと別れた後に刃更と合流すると、乃剛亜は彼から追及を受けた。取り敢えずは筋の通るような説明で誤魔化すと刃更は信じてくれたようだったが、それでも小さな疑いの種は持たれたろう。たからあの時、いよいよ限界だと思った。

状況も――そして自分の心も。思わず黙り込んだこちらに、ゼストは静かな声音で、

何か問題でも？」

「いいえ。ただ、わざわざここへ伝えに来る程の話でもないと思っただけです」

とも乃剛亜。

この寮には、刃更さんと柚希さんによる監視結界が張られています。私や澪さまがいるため、山入りを禁止するようなものではありませんが――それでも魔族が侵入すれば魔力の形跡は残ります。後で気付かれたら一体どうするつもりなんです？」

計画が明日だというなら、それこそそんな軽はずみな真似は避けるべきだろう。

しかし、ゼストは意に介さないように、

「その心配ならば無用です。ここへ入る際に、私の魔力はギリギリまで落としてあります。もし、あの勇者の一族の一人が帰ってきて私の魔力の痕跡に気付いたら、貴女のカで澪に言い訳をしておいて下さい。『先代魔王の力に惹かれて、低級の現魔がやって来たから撃退しておいた』とでも」

それで問題ない筈です。

「ここまで散々喋を引き続けてきたのです　今さらもう　つくらい嘘が増えたところでとうという事はないでしょう」

「　」

その言葉に、乃剛亜は思わず反応していた。デッキからぴょトとり、激しい怒りに殺意を込めた瞳でゼストを睨む。すると辺りの空気が凍で張り詰め、突然気配を豹変させた乃剛亜に、傍にいた雌猫がゼストではなく乃剛亜を恐れたように逃げ出していった。

「　」

そんな乃剛亜の殺意をゼストはものともせず、こちらをッと見詰めてくる。

その瞬間の裏にあるものに気付き、

「う　　」

万理亜は思わず唇を噛んだ。ゼストが、わざわざここへ来た理由が解ったのだ。

「慌てているんですね。

間違いない　ゼストの瞳を通して、ノルギアにこちらの様子が伝わっている。

きっと、いよいよ偽を裏切る事になった万理亜がどんな反応をするか見て愉しむために、ゼストを通わしたのだろう。ノルギア自身が同じいて来なかったのは、こちらを見世物にしながら性奴隷にしている女達と愉しむために違いない。

あの下種男　っ

思わず万理亜が浮かべた苦い表情に、全てを視ていたノルギアが満足したのか、

「それでは」

ゼストは短くそう言うと、虚空へ溶けるようにしてフッと姿を消して、

「　　　

程なく刃更遠が帰ってくる時間だ。帰はともかく、刃更や柚希は嬉しい。少しでもいつもと違う哀情を見せれば、彼らはすぐに昭和脳を抱くだろう。これまで「嘘」に気付かれなかったのは、刃更遠の傍にいる時はノルギアに監視されているからだ。だから――いつものように気持ちを切り替えなくては。全てを守り抜けるか、それとも全てを失うかは、どうせ遠からず分かる。自分は最後まで、刃更遠に嘘を吐き続ける事ができなかったけれど。

それでも。

成瀬ち朗弥は、この想いだけは絶対に嘘にはしない。

母親のノェヲたけでなく、もう一つの家族のように大切な彼らを想う気持ちだけは。

絶対に嘘にはしない。

4

そして――この日の夜。

成瀬ち朗弥は、いつものように完全に己を殺して過ごした。

柚希を喰し、刃更を驚かせ、そして傍に怒られた。

その代わり、彼らが好きなおかずを一つずつ心を込めて丁寧に作った。

いつものように、二人が美味しいと言ってくれたのが泣きたい位に嬉しくて。

これが最後の思い出だからと、彼らの表情と言葉を決して忘れないように、脳裏にしっかりと焼き付けた。

自分は今、上手く笑えているだろうか。

ちゃんと、いつもの成瀬ち朗弥を演じられているだろうか。

演遠だけでなく――きちんと自分自身をも騙されているだろうか。

そうした心の中で、何度も何度も繰り返しながら。

第3章　ずっと素直になりたくて

1

野中胡桃は幼い頃から精霊との相性が良かった。

だから五年前、勇者の一族の〈印〉を発動させた後、姉の柚希が剣技を久々に習得して全忘型剣士としての才能を伸ばしていったのに対し、胡桃は精霊魔術師としての才能を開花。今では〈印〉の精霊魔術師の中でも、一を争う程の腕にまで成長していた。

たが　そんな胡桃が現在、己の能力を上手く使えずにいた。普段は力を貸してくれる精霊達とのチャンネルが開きにくい場所　魔界へと来ているからだ。

穏健派の魔族達の本拠地である都市ウィルダ　。かつては、歴代最強と謳われた先代魔王ウィルヘルトが治めていたこの都市は、豪華な王城と賑やかな城下街とで構成されている。その周辺にはオルトラの森などに代表される豊かな自然が多数存在する中、野中胡桃は現在、ウィルダ　ト城にほど近い場所を流れるフォステ川の中流にいた。

「　　」

胡桃は岩石や砂利が転がっている河原に佇みながら、精霊術の相手を具現化したその手の平を川の水面へと向けると、意識を集中して精霊とのチャンネルを開放した。

と同時、胡桃が突き出している精霊術を纏ったその光の球体に魔法陣が展開すると、流れるたった一の水に変化が生じる。徐々に渦が生じ始めて　m程の大きさになると、そのまま水が空へと巻き上がったのだ。小さな水飛沫が舞い散る中、胡桃がさらに集中を高めると、舞い上がった水が徐々にとある神獣を形成する。

龍だ。

「おおー！」

傍にある巨大な岩の上から感嘆の声を上げたのは、ここまで一緒に付いてきた仲間のサキュバスの少女　成瀬ち朗弥だった。そんなち朗弥が見ている前で、

「　　っ」

不意に胡桃は、表情を厳しいものにした――途端に、巻き上がっていた水が制御を失って龍の形が崩れると、大量の水が雨を降らすように川面へと落下してゆく。

「凄いじゃないですか胡桃さん！　昨日の今日で、ここまで使えるようになるなんて」

「ふ・ふ・ふ・こんなんじゃ全然駄目だよ」

感心したようにこちらへ拍手するち朗弥に、胡桃は顔を顰めて言った。

胡桃が呼び掛けていたのは、水属性の精霊だ。普段なら、ウ・ディ　ネやネレイド、アプサラスなど様々な精霊が胡桃に力を貸してくれる。

たが魔界へ来た影響で、胡桃は現在、精霊達とのチャ・ネルを上手く開く事ができずにいた。今も本当ならもっと巨大な水龍を生み出し、

そのまま上空へと舞い上がらせる筈だったのに　結果は、あの程度のサイズすら維持できずしまいだ。

いつものように精霊に呼び掛けても、彼らの声や反応が薄く遠くに感じられる。恐らく今の胡桃は、人間界にいる時の半分程度の力しか出せていないだろう。

「そんな急には無理ですよ。ここは魔界で――胡桃さんは勇者の　様なんですから」

万理亜は苦笑すると、岩の上から胡桃のすぐ横へ飛び降りてきた。そして、

「さあ、そろそろ訓練は　日終わりにして、お昼にしましょう。メイドさんが厨房で、サンドイッチを作ってくれたんですよ」

そう言って、万理亜は手に持っていた大きめのバスケットを開けて胡桃に見せた。中には肉や野菜、卵など様々な具材を挟んだサンドイッチがギッシリと詰まっている。流石は城の料理を任されたメイドが作っただけあって、美味しそうなのは良いのだが、

「嬉しくなんでも、　人で食べるには多すぎない……？」

「胡桃さんは今朝ちゃんとご飯を食べてないんですから、これ位で　度良いんです」

「……ということ……」

万理亜の言葉に、胡桃は無言になった。そう――胡桃は朝ご飯を、ほとんど食べていない。　度は食堂で席に着いたものの、食べ始めてすぐに退席してしまった。

胡桃がそんな真似をしたのは、許せない事があったからだ。黙り込んだ胡桃に、麻のような素材で織られたラグをシートにして叫原の褒の草むらへ敷いた万理亜が尋ねてくる。

「……まだ刃更さんとゼストさんの主従契約の事を怒っているんですか？」

そう　胡桃は今朝、刃更からゼストと主従契約を結んだ事を聞かされた。

無論、魔界へ来る前に刃更から「ゼストを守るために必要なら、主従契約を結ぶかもしれない」と聞かされてはいたし、優しい刃更の言う事だ。胡桃も言葉のトでは納得していたと思う。たが、実際にそうなったと聞かされた時　胡桃は、自分が刃更とゼストの主従契約を条件付きでしか認めていなかった事を知った。それは、

……絶対に、お姉が傍が何か言ってくれると思ってたのに……。

傍を狙っていたプルキアは、傍の義父母を惨殺した因縁もある　言うなれば傍や刃更にとって　番の敵だった。そんな男の部下だったゼストと刃更が主従契約を結ぶ事など、口では胡桃と同じく理解を示していても、本心では絶対に認めていないと思っていた。

ところが　柚希と傍はほぼの無言の後、刃更達の契約を認めてしまった。たから、胡桃はとっさに「何で？」と叫びながら、座っていた椅子からはねトがってしまい、

でも。

胡桃はそれ以上、何も言えなかった。胡桃にも以前、度は刃更の敵に回ってしまった負い目があったからだ。そのため刃更を酷く責め切った事のない柚希や傍が認めた以上、胡桃に異論を唱える事などできなかった。

それでも、皆は胡桃の感情を理解してくれていたようだった。

刃更やゼストは責められて当然のように沈黙していたし、柚希　傍・万理亜の　人は胡桃の気持ちも刃更達の気持ちも解るからこそ、何も言えないようだった。たけど、そんな皆が自分に向けてくる瞳に耐えられなくて――気が付けば胡桃は食堂を飛び出し、廊下を　人で歩いていた。そして胡桃は、廊下で偶然すれ違ったメイドのノエルに近くに川がないかを尋ねたところ、この場所を教えて貰ったのである。

野中胡桃が、川へ来たかったのには理由があった。

五年前の悲劇の前、また刃更が勇者の　様の〈眼〉に居た頃――胡桃はよく、刃更や柚希と共に近くの川へと遊びに行っていた。魚釣りをしたり、一緒に泳いだりして、まるで本当の兄妹のように仲良く過ごしていたのだ。　つ年下の胡桃は、いつも刃更や柚希に可愛がって貰い、人との幸せな思い出を幾つも積み重ねていた。

それらは　度――五年前の悲劇で、完全に失われてしまったと思ったけれど。

五年ぶりに悲しい再会を果たして、　度は戦って　それでも、刃更は昔と変わる事なく、胡桃を大切にしてくれていた事を知って。たから、仕事とはいえ同じ屋根の下で暮らせるようになった時は本当に嬉しかった。なしずつでも、昔の自分達に戻っていけたらと心の底から思っていた。本当はこの川へも皆で　緒に来たかったのだ。刃更や柚希と子供の頃を思い出しながらなしでも昔の関係に戻って、そこに傍や万理亜も加えて新しい思い出を作りたかった。そして　何ならそこに、ゼストがいても胡桃は構わなかったのだ。

たけど。

それは、彼女が刃更と主従契約を結んでいなければの話だ。

ゼストがS級クラスの実力の持ち主という話は聞いている。刃更と主従契約を結んだ事で、彼女はさらに強くなり、そして刃更の力を上げる役にも立つだろう。

……それでも。

野中胡桃は思う――ゼストには、彼女にたけは絶対に負けたくないと。

たから胡桃は　人でここを訪れると、ルキアから貰った銀色のエレメントを少しでも使いこなせるように練習を開始した。万理亜がこちらの後を追ってきてくれたのは、その少し後の事だ。そして万理亜は、シートのトにサンドイッチやおかずを並べ終えると、

とにかく、まずはお昼ご飯にしましょう。お腹が空いたままときちんと頭が働かなくて、色々と良くない事を考えてしまいますから」

そう言って、こちらを手招きした。たから、

「　うん」

野中胡桃は頷くと、万理亜の隣に座ってこの日初めてのご飯を食べ始めた。

厨房でメイドが作ってくれたというサンドイッチは美味しかった。

バスケットいっぱいの量は　人分には多すぎると思ったが、朝をほとんど抜いていた事もあり、食べ始めると万理亜と共にペろりと平らげる事ができた。心がモヤモヤしていても、美味しいもので胃が満たされれば、人はなしたけ元気になれる。

そんな胡桃の様子を見て取ったのか、万理亜が笑顔で言ってくる。

「ね？　ちゃんと食べられたでしょう？」「……もう。ごちそうさま」

胡桃が食事を終えると、万理亜は携帯用ポットに入っていた飲み物をカップに注いで、

「はい胡桃さん、どうぞ」「ありがと　」

受け取ると、カップの中のお茶は温かな湯気を立てていた。　口飲むとその温かさと、口から鼻へと抜ける仄かな甘い香りに、胡桃は自然と身体の力を抜いていた。すると、

「なしは苦手でしたっけ？」

と、優しい声でお弁当が言ってきた。

「胡桃さんは精霊術師なんですから　勇者の故郷がイライラした状態で魔法を使おうとしても、魔界の精霊達は警戒するだけでしょうし、食べてくれないと思いますよ？」

あたしは、別にイライラなんか　」

拗ねたように胡桃が言うと、お弁当は苦笑して、

「刃更さんとゼストさんの事が気になるのは解りますが　せっかく美味しいご飯とお茶でリラックスできたんです。あんまりモヤモヤして台無しにしては勿体ないですよ」

「……うん」

確かにお弁当の言う通りだ　魔界の精霊達と心を通わせるには、まずは回復に努めて貰わなくては始まらない。霊操術の確手を具現化して見てみれば、スロットに嵌まっている、精霊達と繋がるための各属性のエレメントの輝きがいつもよりも純度が高かった。

たけど。

これでも、またマシになったなのだ。昨日、魔界へ到着したばかりの時は、それこそ強い魔素の影響でエレメントが完全に濁り、精霊達をロクに感じる事もできなかった。

そんな胡桃が、ここまで魔法を使えるようになったのは、魔界の精霊達とコンタクトを取りやすくしてくれる闇色のエレメントをくれた女性がいたからである。

何考えてるのかな、お弁当のお姉さん」

胡桃は、スロットに嵌まっている暗い色のエレメントを見ながら言った。

「あたしに、こんな物をくれるなんて　アンタと仲良くしてるお礼だって言ってたけど、海の事を嫌ってるあのヲムサスって奴の副官なんでしょ？」

「そうですね……あのビジバシなルキア姉様が、私と仲良くしてるからって特別な施しをするというのは、ちょっと考えにくいですし」

うん、と思案しながらお弁当。

「もしかしたら、個人的に胡桃さんの事を気に入ったのかもしれませんね　」

「何でよ　別にあたし、アンタのお姉さんに気に入られるような事なんか」

「おや――心当たりはないと？」

「ある訳ないでしょ」

胡桃が即答を返すと、

「ふむ、そうですか」

お弁当は何気ない口調で呟くなり、

「　だったら教えてあげますね」

そう言うなり、胡桃をベットのトへと押し倒してきた。

「ちょっ、お弁当……？」

驚きと怖りの声を上げた時には、慣れた手付きのお弁当によって胡桃は服のボタンを外され前を全開にされていた。お弁当はさらに、胡桃のスカートのホックへ手を伸ばし、

「開きましたよ、胡桃さん　昨日のルキア姉様の執務室での事」

「っ　」

キョッとなって息を呑むと、その僅かな隙にホックところかファスナーまで開けられ、胡桃はスカートを引きずり下ろされた。

「ま、待って……あれは、違うの……っ」

胡桃は真っ赤になりながら必死に止めようとするのだが、パワータイプのお弁当の腕力の前では、その程度の抵抗など何の意味もない。そして、

「私はこれまで、胡桃さんが傷ついたり、柚希さんに追いつけるよう協力してきました。なのに、私の知らない間にルキア姉様の前で刃更さんにされていたなんて　おまけにそうなった原因は、私が刃更さんにされているところを盗み見ていたからだそうですね」

そう言うお弁当の声には、胡桃はブラノヤ　もろともト管を剥ぎ取られ、

「やっ……ばっ、馬鹿あっ」

胡桃が慌てて両手で胸を隠そうとすると、お弁当が左右の両腕をグルグル巻きに拘束してきて、胡桃は両手を頭のよへと持って行かされた。そしてこちらの両手が塞がったのを良い事に、お弁当は胡桃の靴と靴下を片方ずつゆっくりと脱がしながら、

「ふふっ、胡桃さんも人が悪いです　昨夜のお風呂では、そんなこと少しも言ってくれなかったじゃないですか」

「だ、だって……」

言い淀むこちらに構わず、お弁当は胡桃を脱がし続けてきて――そして、

「あ……」

胡桃はとうとう消え入りそうな声を上げた。

上半身を裸にされ、ノョン　牧にされてしまったのだ。背中の下に肌を触して羞恥に身を赤くしたこちらを、お弁当はサキュバスの本能に火が付いた瞳で見下ろすと、自分も服を脱いでいった。そして胡桃と同じくノョン　牧になると、

「胡桃さんがルキア姉様に気に入られた事は、友達として嬉しい事です。何も隠す必要なんてないというのに。全く　また私に対して、そんな水臭い事ができるだなんて」

ふふっと笑う。

お仕置きをしなくちゃいけませんね」

そう言うなり、こちらの両膝をこじ開けながら覆い被さってきた。

「ふ、お弁当あ　」

胡桃は必死に拒もうとしたが、両手を縛られた状態では抵抗にもならない。脚を絡められた胡桃は、お弁当の控えめな胸でしの胸をいやらしく擦られた　その途端、

「あっ、ああ……ああああぁっ♥」

胡桃は甘い叫び声を漏らした。淫魔サキュバスのお弁当に触れられる愛撫は、信じられないような快楽をもたらしてくる。おまけに胡桃は、落や柚希に追い付くためというお弁当の悪魔の囁きに乗って、東城家では指日のようにお弁当にいやらしい事をされてきた。当然、胡桃の身

体はその快楽の味をすっかり覚えてしまっており――主従契約を結んでいないにも拘わらず、最近は澪や柚希と同じくらい徹底的に躾けられてしまっていた。

「やぁっ　あたし、こんな　っ、外でなんて　」

恥ずかしいのに、全身を駆け巡る甘い感覚にどうしようもなく躰が震える。すると、

「大丈夫ですよ　私が胡桃さんを、澪さまや柚希さんに負けないような刃更さん好みの女の子にしてあげますから」

そう言って、乃理弥はこちらの頬をへろっと舐めた。

「あ――っ」

刃更に好きになって貰えるような女の子になれる　そう思ったらもう、乃理弥に徹底的に躾けられるのを受け入れてしまう、快楽に弱い胡桃になってしまい、

「ふふふ、刃更さん以外に、胡桃さんを最も可愛がってあげられるのは　体誰か、ちゃんと思い出させてあげますね」

乃理弥は嗜虐的な笑みを浮かべながら、そ　こちらの右脇へと唇を寄せてきた。

そして――次の瞬間　自分の　最も弱い場所を思いっきり吸われ、

「っ　ふあああああんっ♥」

野中胡桃は、青空の下で得た本気の絶頂に、躰を震わせながら極まった嬌声を上げた。

2

外での行為に興奮したのか、乃理弥はいつもより執拗に激しくて。

胡桃は完全に腰が抜けて立てなくなるまで乃理弥に全身を愛撫され、乃理弥の気が済むまで徹底的に女の悦びを与えられ続けた。よって、その後はもうとてもじゃないが訓練にはならず　陽が傾くまで休憩した後、二人でウィルダート城へと戻った。

そして、その足で胡桃が向かったのは浴室だ。女の匂いをさせたまま戻る訳にはいかず、乃理弥と一緒にHで洗ったのだが、そのせいで身体が冷えてしまっていた。

これで風邪などを引いてしまったら、いよいよ自分は皆の足手纏いになってしまう。

そんな情けない事態だけは避けたかったし、

それに。

朝食の場であんな態度を取ってしまったために、また皆と仕舞を合わせづらい。

特に　刃更やゼストとは、どう接すれば良いか解らなかった。いつまでも逃げられるものではないが、それでももう少し猶予が欲しくて　明事があるという乃理弥と廊下で別れた胡桃は、脱衣所で服を脱いで裸になると入浴場の中へと足を踏み入れた。

すると胡桃は、また夕食の前だというのに、洗い場に先客の姿があるのを見つけた。

柚希と澪だ。

「あ　」

胡桃が気付きの声を上げると、身体を洗っていた　二人もこちらに気が付いた。とっさに気まずい表情になった胡桃に、柚希と澪は顔を見合わせると、すぐに優しい表情になって、

「お帰りなさい胡桃さま」

そ　ちに乃理弥が行ったみたいだけど、あの子が迷惑掛けなかったろう」

そう言って、こちらへ笑いかけてくれる。まるで胡桃が朝してしまった事を気にしていないような態度――だからこそ、胡桃は申し訳なさそうに柚希の下へと歩み寄ると、

「ごめんなさい、二人とも、今朝はごめん」

うなだれながら謝りの言葉を口にした。

「お姉様は刃更様の契約に納得していたのに　よりによってあたしが、あんな態度」

そして胡桃は、自分などよりも心中が穏やかではなかったであろう少女を見る。

「澪なんてヒステリアって奴の事もあったとで、それでも受け入れてたのに」

「胡桃ちゃんが謝る事ないわ。私もね、自分でも少しヒックリしてるの　刃更には予め言われていたけれど、やっぱりギリギリまで本音では複雑だったから」

澪は優しく苦笑すると、

「ねえ、ここ座って」

座るバスチェアを隣へと移動してくれた。

澪と柚希の間が空いた形。たが胡桃はその椅子に座れなかった。　人の間　そこは今朝の食堂と同じ場所。たから、

「っ、っ、っ」

胡桃が立ち尽くしていると、そんなこちらの手を柚希が優しく引いてくれた。

たから許しを得たように、胡桃がゆっくりと腰を下ろすと、

「胡桃　少し身体が冷えてる」

こちらの体温に気付いた柚希に言われ、胡桃はコクンと頷いた。

「先刻、外で少し川に入ったから」

「しゃあ、早く湯船に入って温まらないとね　話の続きは向こうでしましょ」

澪に促される形で胡桃は再び頷くと、お湯で自分の身体を流していった。

そして――胡桃は柚希達と共に浴槽へ向かうと、　人に挟まれるようにしてお湯の中へと腰を下ろした。柔らかな温かさに包まれ、ホッと身体の緊張が解けると、

あ。

右造りの底についていた両手に、それぞれ柚希と澪の手がそっと重ねられ、

刃更とゼストの事を、あたしが許せた理由なんだけど」

そう前置きをして、お陽の傷が言った。

「あたしがあの、人の契約を受け入れられたのは、柚希や胡桃ちゃんのお陰なんだ」

「　あたしとお姉の？」

そう。柚希も胡桃ちゃんも、最初はあたしや刃唯姉と敵対してたでしょ？　でも、今は一緒に暮らしてる。それは刃更のお陰なのかもしれないけど、それでも本当に危険だと思ったら、人はたとえ刃更が何を言ってもあたしを見捨てたりしないんじゃない？」

だけど、

「柚希も胡桃ちゃんも、そんな事はしない　それは、あたしや刃唯姉が刃更に危害を加えるような事はしないって信じてくれたからでしょう」

「それは……」

肯定の言い淀みを放ったこちらに、澪は微笑みを作って、

「あたしもね、同じなんだ。……刃更に敵対しないで、あたしを認めてくれた柚希や胡桃ちゃんの事は仲間だって思ってるし、友達みたいに思ってる」

そして、

「魔界でゼストと再会した時　彼女がもう、あたしに近しくて危害を加えたりしないって解った時、もしかしたら胡桃ちゃん達と同じように歩み寄れるかもって思ったの。そしてノェラさんのお付きのメイドをしていながら、それでも刃更を切なそうな眼で見ている彼女を見ていたら　昔のあたしと重なって見えちゃったんだ」

「昔の澪と？」

「うん　お父さんとお母さんをノルギアに殺されてからも、色々な事があってね。しばらくの間、刃唯姉以外は誰も信じられない時期があったの

中でも、特に男の人の事が」

澪は嫌な事を思い出す表情で言った後、表情をふっと穏やかにして、

「たけど　最初は騙して近付いたあたしに、それでも刃更は優しかった。あたしの事情を知ったら、わざわざ後を追い掛けてきてくれて助けてくれたり。その頃はまだ、柚希はあたしと関わるべきじゃないって刃更に忠告していたんだけど　」

だけど、と澪。

「それでも刃更は、あたしを守るって言ってくれた　柚希の事は今も大切な幼馴染みで、五年前に自分がした事を忘れた訳じゃないけれど、この世界を守る勇者の一人があたしを守れないなら、それは自分の役目だからって」

あの時ね　思ったの。

「刃更や退さんなら、信じて頼っても良いのかもしれないって。ノルギアとか、管財人の弁護士とか、街の男達とか、そういう男ばっかりじゃなくて。本当の家族みたいに……お兄ちゃんみたいに、あたしの事を大切に想ってくれる人がいるんだって」

だからね、

「そう思ったら……泣いちゃうくらい嬉しかったの」

そこで澪が浮かべた表情に、

「　」

胡桃は、成瀬澪という少女が刃更に抱いている感情を改めて理解した。それは幼い頃から自分が見続けてきた横顔と　刃更を想っている時の柚希と同じものだった。

穏健派に預けられたゼストにとって、ノェラさんの存在は多分、あたしにとっての刃唯姉みたいなものだったんだと思う。そして、あたしか刃更と出会ってアイツを必要としたように、ゼストも刃更と出会って――アイツの事を必要としていた。柚希や胡桃ちゃんは、色々あったけど最後はあたしが刃更と一緒にいても良いって認めてくれたわ。そして刃更は、あたしを助けてくれた時と同じ気持ちで、ゼストの事を助けようとしていた」

だから、

それならあたしも、ゼストを認めてあげなくちゃ　て　そう思ったの」

両親を殺した仇の部下でも？」

胡桃が問い掛けると、澪は「うん」と頷いて、

「もしも　ゼストがあたしの両親を殺していたら、許せなかったかもしれない。でもそうじゃないわ　あたしに敵対していたのも、制御帯をしたノルギアに配下として従っていたけど。なったら、そんなのはノェラさんを傍に寄されていた刃唯姉と同じよ。そして、全ての元凶だったノルギアはもういないんだもの。いきなり仲良くするのは難しいかもしれないけれど、少しずつ解り合えていけたらって思ってる」

それは、刃更とゼストの主従契約を心の底から認めている発言だった。だから、

「……お姉は？」

胡桃が逆隣を振り返りながら問うと、

私の想いは、五年前から変わらない」

さらりとした口調で柚希は言った。

今度こそ刃更を守る――そのために、私は強くなった」

そして、

「刃更は今、五年前に私を守ってくれた時と同じように、必死に皆を守ろうとしてくれている　私の使命は、そんな刃更を傍で守り支える事。その想いを同じにできるなら、別に仲間として認めても構わない。反対に　」

そこで柚希はスッと瞳を冷たいものにして、

刃更を本気で害そうとする存在かいたら、それが誰であろうと私は容赦しない。たとえゼストや　澪や刃唯姉だろうと」

それを聞いた澪が、そっと苦笑を漏らした。たがそれは呆れたからというよりは、ある種の頼もしさを感じての苦笑いだった。

胡桃は笑えなかった。代わりに、静かな口調で問う。

「……あたしでも？」

……言った答。許さないのは、刃更を本気で害そうとする存在」

だから、とお姉の中で重ねていた手を握られた。そして、そのまま優しく抱き寄せられ。

「お姉……？」

腰を抱かれた胡桃が、間近な驚きと共に眼の前の柚希を見上げると、

今までも、これからも――胡桃にそんな真似かできない事は私か　澪良く知ってる。前に拘束や断渡さんと来た時に、あれた子供んでいると言っていても、最後まで刃更を本気で殺そうとはしていなかったように」

柚希は優しく微笑んで、そっとこちらの頭を撫でている。そこへ澪が、

「あのね？　胡桃ちゃんが朝早くて行った後、万里亜が後からお弁当を持って月にいる胡桃ちゃんの所へ行ったでしょう？」

「？　うん……？」

意味深な声音で言われ、疑問を浮かべながら胡桃が頷くと、

「あれは、胡桃ちゃんを連れ戻すなら自分が一番適役だからって、万里亜がその役を買って出たからだったの」

わざわざお弁当を持って来たくらいだ。こちらを心配してくれていたのは解ったが、

「万里亜、そんな風に言ってくれてたんだ」

月まで来てくれた後――万里亜はいつもと同じような感じで、胡桃の傍にいてくれた。

その事をありがたいと思いつつも、最後は強引にこちらを押し倒してきたし、てっきりいつものように快楽で有耶無耶にしようと企んでいたのだろうと思っていたのだが、

「じゃあ、もしかして今までも？」

東城家でも、万里亜はよく胡桃に色々と絡んできていたが　或いはそれも、胡桃のためにわざとそうしていたのだろうか。胡桃が万里亜への感謝を想っていると、

「でもね、万里亜がそう言ったのは、すぐに胡桃ちゃんの後を追いかけようとした奴がいて、たけとそいつがいつもより冷静さを失っていたからなのよ。胡桃ちゃんはゼストとの主従契約にとっさに納得できなくて月まで行ったのに、そいつ　てばきちんと説明してやらなきゃ」

とか真顔で言うんだもん」

澪が笑みを含んだ声で言った。

「え？」

思わず聞き返した胡桃に、

「で、そんな事したら逆効果よってあたし達が言って　それで万里亜が行く事になったの。そうしたらね」

ふふっと澪は笑って、

「だからって胡桃ちゃんを一人にしておけるかって。万里亜がメイドにお弁当をお願いしたら、出来上がったのを持って胡桃ちゃんの所へ行くまで、どうしたって多少は時間が掛かる　でも今の胡桃ちゃんは魔界へ来たばかりの影響で、本来の力が出せない。その間にも何かあったらどうするんだって」

だから、

「たぶんだら自分は声を掛けないけれど、万里亜が来るまで危険がないか気付かれないように見ていてやるくらいなら良いだろって。そう言って、胡桃ちゃんの後をすぐに追い掛けていた奴がいたんだけど――気付かなかった？」

「　万里亜が、あたしを？」

「うん。ちなみに万里亜が持って行ったお弁当を作ったメイドって　誰だと思う？」

「　」

含みのある澪の言葉に、胡桃はいよいよ言葉もない。そして、

「胡桃　ここから出たら、あの　人に」

「……ううん」

捉えを伴った柚希の問い掛けに、胡桃は素直に頷いた。

あの　人にきちんと謝って、お礼を言おう――そう心の中で強く思いながら。

3

たが、夕食の席で胡桃が万里亜とゼストに礼を申し上げる事はできなかった。

人を前にして、胡桃が緊張になれなかったという訳ではない。

万里亜とゼストが、夕食の席に現れなかったのだ。

万里亜は昨夜、ゼストとキ従契約を結んだだけではない。胡桃の件で万里亜の説明が途中になっていたため、澪達も知らなかったらしいのだが何と万里亜は、魔健派の現トップであるラムサスと闘っていたのだという。

そのため、ウィルダート城の外へ出る事を禁じられていたらしく、にも拘わらず今朝の件で胡桃の後を追って外出してしまった事が問題となったのだ。万里亜は今夜いっぱい自分の客室から出る事を禁じられ、胡桃達も明日の朝までその事を禁じられた。念入りに部屋の前にメイトまで立っており、誰も出入りができない状態だ。

またゼストも、万里亜が胡桃へ持ってきてくれた弁当を作るために、本来の指令を無視して厨房へ入った事を咎められ、謹慎の処罰を言い付けられてしまったらしい。

本来なら、厨房に入った程度で大した問題になる事はない。

たが、ノエラの勧めがあったとはいえ、ラムサスやクラウスら魔健派のトの連中に断りもなく万里亜と契約を結んだ事か、多少なりとも影響しているらしい。ノエラからラムサスらを言いくるめてキ従契約の件については不問にさせたものの、今回万里亜が問題行動を起こしてしまったため、配下となったゼストにも飛び火してしまった形だ。つまり、

両方とも、あたしのせい　。

夜のウィルダート城――月明かりが差し込む中庭の隅に、野中胡桃は膝を抱えて座り込んでいた。先程までは女子に苑がわれている客室にいたのだが、澪や柚希に気を遣われてしまい、いたたまれなくなって部屋を出て――そして辿り着いたのがこの中庭だった。

「……みんなの足を引っ張るような真似だけはしたくなかったのに」

自分がとれた行動に迷惑を掛けたのかを知り、胡桃は激しい自己嫌悪を覚えた。

また　胡桃には、万里亜とゼストの他に心配している存在がもう　人いた。

城へ戻った時に別れて以降、全く姿を見ていない万里亜。メイドのノエルの話では、万里亜が母親のノエラの部屋へと招き入れられるのを見た者がいるらしいのだが、夕食の時間になって呼びに行ったら返事がなかったらしい。部屋の外から中の様子を窺ったところ、室内に人の気配は感じられなかったとの事だが、

まさか、万里亜も　？

万里亜の問題でゼストまで罰せられたように、貴族とは繋がってゆくものだ。

ノルギアとの　件で、人質に取られていたノエラを助けるために万里亜達を置き去りにしてしまった万里亜の立場は現在、魔健派内で極めて微妙な状態にある。昨日たって魔界へ到着早々にキに呼び出され、彼女の執務室で厳しく問せられかけたくらいだ。

刃更が胡桃を心配して城の外へ出たのは、乃理弥がすぐに胡桃の後を追わず、ゼストに弁当を作らせていたからである。それは見方によっては、刃更とゼストが問題行動を起こしたのは乃理弥にも原因があると言い換える事も可能だ。言い掛かりのようなものだが、そうやって相手の行動に隙や失態を見つけ、難癖を付ける事で己を有利に持ってゆくのは政治における常套であり、だからこそ政治の場では何よりも冷静な判断が求められる。

「……気を付けなくちゃ」

野中胡桃は改めて自分に言い聞かせると、俯いていた顔を上げた。

確かに自分は刃更やゼストに迷惑を掛けてしまったし、乃理弥まで巻き込んでしまったかもしれない　だからこそ、これ以上は迷惑を掛ける訳にはいかない。自分は政治の担い手ではないか、それでも先代魔王の血を引く者と共に、魔導の運命を大きく左右する現場へと足を踏み入れているのだ。その事を肝に銘じなくては　そう胡桃が決意を新たにしていると、中庭の芝生を静かに踏みながらやって来る者がいた。

「　」

胡桃はとっさに変顔を硬いものにすると、その場に立ちよかる。

やって来たのはひとりのメイドだった。だがそのメイドは、愛想の良いノエルやおとやかな他のメイド達とは異なる、凍てつくような絶対零度の美しさを湛えている。そして、

こんな所で何をしているのですか？」

胡桃の眼の前に来ると、ルキアはこちらを見下ろしてきた。その瞳は昨日、刃更にされて快楽に乱れていた胡桃を見ていたのと同じものだ。

彼女の前で逃げた事を思い出し、

「つ、別にっ、ちょっと一人で考えたい事があったので」

緊張と共に気恥ずかしさを覚えて胡桃が頬を赤くしながら眼を逸らすと、

「そうですか　ところで、母と妹を見ませんでしたか？」

「いえ、見てないです。あたしは、しばらくここに居ましたので」

嘘をついても仕方がないので下手に答えてから、胡桃は逆に問い返す。

「また見つかってないんですか？　夕食前、ふたりは　緒に居たって話ですけど　」

ええ。とこかへ姿を消したきり、行方が摑めていません」

「大丈夫なんですか？　その　何か、トラブルに巻き込まれている可能性とか」

乃理弥が戻らない事は、胡桃たち女子も不安になっていた事だ。すると、

その心配には及びません。母と妹が姿を消しているのは、私から逃げているからです」

「え　？」

「詳しい事は話せませんが、ふたりは問題ありません　むしろ、元気が有り余っているんでしょう。私に何の断りもなく、勝手な真似をしてくれるんですから」

「そ、そうなんですか　」

不機嫌そうに言いはしたが、ルキアの言葉に深刻な色は見られない。恐らくは那波なふたりが、ルキアを怒らせるような真似をやらかしたのだろう。

乃理弥達が無事だと知り、胡桃がホッと胸を撫で下ろしていると、

「　それより、あまり感心できませんね」

窘めるような調でそう言って、ルキアはそっとこちらの頬へと触れてきた。

「刃更殿とゼストの話は報告を受けています。ふたりが許められた事について、責任を感じているのかもしれませんが　このような所に人でいては、また問題をいたずらに心配させるだけです。貴女は、同じ過ちを繰り返すような愚かな娘ではないでしょう」

「……ぅ……」

優しい声音で言われ、胡桃は俯いて沈黙する。

ルキアは、穏健派の現トップ　ラムサスの副官だ。政治的には、両者を敵対する事を避けたいこちらと思惑が一致するものの、ラムサスは彼を邪険にしているため、感情的には敵対している複雑な関係にある。

ところが今、ルキアは胡桃に優しくしてくれていた。最初に会った時は冷たい女性にしか思えなかったし、彼女の執務室の前でサキュバスの洗礼を浴びせられた時は、その一方的な迫力に畏怖さえ覚えた。しかし　後で胡桃と乃理弥の様子を見に来てくれた時は、冷たい中にもどこか優しさを感じさせる雰囲気も漂えていて、胡桃が魔界で初めて魔法を使いやすいようにと、闇色のエレメントをくれたのである。

てきりルキアは、胡桃になど興味がないと思っていたのだが、

「　そういえば、私が渡したエレメントの調子はどうです？」

そう言って、こちらとの会話を続けてきた。

「ルへ行って、色々と試してみたと聞いていますが」

「発動はできるけど……普段、人間界で使っている時ほどの威力にはとても」

ルキアがかなぜ自分に構うのか解らないまま、胡桃は言葉を慎重に選んで答えた。

「……少し状態を見られますか？」

昨日、人格場の満船から乃理弥に発射したお遊び程度なら問題なく発動できる。

だが、戦闘で相手に有効なダメージを与えるには程遠いレベルだ。すると、

「　」

ルキアに要求され、胡桃はおそる手に霊操術の龍手を具現化すると、メイ・スロットを彼女から貰った闇のエレメントへと切り替えた。ルキアは、そんなこちらの左手を取り、

スロットに嵌まっている、闇色の水晶球をジッと見つめる。

「　」

数秒上、胡桃はルキアとあまり仲良くしないりが良いのかもしれない。

たが、これはルキアから貰ったものだ。見せろと言われて断る訳にはいかないし、

それに。

乃理弥とルキアの関係は、姉妹たというのにどことなくぎこちなさがある。よって乃理弥と仲良くできている胡桃がルキアと交流を持つ事で、彼女達の関係が少しでも改善されるなら　胡桃は自分が役に立ってあげたいと思う。

なって。

胡桃もまた、五年前の悲劇の後――刃更が土を離れてからは、とくとなく姉の仙希との関係がぎこちないものになっていた。たが、そんな

胡桃と柚希の関係を精神的に修復してくれたのは、正に奇跡と言った事で戦う羽目になった刃更だった。

勿論、自分に刃更と同じ事ができるとは思えない。それでも今朝、万理亜は胡桃を心配して後を追い掛けてきてくれた。そんな万理亜のために、少しでも恩返しができるのなら――胡桃は自分にできる事をしようと思う。すると、

「成る程　誰かに、また心配っている状態のようですね」

「……眠っている状態？」

オウム返しに尋ねた胡桃に、ルキアは「ええ」と頷きながら、

「このエレメントに、高位精霊の加護が宿っている事は既に教えた通りです。しかし、それは使用者を守護する効果があるという意味ではありません。この水晶球の中には、高位精霊から分かれた霊子体の一部が宿っているのです」

「それって……あと一週間で言うところの『神器』と同じって事？」

刃更の魔剣『ブリューナク』や柚希の霊刀『戒那』、深の消滅任務の際に尚悟が使った霊槍『白虎』のようなものだ。単体でも強力な力を持っているが、柚希のように使い手として認められれば、本来備わっている絶大な力を使用できるようになる。

「そうです。貴女がきちんと精霊と心を通わせ合えれば、このエレメントは覚醒し、貴女に本来の力を貸してくれるようになるでしょう」

ルキアの言う「精霊と心を通わせ合う事」ができないからこそ、今の胡桃は一年で万理亜に見せたような体たらくなのだ。思わず黙り込んだこちらに、

「己の中にある、『負』の部分を認める事です」

と、こちらの瞳を見詰めながらルキアは言った。

「知っての通り、精霊には『聖属性』と『魔属性』の存在があり、勇者の一族はその両方の力を借りる事ができます。そして基本的に、貴女達が『聖属性』の精霊の力を使えば『正』に働き、我ら魔族が使えば『負』に働く……しかし、この『正』と『負』は善悪というよりは、陰陽や温度のプラスとマイナスに近いような概念です」

そして、

「悪しき貴女は、これまで自分の世界で力を借りるために精霊達とは『正』の契約や関係を構築し、そのため自らも『正』であろうとしてきたのでしょう。力を借りる事が正義であると、精霊達に訴えるために　無論、人間界でそれを行なうのは正しい方法です。貴女達の世界では、大半の精霊が『正』の状態にありますから」

しかし、

「そのやり方はこの魔界では通用しません。魔素の強いこの世界では、ほとんどの精霊達は『負』の状態で存在しています。自分が『正』であると訴えても、精霊達は警戒するだけでしょう。むしろ、そのやり方で少しでも力を借りられている事の方が驚きです。ただ思うに、それは、貴女が己の中にある負の部分を認め始めているからでしょう」

そう言うと、ルキアはそっと胡桃を抱きしめてきて、

「あ　」

「恐れる事も、過ちだと思う必要もありません。正も負も、貴女の一部です。その事をきちんと理解して精霊に語り掛ければ、彼らはきっと貴女に応えてくれる筈です」

囁きました。やってみます」

ルキアの腕の中で、胡桃が素直に頷いた。すると、

「　」

笑いかけるメイドのサキュバスは、無言でこちらを抱きしめる力を強くしてきた。

さらに――何故かこちらの腰を抱いていた手が下がり、胡桃の尻をそっと触ってくる。少し指を立てて、的確に感じる場所を探してくるその指使いに、

「い、あの　ルキアさ　やめん　？」

甘く鼻を鳴らしながら、身をくねらせるようにして困惑の声を上げると、

「野中胡桃さん貴女はやはり良いですね」

ルキアは艶っぽい声で言った。

「昨日、刃更殿にさせた時から思っていました　貴女はとても可愛いと」

そう言ったルキアが、パチンと指を鳴らした瞬間、あり得ない事が起きた。

胡桃の服の全ての繊維が一瞬で解け、布地が地面に落ちたのだ。ブラジャーまで分解され、一瞬でノーマル裸にされてしまった胡桃は、

「うえんうっ？」

反射的に悲鳴を上げようとして、しかしキアの手でそっと口を塞がれてしまう。

「驚く事はありません。この程度の技、メイドの職を極めた私には容易い事です」

当然のように言われた胡桃は、口を塞がれたままを牛のように押し倒されてしまい、

「つ　！？」

いやない、と本能的に振りを得た胡桃はルキアの手から逃れようとするが、

あ　　

こちらを見下ろすルキアの双眸を目の当たりにして、抵抗する事を忘れてしまう。そこにあったのは、いつものルキアの冷たい眼とは真逆のもの　まるで熱を帯びているかのような艶っぽい瞳だった。その眼は、万理亜が胡桃を刃更好みの女の子にするという名目で調教する際に浮かべるものとそっくりで、

「昼間は魔界の太陽の下で、万理亜にされたようですね　ならば、今度は魔界の月を眺めながら、私が貴女を可愛がってあげましょう」

下弦の月を背負いながら、ルキアが胡桃のノーブルの中へ手を入れてきた　その時、

「ルキア様」

ふと隣にある茂みの陰から一名のメイドが姿を現した。突然の事にギョッとなる胡桃とは対照的に、ルキアはこちらの口を押さえたまま平然と、

「何事です？」

「つい先程、西塔　隣でマリアを発見いたしました」

また、キリキリの所で捕獲には至らず　現在、数名で後を追っています」

その報告に、ルキアの瞳が冷静さを取り戻し、

「成る程　母の力はどうです？」

「シェーラ様の行方は、依然不明です」
良いでしょう。マリアを捕まえて吐かせてやれば済む話です。ニャ、あの子を追っている者達には、私が行くまでいくらでも見失わないようにと伝達を」
「畏まりました」
ルキアの言葉に、ハイと呼ばれた方のメイド少女が踵を返して駆けて行き、
「ユノイ貴女には、私の代わりに彼女を部屋まで送って貰います。それと」
「衣服の隠蔽ですね　お任せ下さい、ルキア様」
残るユノイが頷きを返すと、ルキアはそと胡桃の口から手を離すと、
「少しばかり手荒な真似をした挙げ句、良いところで止めのようになってしまい申し訳ないのですが　とうとしても、あの妹にお灸を据えに行かなければいけません」
そして名残惜しそうに、
「この続きは、また後で　」
「お、お願いだから気にしないで下さい！本当に」
顔を赤くしながら胡桃は言った。こちらとしては、後で続きとが本当に困る　というより、そもそもこの中庭では何も無かった事にして忘れてしまいたい。
「それでは」
そう言って、ルキアは先行したハイの後を追って中庭の回廊へ駆けていった。
後に残された胡桃が、ド緊張のまま芝生のように、へたり込んでいると、
「良かったですね、胡桃殿。ルキア様は、かなり貴女を気に入られたみたいですよ」
服をバラバラにして押し倒している胡桃が返した皮肉を、ユノイはまるで気にする事なく、
「服の事でしたらご心配ありません。きちんと仕立て直してお返しますから」
バラバラにされたこちらの服を拾い集めると、
「それでは、胡桃殿　こちらでお待ちください。そのままのお姿で部屋へ戻る訳にもいかないでしょうから、先に何か羽織れるものを持って参ります」
そう言った時だった。
「いいえ、その必要はないわよん♪」
ユノイの真横に、万魔殿よりさらに幼いサキュバスがいきなり現れた。
「えっ？」「つ　ジェーラ様っ？」
胡桃が呆然となり、キョトとなったユノイが仰け反るようにしながら身構えたがもう遅い。ノエラは、ユノイの額に自分の額をくっつけると、彼女の瞳を覗き込みながら、
「貴女はひとりで自分の部屋へ戻って、胡桃ちゃんの服を直し始めなさい」

「はい、ジェーラ様」
すると、途端にユノイの瞳がとろんとなってノエラに従順な頷きを返す。
「もし後で戻ってきたルキアちゃんに聞かれたら、そうね、胡桃ちゃんは先に澪ちゃん達の部屋へ戻ったと言いなさい――良いわね？」
ノエラの命令にユーノイは「はい」と頷くと、そのまま建物の中へと戻って行った。
「ふぅ」
突然の事に思考が追いつけずにいる胡桃に、
「危機一髪だったわね胡桃ちゃん　でも、この私が来たからにはもう大丈夫よん♪」
そう言って、ロリ母サキュバスはにっこりと笑った。

4

中庭での一件の後、胡桃はノエラに誘われ、彼女の私室へと連れて行かれた。
本音を言えばすぐにでも澪や柚希の待つ自分達の部屋へと戻りたかったのだが、
「そんな姿で戻ったら、また柚希ちゃんや澪ちゃんを心配させちゃうわよ？」
と言われると、確かにそのまま部屋へ戻る事は躊躇われた。人になりたくて「ちょと外の空気を吸ってくる」と部屋を出たのに、ノータイツ一枚で戻ったら逆に心配する。
そんな事にはしたくなくて、胡桃はノエラの言葉に従った。そして胡桃が通されたのは、澪達と共に利用している部屋と同じか、それ以上に煌びやかな空間だった。
広さこそ複数人で使う胡桃達の客室に劣るものの、豪華な調度品でまとめられたその上質な空間は、隠蔽結界内におけるノエラの位の高さを端的に物語っている。そして、
あの　何であたし、こんな格好に　」
高級そうなトレッサの前に置かれた椅子に座らされ、困惑の声を上げた胡桃に、
「たって、いつまでもパンツ一枚のままでいたら風邪を引いちゃうでしょう？」
「た　たら　もっと身体を冷やさないような服が、欲しくても　」
恥ずかしそうに言うと、胡桃は視線を下に落とした。すると、臍下のセクシーな蒼のベビードールを着て胸の先端を隠いてスでいやらしく通けさせ、さらにはセットアップのTバックにガータと網タイツまで身に着けてしまっている自分の姿が眼に入り、
「ふ　ふぇっ？」
胡桃は激しい羞恥を得て顔を赤いものにする。すると、
「ああ　やっぱり、素材が良い娘を着飾るのは楽しいわねぃ」
そんなこちらの背後で、スンルを踏み台にしながら豪華な宝飾りを着付けてくれていたノエラが嬉々として言った。こちらの胸元にんりの宝石が来るように位置を調整し、
「うん、これで良いわ――どうかしら？」

と、満足そうに言ってくる。意見を求められた胡桃は仕方なく顔を上げ、頬を赤くしたまま鏡に映し出されている自分を見て、

「　　」

そして言葉を失った。ノエラが胡桃に着せたのは、帯や袖章ならともかく、また中学生の自分には大人っぽすぎる下着だった。それなのに着たからこそ、

こんな風になるなんて　　

いやらしい下着で変貌を遂げた自分に、胡桃は驚きを隠せない。また幼さの残る顔や発育途中の身体の胡桃が着るからこそ際立つ、アンバランスな淫靡さ――それは帯や袖章が同じ格好をしても決して生まれる事のない、背徳的な美しさだった。

「ふふ、喜んで貰えたみたいね」「っ！　べ、別に喜んでなんて……っ」

慌てて否定しながら背後を振り返ると、ノエラは既にスツールから下りて部屋の中央へと向かっていた。そして、テーブルの上にあったボトルを手にとって、

「こっちいらっしゃい　ホットミルクを飲ませてあげるわ」

ボトルから白濁色の液体が注がれた。そしてノエラの正面の椅子に座ると、胡桃はカップを手渡された――途端に、仄かな甘い匂いがふわりと香る。

「　　」

しかし、カップを受け取った胡桃がすぐに口を付ける事を躊躇っていると、
「飲み物に細工するなんて、つまらない男がするような無粋な真似はしないわ。もし私が胡桃ちゃんに何かするなら、色々と楽しめるようにもっと手の込んだ方法でやるわよ」
ノエラが自分の分をコクリと飲むと、幼い縞をスッと冷たいものにして、
「何なら試してあげましょうか？」「い、いえ、ごめんなさい」
胡桃は即座に謝った。今でさえこんなに幼い姿をしているが、かつて魔界中にその名を轟かせたほどの偉大なサキュバスだったノエラにしてみれば、胡桃などただの小娘にしか過ぎないだろう。下手に彼女のサキュバスとしての誇りを傷つけるような真似をすれば、それこそ何をされるか解らない。だから、ノエラが淹れたホットミルクに口を付け、
「美味しい」
心地の良い温かさと、まろやかなその手触りに思わずそう呟いた。
お口に合ったみたいで良かったわ」
ノエラが笑ったのを見て、胡桃は胸を撫で下ろしながら再びカップに口を付けた。
そして、ホットミルクによって身体の内側から温まってゆくのを感じた時だった。
「刃更君とゼストが主従契約を結んだ事が、そんなに気に入らない？」
「っ」
気を抜いていた胡桃が、とっさに息を呑みながらノエラを見ると、
「マリアから今朝の事は聞いたわ　あの娘、随分と困っていたわよ」
「あたし、刃更達の主従契約に反対しているからですか？」
幼いサキュバスに苦笑され、思わず声を荒いものにしながら胡桃が問うと、
いいえ。貴女の気持ちは解るから、何とか気を晴らしてあげたいのに、自分ふと手くやれないって。それが凄く悔かゆいんだって。そう言ってたわ」
「そんな事を？」
「それと、ルキアちゃんが貴女に手を出さないか心配していたわよ。『胡桃さんは、私のものなのに！』ですって」
「っ　別に、あたしは誰のものでもないですっ」
母親に何を打ち明けているのだ、あのロリエロサキュバスは。というか昼間のお仕置といい、先程のルキアといい、ああも激しく胡桃を求めてくるのは一体何なのだろう。
「あのぅ、あたしって、サキュバスを興奮させるフェロモンとか出てるんですか？」
「？」
一日遊いで問い掛けた胡桃に、ノエラは驚いたように眼を丸くした。そして、
「成る程ぉ、あの娘達が、貴女を可愛いと思う筈ね」
「？　どういう事ですか？」
純粋で無防備だから、色々と教えてあげたくなっちゃうって事よ」

キョトンとなったこちらに、ノエラはやわらと笑うと、
「ねえ胡桃ちゃん。貴女、そんな格好をしながらあの娘達の母親である私に対して、自分に興奮しますかなんて聞いてきたりして　」
そこまで言うなり、獲物を見る蛇のような瞳になって、
私にもされたいって言ってるの？」
「っ？　違っ　そんなつもり、これっぽっちも全然っ」
「ふふっ。冗談よ。貴女に手を出したら、マリアに悪いものね」
カッと顔を赤くしながら慌ててこちらが否定すると、ノエラは蛇のようなった瞳を元の無邪気なものへと戻してくれた。そして心の底からホッとしたこちらに、
あの子には少しギアの件で色々と心配を掛けてしまった事もあるから　可愛い娘から悩みを相談されれば、母親としてはやっぱり助けてあげたくなってね」
「たから、あたしをこの部屋に　？」
「ええ。ちなみにそのベビートルは、私が昔ルキアちゃんにプレゼントしたものなの。私が作った自慢の逸品なんたけど、残念ながらあの子は一度も着てくれなくてね　それでこっそりルキアちゃんの部屋に忍び込んで持ってきたの。クロゼットの奥に隠すみたいにしまい込んでいたから、マリアと一緒にあちこち引っ繰り返しちゃった♪」
おまけに、
途中で見つけた昔の日記とかアルバムとか見ていたら、ルキアちゃんてば部屋に戻ってきちゃってね。慌ててマリアの首根っこ摑んでルキアちゃんに向かって放り投げて逃げてきたの。　どうやら、マリアも上手く逃げられたみたいだけど」
道理でルキアがノエラとの喧嘩を挑んでいた訳だ。胡桃が呆れていると、
「あとはもう　つま：刃更君にゼストと主従契約を結ぶようにけしかけたのは私たから」
ノエラから「聞いてるう」と問われ、胡桃は顔を俯かに顰めたものにすると、
「……はい。朝食の席で、刃更から改めて一連の経緯について説明を受けました」
胡桃ちゃんが抱いている苛立ちは、私にも責任の一端くらいはある　たから、そのお詫びって訳じゃないけれど、今度は私が貴女の気持ちを軽くしてあげられたらと思って」
だって、
「マリアや澪ちゃん達には難しいものね　今の貴女の気持ちを晴らすには、本当の事を言わなくちゃいけないもの」
「……どういう意味ですか、本当の事って」
眉を顰めて訊ねたこちらに、
あら　言っても良いの？」
と、幼い外見のサキュバスは凄く冷笑を浮かべて言った。
「嫉妬してるのよ、貴女はゼストに――自分も同じくらい刃更君の事を想っているのに、彼とは主従契約を結ぶ事ができないから」

「う　　」

ノェーラの言葉に胡桃はカッと顔を赤くした。それは図星を指された者の反応で、

「ねえ胡桃ちゃん　貴女がマリアから酷らな悪戯をされても受け入れてきたのは、澪ちゃんや柚希ちゃんに追いつきたいという気持ちだけではないでしょう？」

また蛇のような舌で、胡桃の心の奥を見通すかのように言った。

「マリアが貴女と同じく、刃更君とは主従契約を結んでいなかったというのも大きいんじゃない？　しかもマリアは、ノルキアの件で刃更君達を裏切っていた負い目があるものね。度は〔黒〕の命令で澪ちゃんを消滅させようとし、刃更君とも戦ってしまった貴女にしてみれば、自分に近い精神的な負い目を持つあの子は同じ立場の仲間のように思えた」

「そんな事　あたしは、別に」

苦い表情で否定した胡桃に、

そう？　本当なら貴女は、ゼストとも仲良くやれると思っていたんじゃない？」

「それは――」

ノルキアとの因縁がある澪ちゃんや、戦闘に参加した柚希ちゃんと違って、貴女にはゼストに対する直接的な恨みはない　それにノルキアの配下だったという事実は、それこそ貴女やマリア以下の負い目たわ。たから、たとえ刃更君が可能性を口にしていても、澪ちゃんを人質にしている彼がゼストと主従契約をなわす事はないと貴女は踏んでいた」

何故ならば、

「ウィルベルトの力を受け継いだせいで、現魔王派に狙われてしまう自身の問題を解決するためとはいえ、こちらの世界へ来る事は澪ちゃんにとって大きな不安を伴う。大決心だった筈！　そんな澪ちゃんに、義父母の仇であるノルキアの配下だったゼストを、仲間として受け入れろと言うのは余りにも酷なもの」

ところが、とノェ　ラ。

「刃更君はあっさりゼストと主従契約を結んでしまった　彼女には、刃更君の敵だったという貴女と似た負い目があるのに。それどころか、反対したり怒ってくれるとばかり思っていた澪ちゃんや柚希ちゃんまで、刃更君とゼストの主従契約を受け入れてしまった」

たから、

「とどさに、ノルキアとの因縁がある澪ちゃんや柚希ちゃんの代わりに反対の声をトげた事にして、貴女は嫉妬にかられた自分を正当化して刃更君とゼストの契約を非難した。でも、そんなものは澪ちゃん達が許している以上、何の意味も持たないわ　たからこそ、その場の空気に耐えられなくなって食堂を飛び出したのよ」

そして、とうとうノェ　ラは決定的な言葉を口にした。

「刃更君と主従契約を結びたい？」

核心を問われた胡桃は、ビクッと身体を震わせた。たが　しばらくの沈黙の後、

「……いいえ」

絞り出すような声で否定の言葉を返すと、眼の前で苦笑が生まれ、

まあ、そう答えるでしょうね　何せ貴女は、刃更君とは主従契約を結ばないんじゃなく、結べないんたもの。多分、刃更君もその事は解っているだろうと思うわよ」

だって、とシェ　ラ。

「恐らく彼は　貴女の本当の任務に気付いているから」

何の事ですか？」

「さあ、何の事かしらね　」

訝しい視線を向けながら胡桃が問うと、ノェ　ラはた悠然と笑みを返してきて、

「たけと、こちらの世界で戦うなら、貴女と主従契約を結んたりが有利な事は間違いない　それでも刃更君がそうしないのは、貴女を大切に想っているからよ。ルキアちゃんの前でこなければならなくなった時、刃更君はその場しのぎで貴女に触れてきたり した？」

「……　」

そう、貴女はちゃんと解っている。そのよで、自分の本心と向き合う事から逃げているのよ。戦争は敵の弱いところを突くもの　現魔王派にとって、今の貴女はそれこそ格好の的でしょうね。そうやって悩みや迷いによる苦しみを抱えたままでいる今の自分が、貴女自身はおろか刃更君達をも危険に晒している自覚はあるかしら？」

「う　　だったらどうしろって言うのっ？」

冷笑を浮かべながら言われた胡桃は、とうとう我慢の限界を迎えて声を張り上げた。

あたしは刃更と主従契約を結べない　それだけは絶対に駄目なのっ」

ノェ　ラの言うリスクは解っている。たが胡桃が刃更と主従契約を結んで、その事が〔黒〕に知られるような事になれば、それこそ巻の終わりた。魔族の魔法で契約したなんて事が知れたが最後、胡桃たけが罰を受けて済む話ではない。〔黒〕が本格的に調査に乗り出せば、柚希かも従契約を結んている事もすぐに気付かれる。そうなれば両親にも責任が及ぶ事になるたろう　、今度こそ〔黒〕は刃更や澪を見逃こはしないたろう。

……そんな事にだけは、絶対にさせない……っ。

刃更達を守る――そのために自分はやって来たのたから。そこへ、

別に、無理してま従契約を結べなんて言ってないわ」

「え　　？」

あ、けらかんとノェ　ラに言われ、思わず眼を丸くしたこちらに、

「たって　たとえ刃更君と主従契約を結べなくても、貴女か他の眷属に嫉妬したり、劣等感を抱いたり しなくて済むようになるり法はあるもの。当然、そうすれば貴女が刃更君達にとってのウィ　クポイ　トになっている事も解消される」

そんなの　とうやって」

「自分の本当の気持ちと向かい合いなさい　ルキアちゃんも言っていたでしょう？　自分を主いと許れる感情だけでなく、弱い『貝』の部分も認めなさいと。それは、情報とコンタクトできるようになるだけじゃない！　貴女を今の苦しみから解放するものよ」

たた、とノェーラ。

「貴女の気持ちは誰かを想ってのものたから、自分　人で抱えたままでいたら逃げている事にしかならないわ。本気で向き合うなら、ちゃんと相手に伝えないとね」

「相手に伝える　」
呟いた胡桃に、ノェ　ラは「そうよ」と頷いて、
「半従契約の呪いが発動している時の瑠ちゃんや仙希ちゃんを見た事があるでしょう？　後ろめたさを得てしまったあの子達を楽にしてあげられるのは、彼女達の想いの行く先にいる存在だけ　そして、それは半従契約を結んだ者だけに限った話ではないわ」
だから、
「同き合いに行きなさい　貴女の抱いている感情が向かう先にいる人の所へ。貴女が自分に対して素直になれた時、自分か刃更君達の足手纏いになるなんて想う必要もなくなる。そうすれば、こちらの世界の情報通もきっと貴女に教えてくれるわ」
「けど、今夜は刃更に会うのは駄目って　」
胡桃のせいで、刃更は外出禁止になっているのを。これ以上、こちらの勝手な都合で押しかけて刃更に迷惑を掛ける訳にはいかない。しかし、
「大丈夫よ。私の空間トゕルは、刃更君が使っている客室の中にも繋がっているから。それに、貴女が着ているそのヘビ　トゕルは、私の自慢の逸品だって言ったでしょう？」
ノェ　ラは自信たっぷりに、
それを着ている限り、貴女と貴女の事を見ている者の声が、他の第　者に聞こえる事はないわ　そういう魔法効果が付与してあるの」
「何でそんな機能を　？」
確かに今の胡桃にとっては都合が良いか。怪訝そうに尋ねた胡桃に、
ええ、それはね――」
と、シェ　ラが笑った時だった。胡桃はふと、己の躰が火照っている事に気付いた。
「あ、れ　何か　」
こんな格好なのに妙に暑い。そう思い、胡桃は手を団扇にして自分を扇いだ瞬間、
「んぐ　ふあぁぁんっ♥」
手で扇いだ風が首筋を撫でた　それだけで、胡桃は甘い声を漏らしてしまう。
う、嘘っ？これって　っ？
躰の奥で燻れドる甘く切ない感覚　それは胡桃の良く知るものだった。つまり、
「そう　そのヘビ　ドゕルには幾つかの魔法効果が多重構造で付与してあるの。着ている者に遅効性で強力な催淫をもたらすのもその一つ」
と、ノェ　ラか胡桃に種明かしをしてくる。
「たた、サキュバスの洗礼や催淫特性で発動したら半従契約の呪いと違うのは、周囲に対して「魅了」の効果も発動している状態になるという事かしらね」
「んっ「魅了」って　そんな事、相手にしたら　」
「ええ　絶対に声が聞こえなくなるでしょう？　たから、当事者以外には気付かれないように、周りには声か聞こえなくなるのよ」
まあ、とノェ　ラ。

「作製者の私と、ある条件を満たしている者には「魅了」は効かないけど　安心なさい、刃更君には絶対に効くから」
「つ　騙したの　？」
厳しい催淫状態の中、どうにかしてヘビ　トゕルを脱ごうとする胡桃に、
「んふふ、止めておいた方が良いわよん。正しい手順で条件を満たさないと脱いでも催淫状態は解けないし、自分で脱いだら余計に催淫か強くなるだけたから」
そう言って、ノェ　ラはテ　ブルを回ってこちらへと歩み寄りながら、
それに私は、嘘は　つも言っていないわよ？　飲み物に細工するなんて無粋な真似はしていないし、そのヘビ　トゕルか今の胡桃ちゃんにピッタリたというのも本当　たって、これで意地っ張りな貴女も刃更君の前で素直になるしかないし、刃更君も胡桃ちゃんか他の娘達に戦姉こないで済むくらい、貴女に対してその気になってくれるんたから」
い　刃更が　あたしの事を　」
胡桃はゴクリと喉を鳴らした。
　それゃあ、お姉や僚より
催淫状態で意識がとろ十始めている今の胡桃には、ノェ　ラの言葉はまるで悪魔の囁きのように魅力的に思えた。すると、追い打ちをかけるように、
「ええ。刃更君は勇者の　親だし、対魔法の耐性があるから「魅了」か掛かっても平気を装って、最後まで行ってしまう事はないわ　何の心配もいらないのよ」
でも、
「もしも――胡桃ちゃんか本当に嫌たと言うなら、その催淫状態は今ここで解いてあげる。その下着を作った私には容易い事たし、私は別に貴女をいじめたい訳ではないから」
だけと、
「もし貴女か、足手纏いの状態から脱して、刃更君や皆の役に立てるようになりたいと本気で願うのならば　遅れて行ってあげる。貴女を、貴女の抱えている苦しみから解放してくれる人の所へ　東城刃更君の所へ」
そこまで言われてしまったら、もう抵抗なんてできる筈がなかった。今の胡桃を取り巻く今での状況と状態が、刃更のトへ行くべきたと促している。だから、
「……っ」
野中胡桃はゴクリと喉を鳴らすと、震える声音で己の願いをノェ　ラに伝えた。

5

メイトか選んでくれた夕食を、自分に宛がわれた客室で取った後。
東城刃更は自室で日々のトレ　ングをこなし、隣え付けのバスル　ムでサを流した。
そして今、刃更はベッドに仰向けになりながら、現在の状況を整理していた。

今は魔導へ来て　日目の夜。当初の想定とは大分異なる流れになっているものの、既に色々な状況が並行して動いており、処理や対応が必要な問題は幾つも山できている。

中でも、まさか俺が受け継いだウィルヘルトの力を欲しているラムサスが、こちらとの会談を指否してくるとは想像していなかった、

それに。

魔導へ着いたその日に、ゼストと主従契約を結ぶ事になるとは思わなかった。

勿論、ゼストとはかつて、完全に敵として戦った間柄だ。現役の勇者の一族である胡桃としては、その点でどうしても指否反応が山てしまうのだろう。柚希はどうにか受け入れてくれたみたいだが、刃更を守るために《11》の命令に逆らってまで助走と戦ってくれた事のある彼女は、言ってしまえば例外であり特別だ。胡桃が再び刃更達の所へやって来たのは、また《11》から命じられたからだと言っていたが、恐らく、その指令には柚希への監視も含まれている筈。

よって最悪の場合、俺や万理華だけでなく、刃更や――それこそ柚希までまとめて始末するような命令が、《11》から下されてしまうとも限らない。そんな　重の監視役に胡桃が選ばれたのは、胡桃ならば警戒されずにこちらの動向を探れると長達が判断したか、

それとも。

姉の柚希にまで危険が及ぶのを、何としても避けようと胡桃が志願したか　或いはその両方かもしれない。よって、刃更が俺だけでなく柚希とも魔族の魔法で主従契約を結んでいる事さえ問題なのに、ノルキアの配下だったゼストとまで主従契約を結んでいる事が知られれば、いよいよもって刃更達は《11》から危険視されてしまいかねない。柚希の立場も今以上にマズイものになる。胡桃の立場で考えれば、許せないのも当然だろう。

それでも、ノエラがあそこまで強引にゼストとの主従契約を迫ってきたという事は、それだけゼストを追い詰められた状況にいたという事だ。そんなゼストを放っておく事など刃更にはできなかった――彼女を魔健派へ託したのは、他ならぬ刃更なのだ。

「　」

東城刃更は、大扉へ向かって開いた己の左手の甲を見詰めながら　つの事を想った。

自分には、守りたいものがある。

義妹になった俺や万理華、そして家族同然の幼馴染みの柚希だ。そして、新たにゼストもそこへ加わった。しかし、同じく護れないものの中にはもう　人　胡桃もいるのだ。

柚希と同じように、ずっと前から・・それこそ物心ついた時から大切にしてきた妹のような存在。五年前の悲劇があり、先日は一度殺り羽目になってしまったが、刃更は胡桃を家族の　員だと考えているし、何があっても守ってやりたいと思っている。だが　ゼストを放っておく事もできない。たとえ、それがムシの良い綺麗事だと言われようと。

それでも、東城刃更は諦めないのだ――何一つ、誰一人として。

「　」

刃更が無言のまま、大扉へ向かって突き出していた左手をグッと握ると、ふと遠くでこちらを呼ぶように乾いた音が　度打ち鳴らされた。部屋の扉が、廊下からノックされたのだ。刃更はベットから下りると寝室からリビングへと移動し、

「はい」

警戒を込めた短い返事で相手に反応を求めると、

「・・ゼストです。刃更様、このような夜更けに申し訳ありません」

聞き覚えのある声に、刃更はふぅと肩を緩めた。今夜いっぱいは他の者と会う事は禁じられているし、それにゼストは部屋か書庫の警備を言い付けられていた筈だ。

刃更は、念のため主従契約の情報把握を使用――すると問題ないな、扉の向こうにいるのがゼストだと解り、トアへと向かった。

そして扉を開けると、そこには緑色の肌をした美しいメイドが立っており、

「どうしたんだ、こんな時間に　」

そこで刃更は、先程まで扉の外に居た筈の見張りの姿がない事に気が付く。

「・・・ここに居た見張りのメイドは？」

「私と交代して自分の部屋へと戻りました　この後は、朝まで私がこの場の担当を」

メイド達もそれぞれの仕事がある。刃更の行動制限は明日の朝までなのだし、警護をして翌日の担当業務に差し支えたりしないよう、問題を起こした刃更の面倒は、配下になったゼストに見させるのが適当と判断したという事か。

「　そうか。すまないな、ゼスト　ゼスト？」

ふと刃更は眉を顰めた。眼の前のゼストの身体が僅かに揺れているのだ。そして、

「　」

不意にゼストがこちらへと倒れ込んできて、刃更はとっさに彼女を抱き留めた。

「ど、どうした・・大丈夫か？」

そこで刃更は、彼女の喉元に首輪のような痣が浮かび上がっている事に気が付いて、

「お前、どうして・・・」

主に対して後ろめたさを感じないと呪いは発動しない。メイドとして従順になっているゼストが、刃更に対してそうした感情を抱く事はほとんどない筈だ。

いや、それより今は。

この状態のゼストを、廊下にいさせる訳にはいかない。

「部屋の中に運ぶぞ・・良いなゼスト」

そう言って、刃更はゼストを抱きかかえて室内に運んだ。寝室のリビングのソファは、人掛けのものが並んでいる構成のため横にさせる事はできない。よって刃更は自分が使っていたのとは別の寝室を使う事にした。そしてゼストをベットに寝かせると、

「っ　すみません、刃更様　すみません　」

刃更の手を握わせてしまったと思ったのか、ゼストが何度も謝っている。

「大丈夫だ、弱らないで良い　気にしたら余計に呪いが強まるから、な？」
刃更はそう告げると、なるべく見ないようにしながらゼストの胸元をはだけさせ、
「ほら、ゆっくり深呼吸しろ？　」
優しく彼女に語り掛け、幼子に接するように促した。これは、落ち着くように呪いを発動させた時にもする対処法だ。これで治まらなければ、後はもう快楽で屈服させて楽にしてやるしかない。すると、こちらの言葉に従ってゼストが深呼吸を始め、
「っ　　」
刃更はとっさに視線を逸らした。大きな胸になったゼストが、胸元を露出した状態で深呼吸すると、柔らかな膨らみがやらしい上下して、昨夜その感触をたっぷりと味わった刃更には刺激が強すぎる。思わず己の欲望のままにゼストを屈服させたくなるが、
っ、馬鹿が俺は
刃更は必死に思い止まった。ゼストが呪いを発動させた理由も解らないまま、彼女を屈服させるような真似をすれば、そんなものはもう主従関係でもなんでもない。
そうして刃更が己を抑え込んでいると、程なくしてゼストの呪いは治まっていった。

「一体どうしたんだ、ゼスト　何だってこんな事に？」
心配そうにこちらを見ながら原因を尋ねてくる刃更に、
申し訳ありません。ずっと、我慢していたのですか　」
ベッドの上で身を起こしたゼストは、瞳を伏せながら言った。
口にしたのは、自分が主従契約の呪いを発動させてしまった原因だ。それは、
「刃更様が私と主従契約を結んだ事で、皆さんの間で不協和音が生じかけています　それは、深淵に纏わる問題を解決されようとしている刃更様達にあってはならない事です」
主従契約を結んだ時も、ゼストは刃更の迷惑になる事が不安で呪いを発動させてしまった。そんなゼストに刃更は大丈夫だと言ってくれて、こちらを快楽で屈服して楽にしてくれた。そして刃更の言った通り、深淵は刃更とゼストの主従契約について受け入れてくれて　胡桃が食堂を飛び出した時は呪いが出そうになったが、刃更達のフォロー　のお陰でどうにか乗り切る事ができた。そして胡桃が城に戻ってきたら、彼女に自分の事を謝って貰えるようにお願いしようと思っていた。
ですが。
それはできなかった。胡桃のためと思って勝手に判断した事を咎められ、書庫の整理を言い付けられてしまったからだ。
でも。
それはまた良いとゼストは思う。それ位の事は別に何でもないと。問題なのは、
「刃更様が今こうして行動を制限されているのも、本を読ませれば私と主従契約を結んだ事が原因です　私との契約が刃更様のご迷惑になってしまっています」
胡桃が食堂を飛び出してしまったのはゼストのせいであり、そして胡桃の後を追った刃更が処分を受ける事になってしまった。ゼストが刃

更と主従契約を結んだ結果、刃更達のチ　ムワ　クに乱れが生じ、刃更に迷惑を掛けてしまっている。
いけない、とゼストは思う。現魔王派は強大な敵だ。万全を期して臨んでも勝てるかどうかという相手に、今のような状態で戦いを挑むのは危険すぎる。だから、
「刃更様　もし刃更様さえよろ しければ、なのですが」
誰よりも尽くしているからこそ――ゼストは己のキへと提案した。言いそうな顔で、
「ノェ ラ様に、私とのキ従契約を解消 したいと申し出られては　と」
「　　」
ゼストの言葉に、眼の前の刃更が表情を硬いものにした。自分が刃更にそんな顔をさせてしまった事に、ゼストは胸を苦しいものにする。
たが、主従契約の呪いが発動する事はなかった。キである刃更にとって、これが最も良い選択だと確信していたからだ。よって、眼の前で刃更が嘆息した時、ゼストは彼が自分の事を諦めたのだと思って、
「　いいや、その必要はない」
しかし、そうキッパリと言われ　ゼストは思わず耳を疑った。
な、何故です　う　このままでは、刃更様達は危険な状態に　」
「　誰かに今朝は、胡桃も俺も少し冷静さを欠いたかもしれない」
でも、と刃更はこちらの言葉を強い言葉で遮り、
「仮に、ここでお前とキ従契約を解消 して、それでも 胡桃の感情の問題が解決したとしてもｔ今度はまた別の問題が出るだけだ」
「別の問題　？」
問い返すこちらに、刃更は「ああ」と頷いて、
お前とキ従契約を交わ したのは、それ以外に方法がなくて絶対に必要だと思ったからだ。ここでお前と契約を解消 したら、それこそ俺は冷静ではいられなくなるよ」
　刃更　様　」
刃更に信じられない事を言われ、ゼストが呆然となっていると、
「それにお前が辛い立場に戻ったのが自分のせいだと解ったら、胡桃は余計に苦しい想いをすると思う　俺はもう、これ以上誰も苦しまないで済むようにしたい。そのためには、推進か今の関係のままで、胡桃の気持ちを楽にしてやるしかないんだよ」
刃更の言葉は続いていて　ゼストは徐々に、彼がとれたけ自分を大切に想 てくれていたかを理解する。キ従契約を昨日結んだばかりで、それこそかつては敵だったというのに、刃更はゼストの事を本当に大事にしてくれていた。
あ――　」
そしてゼストは、ようやく自分の眼から溢れるものがある事に気が付いた。
そっと触れると、ゼストの手が濡れていて驚く。
涙だ。
そのまま呆然と刃更を見ると、ゼストのキである事を止めないと言ってくれた青年が、ベッドの上にいるこちらへと身を乗り出し、ゼストをギュッと抱きしめてくれて、

「俺は、俺自身にとって絶対に譲れないもののために、お前と主従契約を結んだんだ　だからお前も、俺と主従契約を結んだ事を後悔するんじゃないって、絶対の契約が間違いじゃないって信じてみてくれ」

その瞬間　ゼストの中で、今度こそ刃更の存在が絶対になった。眼の前の青年に、本気で己の全てを捧げようと思った。嘘にしても嘘にしても。

「……はい、刃更様……」

己の抱いた想いが受け入れられた喜びが伝えるように、ゼストはきつく刃更を抱き締め返す。

そんなこちらの背中を、刃更はそっと優しく撫でてくれた。そして、

「ありがとうございました、もう大丈夫です」

やがて涙が止まり、落ち着きを取り戻したゼストがそう言って身体を離すと、刃更が慌ててこちらから視線を逸らした。そこで、自分の胸元がはだけたままでいる事に気が付き、

「すみません刃更様……お見苦しい姿を」

「いや、俺の方こそ恥ずかしい想いをさせてゴメン……な……」

ゼストが恥らいながら、そっと大きな胸を腕で抱くように隠すと、刃更は申し訳なさそうに謝った。それは、こちらをひとりの女として大切に扱ってくれているからで、

「私自身です刃更様、そんな風に　言われては」

「？　ゼスト？」

たまらない気持ちで声を震に振ったこちらに、刃更がキョトンとなった。

とうして刃更はこんな無防備に、今みたいな事を言ってくるのだろう。

自分は刃更のメイドなのに　それなのに、彼はゼストを女として見てくれていた。

そう思うと、ゼストは悦びのあまり全身をふるりと震わせて、

「メイドです、刃更様　」

ゼストは潤んだ瞳で刃更にこなれかかった。我慢できなかった。刃更に奉仕したい、彼に encircle で貰いたい　そんな抑えきれない想いを、全でメイドという言葉に込めて、

「ゼストは……刃更様のメイドです」

たから気にせず、刃更の好きにして良いのだと――それが自分の悦びだからと、そう熱い吐息が届くような距離で見詰めて教える。するとゴクリと喉を鳴らした刃更が、

「ゼスト――……」

その呼び掛けに、ゼストが皆で応えようとした時だった。

　ガタ、と壁の方から大きな音が響いた。と、さにゼストがそちらを振り向くと、音は壁際に置かれている大きなクロ　ゼットからだったようだった。そしてクロ　ゼットの中からは、明らかに先程まで存在しなかった何者かの気配が感じられ、

「……シェラさん、ですか？」

まずは刃更が呼び掛けた。声に若干の驚愕が含まれているのは、無理がないからだった。こんな夜更けに寝室の　さらにはクロ　ゼットの中

に忍び込むなんて真似をするとしたら。この城のあちこちに空間トンネルを構築しているシェーラの可能性が最も高いだろうが、

「刃更様、お下がり下さい……」

ゼストは刃更を押し止めると、ベットを下りてクロ　ゼットの前に立った。

　このウィルダ　ト城は極秘扱いの最重要拠点だった。さらに現在は、ウィルベルトの娘である澪が滞在しており、さらに時間帯も夜陰に紛れやすい深夜という事もあって、警備レベルは最大にまで引き上げられている。現魔王派の刺客が入り込むような隙はないと思うし、そもそもこんな露骨に解りやすい気配をさせる刺客などいない。

……それでも。

　刃更に降り掛かるもの　の事態に備えるのが、メイドであるゼストの役目だった。

　ゼスト」

　刃更がこちらの名を呼ぶ事で、警戒を緩めるよう促してくる。ゼストは頷きを返すと、クロ　ゼットの取っ手を摑み　ゆっくりと観音開きの扉を開けていった。そして、

「　」

　中を見た瞬間　思わずゼストは固まっていた。

　誰かが隠れるとは思ったし、その予想は当然のように的中していた。ただ　瞬間的な下着を身に纏い、艶やかな宝石を着けた少女がいるとまでは流石に予想できなかった。

　乙女座りをしているその少女の髪は桜色に上気し、さらに仕女の切れも欲っていて、

「胡桃さん　」

　ゼストから呆然としながらその名を口にすると、刃更もこちらへとやって来て、

「胡桃、お前……」

　いやらしい格好と、それ以上に恥らな状態になっている胡桃を見て言葉を失う。

　そんなゼストと刃更に対し、とろんとした瞳でこちらへ焦点を合わせた胡桃は、

「ん……はぁ、　刃更ぁ　」

　そう甘い声で喘ぐように言うと、そのままこちらへからりと倒れ込んできた。

　東城刃更は、クロ　ゼットから床へ落ちかけた胡桃を慌てて抱き留めた。

　いやらしいベビ　トも姿の胡桃の体は、既に驚くほど熱く火照っている。

　まるで媚薬の呪いに掛かっているかのようなその状態に、

「っ　まさか、ルキアさんにまた何かされたのか？」

　昨日、ルキアの執務室であった　件を思い出して問うと、

「ちっ……ちがうの、あたし……っ」

と、こちらの腕の中で甘く身悶えながら胡桃が言った。程らに離れた場所で、

「シェーラさんに着せられた、とれのせい、なの・それで、ここへ連れてこられて」

「ふ・やっぱりシェーラさんか」

しかし、当のノェ ラの姿はなかった。恐らく胡桃をここへ連れてきた後、そのままクロ ゼットの中に潜り去りにして、自分はひとりですぐに戻ったのだろう。すると、

「んう」

東城刃更はやと、自分の鼓動が尚鳴るのを感じた。そして、何故か眼の前の胡桃から眼が離せなくなる。胡桃は間違いなく性的ではあるものの、昨日のルキアの執務室の時も同じような状態だった。ヘビ ドル姿は確かに過激ではあるが、それだって似たようなものを着て催淫の呪いが発動している事や柚希を昏睡させた事はある。それなのに、

「っ な、何だこれ、っ？」

男の欲望のままに胡桃を蹂躙苦茶にしてしまいたい欲求に駆られ、刃更は彼女を抱き締めたまま床に両膝をついた。

刃更様っ 大丈夫ですか？」

慌ててゼストが隣に片膝をついて、こちらを支えてくる。すると、

「た、多分・・このベビ ドールのせい・・っ」

と、甘い熱を帯びた声で胡桃が言った。

「今のあたし・・見られた相手に『魅了』を掛けちゃうって・・・」

「何たその厄介げた下着 どうすりゃその効果は解ける？ 脱がせば良いのかっ？」

半ばヤケクソのように刃更が問うと、隣のゼストが首を横に振り、

「いえ・・・っ、以前、シェーラ様が戯れにお話しになっていた事があります・・・」

ゼストもまた『魅了』の効果を受けている状態にあるのだろう。胡桃に対し、刃更と同じ興奮の色を宿した瞳を向けながら説明を始める。

「もし それが、昔シェ ラ様からキア様にプレゼントしたものだとしたら、そのベビ トルの魔法効果を無効化する方法は、つだけあったと記憶しています」

「知ってるのかゼスト なら教えてくれ、どうすれば良いっ？」

それは

私羽詰まったこちらの問い掛けに、ゼストは僅かな躊躇いの後、言葉を選ぶように、

「まずは装着して催淫状態になっている者が、見られた相手に楽にしてもらい・・そこで次に、『魅了』に掛かってしまった者が、装着している者にされる必要があったかと」

そして、

「もし魅了状態の者が複数いて、そこに男女が混じってしまっていた場合は、その男女間でまた魅了状態となります、それを解くためには、順番に楽にされる必要が 」

「ちょ、ちょっと待て・・それってやあ」

その説明を聞いて思わず刃更は呆然とゼストを見た 次の瞬間にはもう、刃更はゼストに対して激しい興奮を得ていた。対するゼストもまた、内股をいやらしく擦り合わせながら、刃更に熱の滲もった瞳を向けて、

「はい・・この場合ですと、まずは刃更様と私とで胡桃さんを、次に胡桃さんと刃更様とで私を。そして最後に、胡桃さんと私とで刃更様をという事になります」

嘘だろ 」

何たその乱交を促す下着は。呆然を通り越して愕然となった刃更に、

「ごめ なさい っ、あ、あたしのせいで・・こんな っ」

催淫状態で瞳を潤ませた胡桃が、泣きそうな顔で謝ってくる。

「いや、胡桃のせいじゃ・・・っ」

そんな胡桃にすら興奮してしまう自分を必死に抑えて、刃更が言うと、

「も、違うの・・・あたしが、ここへ連れて来てって・・頼んだの」

「なっ、それって・・・」

という事たと尋ねようとした刃更は、しかしその先を言う事はできなかった。

口を塞がれてしまったからだ——胡桃の唇によって。

東城刃更は、胡桃に頭の後ろへ両手を回されキスされていた。体内を——突然の事に戸惑いを得た刃更は、取り敢えず胡桃を落ち着かせようと彼女の両肩に手を置いて、

胡桃・・う

そこで、あるものに気が付いて身体を離すのを止める。

眼の前にある胡桃の唇から離れた瞳——その端から零れ落ち、頬を伝うものがあった。

「っ・・・」

胡桃は、こちらとキスをしながら泣いていた。たから、

「

」

刃更は胡桃の肩に置いた手を彼女の背中へ回すと、そのまま抱き締めてやった。

魅了状態のため、そのまま胡桃を押し倒してしまいたい欲望に駆られるが、刃更は懸命に自制する。すると、程なくして胡桃はゆっくりとこちらから唇を離した。そして、

「き、聞いて あたしは刃更と、主従契約を結べない 」

その言葉に、刃更はとさに頷きかけた。それは想像が付いていた事たし、何より胡桃が自分の前で、こんなに辛そうな顔で泣いているのだ。思わず「解ってる」とか「そんな事は気にしなくて良い」などと言ってやりそうになる。

しかし、刃更はその湧き上がる欲求をぐっと抑えて沈黙した。

恐らく——胡桃は今、(刃更)から残酷な任務を命じられている。そんな彼女に、慰めの言葉を掛ける事は簡単た。たが、そんなものは刃更の自己満足でしかない。

胡桃は刃更に 聞いて」と言った。たったら今の自分がすべきなのは、胡桃が抱えている苦しみを全て吐き出させてやる事た。その上で彼女を受け入れ、受け止めてやる それたけか、胡桃を今の苦しみから解放してやれる方法たと思った。ノェ ラが胡桃をこんな状態にしてここへ置き去りにしたのも、それが狙いなのたろう。頑固な胡桃に、刃更の前で手っ取り早く仮面を外させるとしたら、普通のままの状態で

はまず無理だ。すると、

「で、でも……それでも、あたしの事……仲間外れにしないで……っ」

やがて胡桃は、喉の奥から搾り出すような声で言った。

あたしの事も　お姉や爺や、っ　ゼストと同じに扱って　て　っ」

しゃくりげながら、それでも胡桃が必死に口にした望みを、東城刃更は聞いた。

それは、野中胡桃という少女がたった一人で抱え続けていた願望であり苦しみだった。

残酷な任務を命じられ、それを遂行しなければならない事態だけは避けたいのに、状況はとんとん悪い方へと進んでしまって　それでも胡桃は本当の事を言えずに、たった一人で辛い気持ちを抱えたままそれを押し殺していたのだ。

一体どれだけ不安だったろう　どれだけ苦しんだろう。

ようやく己の願いと苦しみを吐き出す事ができたからか、胡桃は最早ボロボロと涙を零すだけになっていた。それ以上はもう、彼女は何も言わない……言えないのだ。だから、

もう良いよな。

東城刃更は自分自身に許しを求めた――もう我慢しなくて良いだろうと。

胡桃にとって最も優しい答えは、昔のような関係に戻る事だったのかもしれない。

また無邪気に、笑い合う事ができていた幼いあの頃の自分達の思い出は幸せだった。

恐らく《Ｌ》はまた、五年前の悲劇に　過去に縛られたままでいる。

それは刃更も同様だ。自分が犯してしまった罪を忘れた事はない。ただ、爺の事を守ってやるためには、過去だけに囚われている訳にはいかないのだ。爺もまた今も危険に晒され、苦しんでいる　そんな彼女を救うための道は、未来にしか存在しない。

そして。

過去には決して戻れない以上、胡桃を救える道もまた未来にしかないのだ。本当は胡桃も、その事は解っていたのだろう――だからこそ、余計に苦しんだのだ。ただから、

「……っ　解った。それでお前が苦しまなくなるなら、俺は何だってやってやる」

刃更が、妹のように可愛がってきた幼馴染みを思い切り抱き締めると、

「ふ……っ」

胡桃もギュッと抱き締め返してくる。そしてこちらの腕の中で顔を横へと向け、

「っ　ごめん、ゼスト　あたしのせいで、ア……タまで巻きこんじゃって　」

「いいえ……本当でしたら、刃更様とお二人にしてさしあげたかったのですが」

申しそうな顔で謝った胡桃に、ゼストが申し訳なさそうに呟いた。ただから、

「　ゼストが謝る必要はないだろ」

と、刃更はそちらを見て、

ノエラさんは、胡桃をこのクロ　ゼットへ置いていった……その時に、お前がここにいる事には間違いないと気が付いた筈だからな」

今朝の一件は、刃更とゼストの主従契約が原因だ。胡桃にその事を納得させるためにこんな真似をしたのだとしたら、いっそゼストも巻き込んでしまった方が効果的だとでも考えたのかもしれない。刃更としても、胡桃とゼストの関係が良くなるのは嬉しいが、

「悪い……『騎了』の効果のせいか、いつもより加減できないかもしれない……っ」

胡桃を抱き締めているだけで、気を抜くと理性が飛びそうだった。すると、

「　構いません、私は刃更様のメイドです」

ゼストは熱の滲もった声で囁くように、

「どうか刃更様は……胡桃さんとご自分を満たされる事だけを考えて下さい」

すると、それを聞いていた胡桃もまた、

「っ　あたしも、ゼストと同じにして」

刃更の腕の中で、そっとこちらを見上げてきて、

「約束通りに……っ刃更兄ちゃん」

継続状態で潤んだ瞳で懇願してくる。ただから、

「　始めるぞ」

刃更はそう言って胡桃を抱き上げると、ゼストを伴いベッドへ移動した。

ベッドの上に降ろされた野中胡桃は、前後を刃更とゼストに挟まれた。そして、

まずは、俺とゼストで胡桃を　たったな」

「はい。刃更様、お手伝いさせていただきます……」

刃更の言葉に、ゼストが頷きを返すと　胡桃の背後から両手がこちらの前へと回り、そのまま刃更のシャツのボタンが開けられてゆく。

そうして　人に挟まれながら、

本当にあたし、刃更とゼストにされちゃうんだ……。

これから自分がどうなってしまうかを想像して、胡桃はより興奮を強めた。

ただ　その　ちで、慣れた手付きで刃更のシャツを脱がしてゆくゼストと、それを受け入れている刃更の様子に、　人の間にある絆を感じてしまい胸の奥を切なくして、

刃更兄ちゃん、先にキスして　」

早く　こちらの腕を上げさせ、瞳を求めようとしてくる刃更に対し、胡桃はト日遅いで懇願した。刃更やゼストは現在、ヘビトゥの継続状態にある胡桃を見たせいで『騎了』が掛かっている。そんな二人にされる胡桃の負担も考えて、　刻も早く終わらせようと　てくれているのかもしれないか、

……でも。

胡桃が抱えていた最も大きな苦しみは、刃更とキ従契約を結んでいる仙蒂や爺――そしてゼストに対して抱いてしまった劣等感である。

無論、脇は胡桃の最も弱い性感帯だ。そこを刃更に攻められれば、たとえどれだけ抵抗感があろうと、きっと胡桃はひとたまりもなく堕ちてしまうだろう。

しかし、さっさと脇を攻められてお手軽にイカされ、絶頂の余韻にふらふらになりながら刃更と共にゼストを縛り上げ、最後にゼストと一緒に刃更を果てさせる事ができたとしても、このベビードールの魔法効果は解けても、胡桃の劣等感まで消える事はない。

この劣等感は、きっとルキアやノエラが言っていた胡桃の『負』の部分だ――その感情をここまでこじらせてしまった以上、弱い自分ときちんと向き合い、己の『負』の感情を認めて素直になるには、ゼストに対する劣等感を無視しては駄目だろう。

だが、そんな意地っ張りな胡桃を素直にしてしまえる魔法のスイッチがあった。

それが刃更とのキスだ。前戯に頼んで見せて貰っていた夢の中で、何度も刃更としてきた淫らな行為　その際、胡桃は刃更にキスをされ、そこから気にいやらしく乱れていた。胡桃は刃更にキスをされたら、どんな事でもできる女の子になれる。そして、

「　　」

甘えるように懇願した胡桃に、刃更は行動で応えてくれた。

腰の後ろに腕を回されて抱き寄せられたと思った時には、胡桃は唇を奪われていた。

そして、ねっとりと熱くなっている刃更の舌が胡桃の口の中へ入ってきて、貪るようにこちらを求めてくる。ベビードールの『魅了』のせいか、昨日より強引な刃更のキスに、

「んっ……んちゅ、刃更、兄ちゃん……はぁっ♥　刃更兄ちゃ……ちゅるっ」

胡桃は自分からも舌を絡め、夢の中になって刃更を求めた。『魅了』の効果でも構わない。刃更がこんなにも胡桃に興奮し、求めてくれる事が嬉しくて堪らなかった。そこへ、

「……胡桃さん」

刃更とのキスに夢中になっていた胡桃を、褐色の肌の両腕が背後から優しく抱き締めてきた。そして温かくて柔らかなものが、胡桃の背中いっぱいに押し当てられ、

ゼスト？

背後にいるため見えない彼女をぼんやりと想った胡桃は、やがて刃更との長いキスで肺の中にあった酸素を全て使い切り、幸せな酸欠になって、

「っ　はぁっ　ん、あっ　はぁ　あ　」

息継ぎで、唇を離した時にはもう　夢の中と同じように、完全に理性を快楽にとろけさせた胡桃だ。そしてゆっくりと同様に背後を振り返ると、ゼストは既にノースリーブ一枚の姿になっていた。胡桃が刃更とのキスに没頭していた間に、着ていたメイド服を脱いだのだろう。背中に押し当てられていた柔らかすぎる感触は、服の上からでも主張したゼストの大きな乳房だった。

締まった　普段の胡桃にとって、ゼストの色気は羨望の対象でしかない。しかし刃更のキスで思考をとろけさせた今の胡桃はもう、包み込むような心地良さと安心感を与えてくれるゼストを眺めながら刃更が右手を差し出す。

するとゼストは左腕で胡桃を抱いたまま、人差し指と中指をそろえた自身の右手を、刃更の右手の甲の上で滑らせるように往復させながら、

「胡桃さんは、刃更様に私達と同じ扱いを求めました。ならば、実際の魔法は使用できないとも、刃更様とお従契約を結ぶのが　番良いのではないかと思います。ですから、まずはその手順は可能な限り本来のものを踏襲してみては、と」

「……そういう事か」

刃更が納得の呟きを放つと、その右手の甲に魔法陣が浮かび上がった。

「あくまで形だけを真似た、擬似的なものですが　」

とゼストは両腕をほどいて、

「胡桃さん！　刃更様の右手の魔法陣へキスして下さい」

ゼストが何を言っているのかを、胡桃もまた理解していた。実際に見た事はなかったが、話だけは仙希や九理華から聞いて知っていたからだ。そして、

「ゼスト……あたし……っ」

ゼストが、誰よりも自分の望みと苦しみを理解してくれていた事を知った胡桃は、泣きそうになりながら背後の彼女を振り返って、

「　　ええ　　」

そこで、ようやくある事実に気が付き茫然となった。

ゼストの喉元に、首輪のようなものが浮かんでいない　つまり、先程の胡桃と刃更の濃厚なキスを見ても、ゼストは姉を得てお従契約の呪いを発動させなかったという事だ。

無論それは、刃更が他の女性と淫らな行為をしようと、切姉妹ないほど刃更に心酔しているからなのかもしれない。『魅了』が掛かっている状態のため、胡桃に対して興奮を得てしまっている事も影響しているのだろう。

たとえ　それでもゼストが胡桃の事を、刃更の相手として心から相応しいと思ってくれていなければ、呪いは発動してしまう筈だ。胡桃はゼストの事を認められなくて、みんなに迷惑を掛けてしまったのに　ゼストは、そんな胡桃の事を完全に認めてくれていたのだ。そう思った瞬間、ずっと抱いていたゼストへのわだかまりが　瞬で消え去って、

「ゼスト……ゼストぉ……っ」

胡桃は涙を流しながら、ゼストに抱き付いた。ボロボロと涙を零すと、ゼストはこちらをそっと抱き締めて　大きく柔らかな胸で優しく胡桃を包みこんでくれた。そして、

「さあ胡桃さん……刃更様と貴女だけのお従契約を結びましょう」

ゼストの促しの言葉に、胡桃はコク……と頷くと刃更へと向き直った。すると、刃更はそっとこちらの眼の前に浮かんでいる魔法陣を見せるように右手の甲を差し出して、

「胡桃……」

そう優しくこちらの名前を呼んでくる。だから胡桃は、そっと瞳を閉じると、

「――」

ゆっくりと刃更の右手の中へとキスした。そして、

「……ふぁ……」

胡桃が再び瞼を開けた時――眼の前には変わらず刃更がいた。だがそれはもう、胡桃を妹のように可愛がってくれるただの幼馴染みの青年ではない。

そこに居たのは、胡桃が新たな絆を結ぶ事によって得られたもので、

「胡桃」「はい……」

キとなった刃更に改めて名前を呼ばれて、胡桃が嬉しそうに返事をすると、

「おめでとうございます」

背後のゼストも、優しい声でこちらを祝福してくれる。

すると、こちらの顎を下面の刃更がクイッと持ち上げて、

「いっぱいしてくれ」

そのまま胡桃の首へと唇を寄せると――思い切りこちらの喉元を吸ってきた。

「やっ……ああああんっ♥」

絨毯で首輪を締めていた胡桃は、それだけでビクンと仰け反りながら嬌声を上げてしまう。しかし刃更は、胡桃の喉を強く吸ったまま離れなかった。さらにゼストも、背後から胡桃をギュッと抱き締めてくる。そして十秒以上も刃更に首を吸われ続けて、

「あっ……んっ……刃更兄ちゃ、ん……？」

ようやく口を離して貰った胡桃がその意図を問うと、ゼストがそれを教えてくれた。

脱いだメイド服のポケットにでも入っていたものだろうか……つ折りのコンパクトを手の平の上で開き、鏡で胡桃の首がどうなっているのかをこちらに見せてくれて、

「あ……」

そこに、刃更が胡桃の首を強引に吸ってできた理由が映っていた。

乱暴なコンプレックスで付けられた赤い痕が、胡桃の白い喉にくっきりと残されている。

他のみんなが従契約の呪いを発動させると、ト形の首輪のような痣が浮かび上がる。胡桃の眼には刃更が付けてくれたキスマークが、その痣のように見えて――そして、

「その痕が消える頃には、お前の不安や苦しみをゼロにしてやるから」

その言葉に、刃更が自分の事を他のみんなと同じように扱ってくれている――そう心の底から確信する事ができて、

「つ――」

だから胡桃は押し倒してしまう程の勢いで刃更へ抱き付くと、自分から激しくキスをした。すると刃更もまた、『魅了』の効果を受け入れたかのように強引になってくれて、

「はぁ……刃更兄ちゃ……れろ、んちゅっ……んふ……はぁむ……んっ」

胡桃が舌を絡めた淫らなキスへと変えていると、刃更にベッドの縁を掴まされ、腰を掴み上げられた。すると背後のゼストからも両手を上げさせて、甘く囁えるような息継ぎの間に、胡桃はあっという間に上半身を裸にされる。たが、メイドの『魅了』の効果は、脱いだだけで消える事はない。なから、

「胡桃さん」

そこへゼストも加わって――とうとうベッドのトは二人の官能の甘鳴と化した。

当然、最初に攻められるだけ場になったのは胡桃だ。

この部屋に来る前から胡桃は催淫状態で、ちょっと胸や尻を触られただけでも軽く逝ってしまうような状態だった。たが『魅了』が掛かっている刃更とゼストからそんな生易しい愛撫で済ませる筈はない。胡桃は催淫で張り詰めていた胸の先端を容赦なく刃更にしゃぶられ、ゼストには……ショーツの中へ手を入れられて乱暴に尻を揉まれて、

「あああっ……やぁ、んっ……ふぅ……っ、はぁっ……やっ、はっ……ああああっ♥」

これまでにも似たような事をされた経験はあったが、ここまで激しくされたのは初めてで――胡桃はたった十秒の間に、二人から五回の絶頂を刻まれた。

そうして激しい自分を求めてくる刃更とゼストを、胡桃は完全に受け入れた。

二人がこんな風になってしまっているのは、ノエラのペビードールを着て胡桃がこの部屋へ来てしまったせいだ。こうなってしまう事は解っていた――むしろ、心のどこかではこうなって欲しいと思っていた。だから、

「やぁ、んっ……♥　ふぅ、やっ……はぁっ……ああっ……っ♥」

二人に挟まれた体勢で甘い嬌声を上げながら連続する絶頂は、これまでにない幸せな快楽を胡桃にくれて、胡桃をたたのいやらしいなの子へと変えてゆく。しかし、

「つ……また胡桃」「胡桃さん……もっと感じて下さい」

そんな胡桃の事を、さらに激しく責めるように二人共、もっと……してぇ」

「う、うんっ……」

胡桃は自分から両腕をトげ、己の最も弱い脇を晒らに開放した。すると、こちらか頭のトで両手を交差するより先に、刃更とゼストか胡桃のむき出しの脇へと吸い付いて――直後、

「～～～～～～～～～～っ♥」

全身の毛穴から快楽が吹き出すような感覚と共に、胡桃はかつてないほど己を縮まらせて激しく逝った。ホワイトアウトした視界か全く戻ってこないような巨大な絶頂に、

「……あ……あぁ……はぁ……っ♥」

野中胡桃は誕えるような光悦を得た。こんなに凄まじく逝っているのに、胡桃は意識を飛ばす事はなくて――自分の躰が、リアルタイムで開発されていっているのが解る。

それはたとえ従契約を結んでいなくても――胡桃と刃更の関係も、刃更の胡桃への想いも、決して他のみんなに劣るものではない、幾らでも追いつく事ができる確信だった。

それは――胡桃が最も欲していた救いだった。だから、

「あ　ん　さ」

やがて現界を覆っていた白い霧が徐々に晴れていった時、

「大丈夫か胡桃　」「胡桃さん　解りますか」

気遣うようにこちらを覗き込んでいる刃更とゼストがいるのを見て、

「つ：：うん　：平気　：：」

また胡桃が回復したみたけた。へヒ　ドゥの魔法効果を無効化するための工程は　分の　が終わったけど。胡桃の御陀も刃更とゼストへの魅　も解けてはいない。それでも　人は胡桃を思いやってくれていた。その想いに応えなければ　：それに、

　：あ　。

確かに御陀の効果はまだ残っている。たが刃更とゼストを見ても、先程まであった劣等感による苦しさはもう感じなくなっていた。

人の事かとても愛しく感じられて　たから、野中胡桃は嬉しそうに言った。

「次は、ゼストの番だよ」

そこで胡桃は、ベッドの上で刃更と　緒にゼストを優しく押し倒した。

すると、たゆんと揺れたゼストの豊かな乳房の先端がふと眼に入り、

「：：ゼスト、もう乳首立ってる」

激しく絶頂させられたお返しに、胡桃が意趣返しに指摘すると、

「はい：：胡桃さんと刃更様に触了されていますから」

恥ずかしそうにしながらも、ふわっとゼストが笑った。その余裕が何たが悔しくて、

「すぐに、あたしみたいにしてやるんたから　刃更兄ちゃん」

「　ああ、そうしないとな」

純粋にゼストを感じさせたい胡桃と、早くこの状況を終わらせようとしている刃更が頷き合って　そして胡桃は、刃更と　人でゼストへの愛撫を開始した。

胡桃がゼストと向かい合い、彼女の背後へと回った両手をノョ　ンの中へ入れて彼女の尻を揉みくちゃにして責め、刃更もゼストの背後から彼女の前に両手を回して、胡桃の顔くらいあるゼストの乳房を乱暴に揉みしだくと、

「んっ　：ああっ　んっ、はぁ　：やめ、あっ　ああんっ」

途端にゼストは甘い嬌声を上げ、いやらしく腰をくねらせながら胡桃の胸の後ろに両手を回してきた。さらに、快楽を得たゼストが先程よりもピンと張り詰めさせた胸の先端を刃更が指先で摘まんで擦り上げると、

「ああっ　やめ、ん　はあっ♥　ああん　やっ、ああっ　っ♥」

ゼスト仕彩らかな両脇を胡桃の腰へ回して、こちらへギュッとしがみ付いてきて、

　ゼスト、こんなに可愛くなっちゃうんた　。

自分よりも大人なゼストか、いやらしく乱れる姿に胡桃は興奮した。胡桃がノョ　ンの中へと滑り込ませた両手で彼女の尻を揉んであげていると、胡桃達の愛撫で官能を高まらせてしまったのだろう：：：あっという間にノョ　ツの中が潤り気を帯びてきて。

そして　人で協雑に脚を絡ませた、いやらしい状態で五分間を共にした頃には、

あんっ　はぁ、ゃぁあん　やぁ　はぁぁあっ♥」

ゼストのいやらしい喘ぎ声が、室内に響いている状態が当たり前になっていた。

胡桃が手を入れている彼女のノョ　ンの中は、いやらしい熱気と共になの蜜でグノョグノョに満れていて、こちらか尻を揉む度に言い訳のできないほど水音が生まれて、

「やっ　あぁっ：：胡桃さ：：ぁあっ」

ようやくゼストが、羞恥に全身を震わせた。だがその表情は陶酔を深めていて、

「恥ずかしがらないで良いよ：：あたしもそうたから」

胡桃も刃更とゼストに関発されイカされ続けたせいで、ノョ　ンはとっくに満れてしまっている。たから、胡桃はもっともっとゼストの事を満らしてあげたくて、

「ねえゼスト：：：恥ずかしい場所ってどこ？」

胡桃にとっての脇のような場所を教えて欲しいと告げると、

「あぁっ：　ん、耳です：：う」

胡桃達の愛撫で得ている快楽に、ゼストか腰を揺らに揺らめかせながら答えて、

「ですから胡桃さん：　、ろ：ければ、先程のお返しを刃更様と：てくれますか？」

恥ずらいなからも、自らこちらと同じになろうとしてくれるのが嬉しくて、

　：うん。ってあげる」

胡桃はそう言うと、ゼストのノョ　ンの中から両手を抜いた。

ん　」

その指子に、ノョ　ンの中で蠢でるように指先が触れ、ピクンと尻を震わせた眼の前のゼストに、胡桃はト目遣いで告げる　優しいメイドに甘えるように、

　ゼスト、四つん這いになって」

「はい：」

ゼストは笑顔で頷くと、こちらの言う通りの体勢を取った。大きな胸をゆさっと揺らしながら、いやらしい体勢でこちらへ尻を向けてきたのた。そして、

「　胡桃、そっちは任せて良いか」

彼女の右へ回り、耳元へと口を近付けようとしている刃更に言われて、

「うん：：解った」

胡桃はコクンと頷くと、刃更と仕反対側へ回ってゼストの左耳へと唇を寄せていった。

そこて。

右側を改める刃更と視線を交わした胡桃は、ゼストの耳元へそっと自分の口元を近付けると、ずっと言わなければいけないと思っていた言葉を告げた。

そっと囁くように、

「ゼスト　今朝はごめんね、お弁当　ありがと」

そう告げた直後、胡桃は刃更と　緒にゼストの耳を甘く噛んだ　その瞬間、

「っっっ♥」

ゼストは絹声をトげながら、全身を激しくわななかせた。

刃更と胡桃に両耳を噛まれて器人にイッたのち　その直後に、

「はぁ…ああ、あ…っ」

激しい絶頂に陶酔を深め、いやらしく尻を震わせていたゼストのノョッの端から、布地では受け止めきれなくなった大量の愛液が褐色の太腿を伝って伝って伝って

「つ　胡桃さん　次は刃更様の番です」
顔を赤らめて微笑む。そして胡桃に対して一つの提案をしてきた。
「どうせなら、海棠や柚希さんがまだしていないような事をしませんか？」
「お姉様がまだしてない事？」
ゼストの色気に当てられた胡桃がとろんとした眼で問うと、深らなメイドは、
「刃更様　お許しいただけますか？」
快楽に溺んだ瞳で刃更に懇願した。すると刃更は無言のまま、ゆっくりと腰を上げると、同時くらいに両足を広げてベッドのように
そんな刃更に、
「ありがとうございます　それでは」
ゼストは恭しく告げると、刃更のベルトを外してズボンを脱がせ始めた。
「な、何を　」　海棠と柚希さんがまだしていない事です」
困惑する胡桃に、ゼストはこちらを振り返って微笑みながら言うと、再び刃更へと向き直り——とうとう下着まで脱がして彼を裸にした。
「騒」が掛かっているように、胡桃とゼストを厳しい愛撫で続けざまにイカせたのだ。
露わになった刃更のそこは、激しい興奮を得て信じられないような状態になっていて、
「…凄い。
刃更のものを目の当たりにした胡桃は、眼を逸らす事もできず、ゴクリと喉を鳴らした。
東城家で暮らすようになってから刃更と一緒に風呂へ入る機会があり、当然なから彼の裸を見た事はあるが、こんなにしている所を生で見たのは初めてだ。
そんな胡桃の前で、ゼストは刃更の脚に跪くようにして膝立ちになると、
「…失礼いたします」
豊かな乳房を両手で抱え　その深い胸の谷間で刃更のそこを横から迎えにいって、
「あ　」
衆がとなっていた胡桃は、刃更のそこがゼストの胸でいやらしく挟まれたのを見た。
さらに、ゼストは自身の口からとろりとした唾液を己の胸の谷間へと垂らして、
「んっ　あぁ　んん♥」
大きな乳房をゆっくりと上下へ揺らすようにして、谷間で刃更のそれを扱らにごき始める。そして、にちゃにちゃと粘着質な音をさせてながら胸で奉仕していたゼストが、
「さあ、胡桃さんも口で…」
妖艶な笑みを浮かべて、胡桃の事を誘ってきた。
「口でって　そんな　」
胡桃は流石に躊躇った。自分はもう中学生だ　年相応の知識はある　それ以上に男性から調教されるのと併せて色々な事を教わっている。だからこそ、ゼストがしている行為と、彼女の提案の過激さに顔を真っ赤にしてしまっていると、

「ん　大丈夫です…　海棠や柚希さんより、一歩先へ進んでしまいましょう」
刃更のものをじっと見ている胸を、ゼストはどんどんいやらしい形にしてゆきながら、
「ほら…胡桃さんが来ないのでしたら…私が胡桃さんの分まで、刃更様にご奉仕してしまいますよ…ん？、良いのですか　？」
そしてとうとう、ゼストが胸の谷間から出ている刃更の先端へと唇を寄せていて、
「つ　た、駄目っ　」
胡桃はとっさに悲鳴のような声を上げて、ゼストを制止した。刃更にゼストと同じにしてと頼んでおいて、自分はゼストにできる事をできないなんて　それに、ここまで　人でしてきたのに、今さら自分だけ仲間外れにされるなんて絶対に嫌だった。
平気なんだから　っ。
柚希や海棠には恥ずかしくて言っていないが　胡桃は以前から、方向音痴が原因した刃更のサイズに合わせたものを使って、口での奉仕の練習をさせられていた。
胡桃の口はもう——刃更の大きさと、その愛し方をとっくに知っている。だから、
「よ…よっ…よっ　」
胡桃は意を決すると、ゼストと向かい合うように刃更の前で膝立ちになって、
練習の通りに、やれば良いんだ　っ。
そう己に言い聞かせた胡桃は、上目遣いで刃更を見上げた　そして、
「刃更兄ちゃん　あたしにも口でさせて」
精一杯にかむと、刃更は胡桃の頭をそっと優しく撫でてくれた。
その心地良さは胡桃に強かな勇気をくれて　次の瞬間、野中胡桃はゼストの胸の谷間を舐めるようにして、己の舌で刃更への奉仕を始めた。
「んっ…れろっ、ちゅる…っ…れるっ、ぴちゃっ、はぁっ…ぺろっ…れろぉ　♥」
ゼストの胸で愛撫され、彼女の唾液でヌラヌラになっていた刃更のそこを、胡桃は自分の舌で塗り返すかのように、いやらしく唾液を塗りたくる。すると、
凄い　これが、刃更兄ちゃんの　っ。
口から鼻へと抜ける刃更の雄のフェロモンが脳まで届いて、胡桃の思考を　気にこれまで以上に淫らな状態へと麻痺させた。
たから胡桃は、いつしかゼストの胸に己の顔を押しつけるように押しつけて、
「は　んむ、れる、ちゅ　ぴちゃ、んっ　れる、れろっ、はぷ　んんっ♥　はぁ　んふっ　れるちゅ、ちゅぴ、んぷ、んりゅっ♥」
胸を寄せないようにして刃更のものを口いっぱいに含むと、己の舌と、興奮で口内に溜まったトロリとした唾液とで淫らにしゃぶってゆく。
ゼストの胸に挟まれ、いやらしく膨らんでいる刃更のそこを、胡桃はそれ以上に脱ばせようとひたすら己の口で奉仕した。
頭や息が苦しくなるまで口に含んでたっぷりと愛撫を、限界が来たら口を離して舌でいやらしく音を立てながら舐めてゆく。すると、気持ち良くさせられたのか、
「つ　」

刃更が腰を軽く浮かしてしまい、その拍子に胡桃は喉の奥を軽く擦られた。だが、

「はぁ、刃更兄ちゃん……っ♥」

今の胡桃にはそんな反応さえ嬉しくて。自分のコで感じてくれた刃更への愛しさが溢れ、咳き込む事さえ忘れて、艶めかしく口を動かし続けた。だから、気付かなかった。

「」

まるで自転車に乗る練習で、後ろで支えていた補助の手を離すように　ゼストが刃更のものを挟んでいた彼女の胸を、そっと後ろへ引いて離れた事に。そして胡桃は、口での奉仕がしやすいように無意識に刃更の下面へ移動すると、手でもごきながら、顔を前後に動かし始めた。すると　口の中全体を使った胡桃の奉仕にとうとうその時が訪れて、

「っ　　胡桃っ！」

こららの名前を叫ぶようにして呼んだ刃更に、頭をグッと掴まれた　次の瞬間、口の中いっぱいに吹き出しそうな程に熱い精を大量に放たれ、

「んんっ！　いい　いい　いいっ♥」

野中胡桃は刃更のものを咥えたまま甘く悶絶した。思わず離れてしまいそうな程の勢いと量――それなのに、胡桃はその全てを喉を鳴らしながら飲み込んでゆく。そして、

「んっ　んっ♥　はぁ　んむ　んっ　ふぅ　ちゅぷ」

最後の一滴まで飲み干し、吸い上げた胡桃は、やがてゆっくりと口を離して、

「あ、れぇ？」

そこでようやく、その事実に気が付いた。

ゼストはとうに刃更への奉仕を止めていた　刃更をイカせたのは胡桃　人で、できましたね、胡桃さん　」

こらら、微笑を浮かべて言ったゼストの興奮に満ちた顔が、胡桃がイかれたけ悔らに刃更へ奉仕を行なっていたかを雄弁に伝えている。

「や　嘘　あ、あたし　ぃ？」

たから湧きかる羞恥に全身を打ち震わせていると、そんな胡桃をギュッと抱きしめてくれたのは刃更で、

「ごめんな！　凄く頑張ってくれてたから、途中で言えなかった」

胡桃の耳元に囁きながら、優しく頭を撫でてくる。たから刃更の腕の中で、

「　今度騙したら、皆の前でアンタの耳噛んでやるから」

「はい　ぇ？」

顔を横へ向けて拗ねたように告げると、ゼストは頷いてから刃更ごと胡桃を背中から抱きしめてきた。そして、少しだけ悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「ですがその前に！　今の刃更様への行為は胡桃さん　人でしたものになってしまいましたから。今度は、シェラ様のペビ　ドールの効果を消す行ないをしましょう」

それに、とゼスト。

「刃更様も　また、私達の奉仕を望まれているようですから」

「えぇ？　あ――！」

脳キョトンとなった胡桃は、すぐにゼストの言葉を理解した。刃更に抱きしめられた状態で、胡桃は自分の臍の辺りに硬いものが触れているのを感じたから。

「いや、これは……っ！」

と焦る刃更に、ゼストはふふと微笑むと、

「胡桃さん　よろしければもう少し、刃更様との絆を深めて下さい」

そこで　拍を置き、

「　今度は私と、最後まで一緒に」

その言葉に胡桃はコクンと頷くと、ゼストと共に刃更への奉仕を再開した。

ペビ　ドールの魔法効果を解くために。

そして刃更とゼスト――　人との絆を、より　層強かなものにするために。

6

その後、胡桃達は無事にシェラのペビ　ドールの魔法効果の無効化に成功した。

たがゼストの提案で、胡桃が刃更に付けて貰った首のキスマークが消えるまで、　人で互いの信頼関係をベッドの上で強める事にして、何度となく刃更の絶頂を分け合って、

「ん」

そして野中胡桃は、ふと意識を取り戻すように眼を覚ました。

いつの間にか眠ってしまっていたらしい。カーテンの隙間から差し込む柔らかな陽の光が、朝の訪れを告げている。ベッドの中、胡桃は刃更とゼストに挟まれるようにして横になっていた。そして次の瞬間　胡桃はこのベッドで自分が行なった事を全て思い出し、

「」

次かに口ろぼと顔を真っ赤にして、ベッドの中で縮こまった。とさにこのまま消えてしまいたい衝動に駆られたが、胡桃は抗えるような羞恥を必死に堪えた。

野中胡桃は、シェラやセキアから貰った助言を忘れていない。

そして、昨夜の自分はそれを果たす事ができたのだ。たから――胡桃は己と向き合い、そして認めてあげようと思った。現にシェラから言われたように、そんな胡桃を刃更はちゃんと受け止めてくれた。ゼストも、た。たから、

今度は、あたしの番　たよね。

そう自分に言い聞かせると、胡桃は故めて隣で寝ているゼストを見た。魔族である彼女と　そして胡桃には不可能な、刃更との主従契約を結んだ彼女とベッドを共にしているのに、嫌な気持ちを感じる事はなかった。昨夜の行ないの最中、胡桃は自分の中から劣等感が消えたと思える瞬間があったが、あれは催眠状態に陥っていた事で得た錯覚や、時的なものではなかったのだ。そう思えた時、ふと胡桃の左手の中

かトクンと脈動した。

今のって……？

刃更とゼストを起こさないようにしながら、胡桃は霊媒術の触手を具現化する。メインスロットに入っているのは、セキアから貰ったエレメント　その闇色の球体の中に、昨日までは無かった金色の魔法陣が浮かんでいた。魔力の波動を規則的に刻んでいる。

眠　た状態だったエレメントが覚醒していた。たから、

そっか。

きっと自分は己の弱さを認め、向き合い、そして乗り越える事ができたのだろう。

変化したエレメントを見た胡桃は、安堵を得て微笑を浮かべる。

月明かに押し倒されセキアに襲われ掛け、ノエラには有りえないド着を着せられた挙げ句、とんでもない状態で刃更の部屋のクロゼットに入れられた時は、どうしてやろうかと思ったが。しかし途中経過は滅茶苦茶だったのだし　月理弥が傷や怖気に追いつくため」と、これまで胡桃にしてきた数々の悪らな行ないか、本当にこちらの願いを実現するための手助けだった事も解った。

勿論　サキュバスとしての本能を満たすためでもあったたろうが、

まあ、ちょ　と内なら感謝したげても、ね。

そう苦笑すると、安心してしまったのか、気に緊張が襲ってきて、

「ふぁ　ん　」

欠伸をつした胡桃は、眠い目を擦ると再び横になって　度寝をする事にした。

昨夜は部屋へ戻らなかったため、怖希と深には心配を掛けたかもしれないが、夜明けと共に刃更の行動制限は解けているのに、誰もこへ来ていないという事は、恐らくノエラが事情を説明してくれたのたろう。或いはその事を怖希達に伝えるために、胡桃を　人残して自分たけ空間トンネルで戻ったのかもしれない。

それに、刃更やゼストもまた寝ているのた。自分も、もう　眠りして良いたろう。

とはいえゼストがここに居る以上、彼女が起こしに来ない事を不審に思った怖希や深が、ここへ駆け込んでくるのは時間の問題かもしれない。しかし、人には悪いかこの状況を見た怖希と深が、どんな顔をするかちょ　と楽しみたった。

たから忍び笑いを漏らした胡桃が、刃更とゼストの間へ身体を滑り込ませると、

「＋＋＋＋＋＋＋＋」「＋＋＋＋＋＋＋＋」

眠　たままの　人は、まるで当然のようにこちらを抱きしめてくる。

刃更の逞しい腕と、ゼストの柔らかな乳房に抱かれる安心地は最高で。

ようやく自分が得る事ができたものをっかりと感ながら、野中胡桃は再び幸せな微睡みの中へと落ちていった。

第4章　旅立つ前にあなたと

1

「それじゃあ、一連の体育祭業務お疲れさま――乾杯」

「乾杯！」

駒ヶ坂学園の生徒会副会長にして、体育祭の実行委員長を務めた梶浦由梨が音頭を取ると、テ　ブルを同じくした者達が声を揃えて軽くグラスを鳴らし合った。

今年の体育祭実行委員会において、取り纏めを行なった生徒会メンバーは四人。

現在開かれているのは、そんな彼らの打ちトげた。

ただし、実行委員会そのものの打ちトげは、既に行なわれている。

たか　それで実行委員会から解放されて通常の学生生活へと戻る　般メンバ　と違い、学校行事を司る生徒会メンバ　は全部門の活動報告に改めて目を通し、体育祭全体の準備過程に問題がなかったかをチェック。反省点や改善点を洗い出し、来年度に活かせるよう、生徒会の活動記録としてまとめる仕事があった。無論、それと並行して通常の生徒会業務を行なう必要があるし、さらには学期末に行なわれる定期試験もある。よって例年、体育祭関連の残務については　学期中に終えれば問題ないとされていた。そのため、体育祭に携わった生徒会メンバの残務を終えるのは　学期の最終日　即ち、十　月　十五日まで掛かり、その日の晩に打ちトげが行なわれるのが恒例になっている。

特別は現在、夕方の五時過ぎ。彼らが居るのは駅近くの隠れ家イタリア料理店――その最奥にあるテ　ブル席だ。体育祭に参加した生徒会メンバ　は四人たが、しかし彼らのテ　ブルには六つの席があり、その全てか埋まっていた。

それは梶浦ら生徒会メンバ　か、この打ちトげに招待した者達がいるため。

人は、駒ヶ坂学園が誇る美しすぎる教師――長谷川千恵だ。

長谷川先生、本来当日は色々とありかとうございました」

グラスをユ　スタ　に置いて、梶浦が軽く頭を下げながら感謝を告げると、

「改めて礼を言われてしまうと、すくったいな　お前達の面倒を見るのは私にとってはいつもの事で、体育祭だからといって何か特別な事をした訳ではないんたが」

長谷川がふっと笑みを浮かべながら言った。すると、途端に梶浦達のテ　ブルはおろか、まるで店全体の雰囲気までもがぐっと華やかさを増した気がして。

この人か綺麗なのは、勿論なのだが、時折ていたつもりなったけど。

梶浦が華は、お酌め前に座る長谷川の美しさと、その存在感に改めて驚いた。

今夜の長谷川は、梶浦ら生徒がいつも学校で目にしている白衣姿ではない。

胸元を大きく露出するキ　ルか開いた赤のホルタ　ネックのパ　ティトレスに、　の腕まである導い黒の手袋をはめて美しい筋肉がついている。たまにテレビ番組で、人気のキャバクラ嬢や高級クラブのホステスなとか紹介されている事があるか、今の長谷川はそうした夜の蝶達

ですら読んでしまうような美しさを湛えていた。それこそアカデミー賞の授賞式へ参加して、レッドカーペットの上を歩けばハリウッド女優ですら見劣りしてしまうのではと思えるレベルだ。流石にここまで来ると、嫉妬よりも感動が勝ってしまう。いつもの白衣姿でも充分すぎるくらいに美人だと思っていたが、

普段は、あれで抑えていたのね。

放課後に学校を回る時には、長谷川はもうこの格好へと着替えており、廊下ですれ違ったり、職員室の前に到着したタクシーへ颯爽と乗り込む姿を目撃する幸運に恵まれた部の生徒達からは、歓声がとある程の騒ぎになったという。そんな長谷川に対し、

「で、でも　ボク達生徒は、普段も先生には色々とお世話になってますから」

彼女の言う　いつもの事」に感謝を述べたのは、誰の眼にも学ラン を着た女子にしか見えない橘七緒だった。体育祭における教職員側の最大の功労者というだけでなく、普段の学校生活でも全校生徒はおろか教職員まで長谷川の世話になっている。

「だから　いつもありがとうございます、長谷川先生」

七緒は、少し面はゆそうに長谷川へお礼の言葉を述べた。多人数の場で発言すれば、その場の視線が集まる事は避けられない。内気な性格の七緒がそれでも言葉を発したのは、身体が弱いため普段から保健室をよく利用しており、何度も長谷川の世話になっているからだろう。すると、梶浦のお気に入りの席に座っている残る二名の生徒会メンバー　一年生で庶務の武井綾子と、二年生で会計の加納　太もとに、

「そうですよ。全校生徒の面倒を直接見ているのなんて、先生くらいしかいないですから」

「だから、俺達が生徒を代表して長谷川先生を慰労したかったんスよ」

まあ、と加納が本音の口調で、

ウチの学校って、一番の憧れの的の長谷川先生とメシ食えるんですから。おまけにその格好で。俺らには最高のクリスマスプレゼントですよ、なあ橘？」

「そ　そうですね、加納先輩の言う通りだと思います」

七緒が困ったように頷きを返すと、長谷川がフッと笑ったのを見た梶浦は、

「　すみません先生。加納が馬鹿な事を」

「いや　前にも同じような事を言われたのを思い出してな」

「え？　それってもしかして先生、男子とご飯食べに行ったりしてるって事？」

「　さあ、どうだろうな」

武井に興味深々に食いつかれた長谷川は、悠然と笑みではぐらかす。

「でも、今日で、学期は終わりって事で、先生方も毎年恒例の忘年会があるって聞いてますけど、こっちに来ちゃって良かったんスか？」

「ああ　あの手の人人同士の付き合いというのは、どうも私の性には合わなくてな」

加納の問い掛けに長谷川は苦笑すると、その笑みを堪能しつつも、と変えて、

「実際、お前達が誘ってくれて助かったよ。普段は適当な理由をでっちあげて断っているんだが　年末の忘年会だけは口うるさい校長や教頭がうるさくてな。だから、今日はデートだと言い張って逃げてきてやった」

長谷川性との美人ともなれば、きっと教職員同士の飲み会に参加するだけでも色々と面倒な事になったり、それこそ嫌な想いをしてしまったりもするのだろう。このトリス姿は、デートという言い訳に説得力を持たせるためだった訳だ。そこまでしてこちらの打ち上げに来て貰ったのなら、梶浦としても可能な限り長谷川の事をもてなしたい。だから、

「先生　ささやかな物しかですが、どうか楽しんでいって下さい」

ワインを美味しそうに飲む長谷川に梶浦は笑顔でそう告げると、次に視線を己の前へと向けた。梶浦からはテーブルを挟んだ正面　長谷川と七緒に左右を挟まれるようにして座っているのは、自分達生徒会メンバーが招待した人日。

長谷川と同じく、梶浦達が今回の体育祭における最大の功労者と思っている人物だ。

だから、梶浦は華は感謝の言葉を口にした　心から、

「東城君も色々とありがとう。貴方が私達を補佐してくれて、本当に助かったわ」

下面に座る梶浦から真剣な口調で言われ、

「いや　俺なんて、それこそ大した役には立てませんでしたから」

東城刃更は恐縮しながら言った。謙遜ではない　確かに成り行きから、梶浦や七緒ら体育祭実行委員会を束ねる生徒会メンバーの補佐を務めはしたが、刃更が担当したのはそれに両期のチェックや整備の手伝いで、たまに各部署の進行状況の確認や、協力が必要なクラブや教職員への伝達などのお使いをした程度だ。先日開かれた実行委員会全体の打ち上げには、部や物希、陣や相川らと共に参加させてもらったし、故めてこの主要メンバーの打ち上げに招待される程の事はしていないと思う。

それに、俺は二年の先輩達と問題を

刃更は準備期間中に、一部の男子生徒らと衝突する騒ぎを起こしてしまった。

勿論、あれはやむを得ず起こした行動ではある。年生の　特に堂トの梶浦に対する暴言は、決して見過ごせるようなものではなかった。

けれど。

梶浦への侮辱を許せなかった下義感たけか、堂下らと衝突した刃更ではない。

あの当時　刃更は、長谷川のマンションからの帰り道に　般人を装って攻撃してきた謎の襲撃者の手体を摑む有効な手立てを見つけられずにいた。そして、その容疑者のひとりが堂上だったため、敢えて自分から仕掛ける事で反応を窺ってみたのだ。

たけど。

その反面、実行委員を司る梶浦達の足を引っ張ってしまった事は否めない。体育祭を成功させようとたたひたすら頑張っていた彼女達の事を本当に想うのなら、もっと穏便に事態を収めた方が良かった。そうする方法は幾らでもあったのだから。しかし、

そ、そんな事ないよ」

隣の七緒が、いきなり大きな声を上げた。大人しい七緒にしては珍しい反応に、その場にいた誰もが驚いたように七緒を見る。ハッとなった七緒は頬を赤く染めて身体を縮こめたが、それでも上目遣いで刃更を見上げながら、

たって東城君のお陰で、ボク達すごく助かったもの。本当だよう」

「そ、そうか……」

それなら良かったけとさ。しか橘　何たってお前は今日もそんなに可愛いんだ。

刃更が思わずトギマギしていると、

「桶の言う通りだ。あの堂上先輩達が大人しくなったのは、東城のお陰たもんな」

「いや、俺は別にそんな」

確かに、実行委員会で傍若無人に振る舞っていた一年生達を懲らしめはしたが、堂上が大人しくなったのは七緒が睥睨を使ったからで、さらには刃更のクラス担任だった坂崎守が、刃更達を護るために堂上を操って利用していたからだ。そうした裏の事情や真実を知らない者からしてみれば、刃更のお陰で堂上が大人しくなったように見えるだろうか、

「俺はただ、堂上先輩達を煽ってしまっただけで」

いいえ、違うわ東城君」

刃更の言葉を遮って、梶浦は首を横に振った。

「確かに、堂上先輩に手をあげかけたのは、あまり褒められる事ではなかったのかもしれないけれど　でも、あそこで貴方が踏ん張ってくれなかったら、きっと委員会は機能不全になってしまっていたもの。それこそ、取り返しのつかない程にね」

「……」

「それに――あの　件がなかったとしても、東城君は充分に役に立ってくれていたと思うわ。貴方が雑務を手伝ってくれたお陰で、私達の負担はかなり軽くなっていたのよ？」

「ですね。東城君で仕事は速くて丁寧だ。デスクワークだけかと思ったらフットワークも軽いし。何かこう決断が速いだけじゃなくて、色々と先を読んで動いてる感じがする」

梶浦の言葉に同意した武井の感想に、刃更は思わず苦笑する。

先を読んだ動きと、利害の問に連続で行なう決断――それはまるで、スピードタイプの神速剣術使いとしての、刃更の戦闘スタイルを表すような言葉だった。

「ありがとうございます。そう言って貰えると」

東城刃更はもう勇者ではないけれど。それでもかつての経験は　仲間と共に過ごした日々で得たものは、誰かに今も自分の中にある。そのお陰で、異能を巡る因果に巻き込まれてしまった際を守り、共に戦う事ができる。本当ならば、それだけで満足するべきなのだろう。ただ、もしそれとは別に誰かの日常の助けになれたのだとしたら、

たったら、嬉しいな。

たとえもう戻れなくても　辛い記憶と共に失ってしまったとしても。

それでもかつての大切な日々に、戦う事以外にも価値があったのだとしたら。

それは東城刃更にとって、間違いなく救いだと思えるから。

「　　」

無意識に真剣な表情と声音になってしまった刃更に、自然とその場の空気がシ…となった。いけない。折角の打ち上げの明るい雰囲気を壊してどうする。刃更は慌てて、

「　でも、大丈夫なんですか？　店を丸ごと貸し切りにするなんかして」

と、店内を見回しながら言った。十席もないような店だが、貸し切りにするなら本来十人以上とは必要だろう。イブに都合が悪かったカップルたっているだろうし、年末の忘年会シーズンでもある。駅からも近いし、利用したい人は沢山いる筈だ。すると、

「ああ、平気平気。この店な、ウチの生徒会が毎年この日に貸し切りにさせて貰ってるんだよ……しかも格安でな。何でも、もう二十年近く前からの恒例らしい」

加納が笑いながら言うと、梶浦が補足するように、

「予備には十七年前からよ。何でも当時の副会長が相当やり手だったらしいわ。転校してきたはかりで、それまではどちらかというと大人しかったウチの体育祭や文化祭を大胆に改革して、今みたいに盛り上がる形にしたみたいね。東城君達が参加した男女混合の　人四脚でやる障害物競走も、その人のアイディアだそうよ」

「へえ、意外と歴史の長い競技だったんですね」

あんなの、ここ数年の間に誰かがノリで作　たものだとばかり思っていたが。

「カリスマの塊みたいな人だったらしくて、その人を慕って当時の生徒会はかなりの人数がいたみたいよ。で、その人がこの店のオーナーさんにも相当気に入られて、それから格安でウチの生徒会が代々体育祭の打ち上げに使わせて貰えるようになったらしいわ」

確か、東って人でしたよね？」

武井の問い掛けに、梶浦は「ええ」と頷いて、

「東丈人さん　残念ながら、すぐにまた転校していなくなっちゃったって話だけど」

「つて　ガハッ、ゴホッ！」

その名を聞くなり、ウロン茶が入　たグラスに口を付けていた刃更は激しく咽せた。

「と、東城君っ？　大丈夫っ？」

「あ、ああ　悪い。うっかり気管に入ったみたいだ」

心配そうにこちらの背中をさすってくれる七緒に礼を言いながら、

……　体何をやってるんだ、あのオヤジは。

刃更は思わず頭を抱えたくなった。東丈人というのは、刃更の父親である迅が潜入任務などでよく利用していた偽名である。音読みにして名字の区切りの位置を変えれば、そのまま東城迅になるという何ともいい加減極まりないネーミングなのだが、本人曰く「ああいうのは単純な方が良いんだ」との事らしい。

よもやあの　人四脚が迅の考えた競技だったとは。馬鹿　て言からいるんだなな　とか思っていたら、まさか父親が昔は馬鹿だったなんて。おまけに歴史を超えて息子の刃更が出場してツケを払う羽目になるとか、因果すぎるにも程がある。恐すぎるだろ歴史。

……って事は、親父って俺らの先輩だったのか。

十七年前だと、タイミング的には戦後との大戦の末期か。とはいえ戦闘が小康状態だった時期もあったという話だから、何かの任務で迅が聖ヶ坂学園に通っていた可能性はゼロではない。すぐに転校してしまったという話も、戦場へ戻ったと考えれば説明がつく。或いはこの店のオーナーに気に入られたのも、潜入中の任務に絡んでいたのかもしれない。

迅の過去に思いを馳せながら、七緒の助けを借りてどうにか刃更が呼吸を整えると、

「ねえ、東城君。生徒会に入る気はない？」

「えっ？　俺が、ですか？」

不意に梶浦に問われ、キョトンと刃更が問い返すと、

あんまり意外そうにされると困るわね　先刻も言ったけれど、貴方の今回の働きは私達にとって、とてもんきな助けになったの。きっと貴方は、牛徒会に入ればものばく活躍できると思うわ。聞けばどこの部にも所属していないという話だ　し

とうから、と梶浦。

「私達は、来年も引き続き牛徒会に所属するつもりよ。今回、貴方と一緒に体育祭を作りトげたここにいる四人が、次の牛徒会の中軸を担う事になる　その時に、貴方の力を借りられたら、私達としてはとても心強いの」

いつの間にか梶浦は真剣な表情になっていた。梶浦だけではない。七緒や加納や武井も、真剣な眼差しでこちらを見ており、梶浦一人の思いつきではない事を伝えてくる。

……成る程、それでか……。

自分がこの打ちトげに招待された理由を刃更は察した。梶浦の十面の席に座るように勧められたのも、この話をするのに適していたからだろう。

ありがたい話だ、と刃更は思う。梶浦らに評価された事は素直に嬉しい。すると、

「ちなみに来年、春に行なわれる文化祭の準備は、前の年の冬休みの内にスタートするんだが　東城、お前の冬休みの予定は？」

「……すみません加納先輩。明日から、しばらく遠出する用事があるんです」

刃更が軽く頭を下げると、陽の席でワイングラスを傾けていた長谷川が、

「遠山、か　成瀬や野中らと海外にでも行くのか東城？」

問われた刃更は、まあ、そんな所です」と頷きを返すに留めた。本当の事は言えない以上、この話はあまり聴らませないが良い。

「うわ、リア充さんだ……」

武井にそうノート眼で言われ、刃更は頬を掻きながら苦笑する。

武井の言葉は、ある意味では間違っていない。

刃更達の今年の冬休みは、否が応でも充実する事になるだろう。

何せ。

この後――乃絵美の姉のセキアの手引きで、刃更達は魔界へ赴く事になるのだから。

「なので、すみません　冬休みにお手伝いをするのは、ちょっと」

刃更が頭を下げると、梶浦は答める視線を加納へ向けて、

「当然だわ。今日一た話で、いきなりこの冬休みから手伝えなんていうのは厚かよ……加納は堪に、自分が楽をしたいだけでしょう？」

対する加納は「まあな」と悪びれずに笑った。梶浦はノァと嘆息してから、

「そういう訳だから、東城君　別に、今すぐにという訳ではないの。冬休みの間にでも、少し考えてみてくれないから？」

解りました」

ここで無駄に場の空気を悪くする必要はないだろう。頷きを返した刃更は、

「あの　長谷川先牛」

良い機会なので、今の内に長谷川へ尋ねる事にした。それは、

「海外へ行く時に　気を付けておいたら良い事とかって何かありますか？」

これから刃更達は、澪を取り巻く状況を解決するため魔界へ向かう事になる。

現魔七オ・ルトや、板機院という高位魔族らが相手だ　厳しい戦いは避けられない。

その覚悟はしているが、それでも刃更は旅立つ前に長谷川の助言を聞きたかった。

これまで刃更が相談する度に、長谷川はこちらを導くような助言を示してくれてきた。

それこそ本物の魔法やおまじないのように、刃更を助けてくれている。

だから――図々しいのは百も承知で、刃更は今回も長谷川に尋ねた。すると、

「そうだな、これは海外に限った話ではないが……」

と、長谷川は前置きをしてから、

「旅行をすると大抵、時間が足りなくなる　それは予めかてた計画通りに物事が進んではくれないからだ。無論、計画をたてるなとは言わない。しかし当初の計画に縛られてばかりいると、大切なものを見失ってしまう事になる」

「大切なものを見失う　ですか？」

刃更がオウム返しに問うと、長谷川は　ああ」と頷いて、

「旅先ではつい眼の前にあるものが新鮮に感じられるが、近視眼的にはなるなという事だ。慣れない土地のため難しいかもしれないが、常に柔軟な思考を心掛けろ。それこそ、もしも今回の旅で絶対に行かなければならない場所や、やらなければいけない事があるのなら、それを成遂げる事だけを考えて行動したりが良い」

いいか。

「一度の旅で全てをやろうと思うな　たとえとんなに遠い場所でも、その気になれば意外とまた行けるチャンスはあるものだ。後回しにした事は、またその時にやれば良い」

「……そうか、そうですよね」

やはり聞いて良かった　と、刃更は心の底から思った。長谷川がくれた助言は、それこそ眼から鱗のものばかりだ。絶対に成し遂げなければならないものと、絶対に成し遂げたいもの　その　つは、同じように思えるが実際は異なっている。そして魔界という場所のため、つい　チャンスは　度きりだと思い込んでしまっていたが、

いざとなれば　日引いて、またチャンスを窺　ても良いんだ。

刃更達は今回、魔界へ行って自分達にまつわる全ての問題を解決しなければいけないと思っていた――たがそれは、気負いすぎたあまり自らの逃げ道まで塞いでしまう考え方だ。

確かに絶対に譲れない事はある　たが、　度で全てを上手くやらなくてはいけない訳ではない。特に澪の抱える問題は、慢健派と現魔七派に絡んで魔界全体を巻き込む程のものだ。それを、たった　回で解決しようとするのはムノが良すぎる。

「　とうた、なにか参考になったか？」

「はい　ありがとうございます」

ふと笑みを浮かべた長谷川に、刃更が確かな頷きを返すと、

「　お待たせしました」

そこへフロア担当の女性が前菜を乗せた皿を持ってテーブルへとやって来た事で、その話は一旦お開きとなった。そして、人数分の眼の前に皿が配膳されてゆく中、

「あのね、東城君……」

こっそりと隣の土緒がこちらの袖を引いて、耳打ちしてきた。

先刻の話だけど……もし良かったらキミたちじゃなくて、成瀬さんと野中さんの二人も誘ってみたらどうかな？　彼女達も一緒なら、きっと東城君も楽しいと思うし」

「……そうか、そうだな。解った、考えてみるよ」

ありがとな、と刃更が囁くと、七緒は嬉しそうに「うん」と笑った。

……そうだよな。

前を向きながら刃更は思う。自分達は現在、難攻の大勢力から眼を付けられている状態だ――その問題を解決しない限り、牛徒会に入る事など全く考えられないか、

……でも。

そのゴタゴタに　区切りできたら　そうしたら考えてみても良いのかもしれない。

澪や他希や、そして自分が心の底から学校を楽しいと思えるような。

そんな――ごく当たり前の日常の過ごし方を。

2

そして全員の前に前菜の乗った皿が配膳されると、食事の時間が始まった。

牛ハムやチーズなど、種の盛り合わせの後、キノコをふんだんに使用したクリームソースのパスタを経て、やって来たメインディッシュはクリスマスという事もあり鳥料理。

グリルオ・オ・ヒレエリ　ビネガ　のソースを掛けた、ホロホロ鳥のロースト。

随分と豪華だった。

アラカルトのメニューの値段を見る限り、高級店というよりはリーズナブルな価格設定ではあったが、それでも高校生が気軽に利用できるものではない。コースに加えて、ドリンクの飲み放題も付いている、それなりの値段にはなる筈だ。

費用は牛徒会予算から出るらしいから、よほど贅沢な料金があるのか、それとも普通の店のオーナーに恐ろしく気に入られて安くして貰ったのか。チラッと刃更が隣の様子を窺うと、他の牛徒会の面々は美味しそうに出された料理に舌鼓を打っている。

まあ、俺が気にする事じゃないか。

既にここまで食べているのだ。今さら心配や遠慮をしても仕方がない。

周囲に倣ってナイフとフォークで口サイズに切り分けて食べてみると、口の中にソースと共に肉の旨味が広がった。同時に、ほんのりと甘く清涼感のあるハーブの香りが鼻を抜ける　恐らくローズマリーを使用しているのだろう。

「美味い……！」

そう、声に出して貰えて良かったわ」

思わず唸った刃更に、眼の前の梶浦がやっと破笑した。

それは体育祭の実行委員会では見られなかったような穏やかな表情で　意外な　面を目の当たりにして、思わず梶浦に眼を奪われていると、

「……」

刃更は危うくナイフとフォークを落としかけた。別に梶浦に見惚れていて、うっかり手を滑らせた訳ではない。机の下で、不意に右の太股を軽くつねられたのだ。視線を落として見れば、隣の長谷川の右手が白いテーブルクロスの内側へと入れられており、

「……」

セクシーなドレス姿のためどうしても胸元へ目が行ってしまう事もあって、なるべく見ないようにしていたのに　刃更が横目で　何をするんです」と視線を送ると、長谷川はこちらを見ないままつねるのを止めてくれた。しかし、その手は刃更の太股のトップに置かれたままで、グラスのワインを飲み干した長谷川は「同じものを」とお代わりをオーダー。フロア担当の女性が、恐るようにボトルを持ってこちらへ来てその時だった。

なっ……っ

東城刃更は思わず動揺した。長谷川が、指先を滑らせるようにしてこちらの太股を撫で始めたのだ。思わず声を漏らしそうになる程の絶妙な力加減――それは、くすぐると言うよりも、本気でこちらを欲情させようとする愛撫のそれで。

この位でよろしいでしょうか――」「ああ、充分だ　ありがとう」

ワインを注いでくれた女性に礼を述べながらも、他の者達からは死角になって見えないのを良い事に、長谷川は刃更の太股を平然と触り続けている。

……っ」

恐らくは軽い悪戯のつもりかもしれないが、刃更としては堪ったものではない。

刃更が周りには気付かれないように苦める視線を送ると、長谷川は手面の武邦と普通に会話を行ないながら、こちらの太股に指先でそっと「うわきもの」と書いてくる。

何でだよっ

刃更が思わず心の中で突っ込むと、表情にも出てしまったのか、

「？　東城君、どうかしたの？」「……いや、何でも……っ」

刃更はとっさに誤魔化すと、平静を装いながらまずは食べる事に集中した。フォークとナイフで両手が塞がったままでは、長谷川の好きにさせてしまうからだ。すると、

おや、どうしたんだ東城？　急にそんな慌てたように食べ始めて」

長谷川が悠然と笑みを浮かべながら、からかうように言ってくる。

「っ……この鳥がとても美味しいので、つい止まらなくなっちゃいまして……」

そうか――そんなに好きなら、私のも半分お前にやろう」

顔を引き攣らせながら刃更が告げると、長谷川が自分の皿をこちらへと寄せてきた。

「ナイフで切ってあるんだけで、口には付けていないから心配するな」
見れば、長谷川の鳥肉が、一口分と元の半分の塊とに綺麗に切り分けられており、
っ、俺の考えが読めるのかこの人　ｗｗ？
テーブルでの悪戯　つに、ずんだけ用意周到なんだよ。
「いえ、それは流石に先生に悪いですから・・・」
「若い奴が遠慮しなくていい。それより、変に急いで食べるな・・消化に悪いぞ？」
刃更がやんわりと諭すと、長谷川は幾分の笑みを浮かべている。しかし、
先生　もしかして、あまりお口に合いませんでしたか？　何でしたら、今からでも他の料理に変えて貰いましょうか？」
心配そうに俺浦が尋ねた。良いぞ光都――と刃更が心の中で快哉を叫ぶと、
「いや、そんな事はない・ただ、最近ちょっと摂生をしていてな」
そう言って苦笑した長谷川に、
「いやいやいや、長谷川先生のスタイルでそんなの全然必要ないじゃないですか」
力説のような口調で加納が言った　その時だった。
「私だって女なんだ・好きな男ができれば、そいつのために少しでも綺麗でいたいと思うのは当然だろう？」
長谷川は、そうさらりと言い放った。

突然の告白に、全員が眼をパチクリとさせた後、
「えいいい　いいい、やっぱり長谷川先生って、付き合ってる人できてたんですかっ？」
武井が身を乗り出し、眼を輝かせて尋ねる。
この　ヶ月くらいで、先生がまた　段と綺麗になったよねって学校中で評判になっていて　あれは絶対に男だって皆で言ってたんです」
興奮を隠しきれない武井に、真面目な性格の俺浦が注意するかと思えば――やはりそこは女子。俺浦も驚きや興味が勝ってしまったのか、
「もしかして、本当にこの後デートのご予定が？」
「いいや。ただ、相手次第ではそれもあり得るかもな」
長谷川はそう言うと、一瞬チラッとこちらを見てきて、
う。

ただでさえ机の下で悪戯されているというのに、何たか話の流れまでヤバイ方向へ行きかけている――そんな不安にかられ、
「先生、やっぱりトさい鳥肉」
話題を逸らそうと、刃更は長谷川の鳥肉を自分の皿に移してモリモリ食べ始める。
「美味いっ・との鳥肉は最高ですねっ？」
しかし、そんな刃更の腕白な食べっぷりを誰も見ておれず、
「教師って職場が変か多いんですよね？　もしかして、お相手はウチの学校の人だったりするんですかっ？」
「さあ、どうだろうな・・・」

す」かり興奮してでいぐい迫る武井に、長谷川は余裕の笑みで躱すと、
「ふぁ、せめて年トか年下かだけでも　やっぱり　人きりの時たと、いつものクールな先生とは違う感じになっちゃうんですかっ？」
そうだな　年は私より下だ。　人でいる時の私がいつもと違うかどうかは、自分ではちょ　と解らないか　」
ただ、と長谷川。机の下で刃更の太股に触れている手を、内股へと滑り込ませながら、
「普段、自分や他人の性別を意識するような事はあまりないんだが・そいつの前たと、私は自分が女たという事を思い知らされてばかりいてな。たから、他の奴には絶対に見せないような女の顔を、そいつにたけは見せてやりたいと思っている」
そう言って、ふぁっと笑った長谷川のあまりの艶　桂さに、
「　っ」
その場にいた誰もか、惚気たとからかう事もできずに息を呑んだ。そんな中、
い　ご馳走さまです」
東城刃更は長谷川から貰った分も含めて全て平らげると、爽やかにフォークとナイフを置いて机の下に手を入れ、こちらの太股をまさぐっていた長谷川の手を摑んだ。
しかし――刃更がそうしてくる事を読んでいたのたろう。
「もう食べてしまったのか東城・そんなに美味しかったのか？」
「お陸様で　」
長谷川にたけ聞るように皮肉を込めて言うと、美しすぎる難渡教諭は嬉しそうに机の下で刃更の手に指を絡めてくる。そして、恋人つなぎの状態で人差し指たけを立てた長谷川は、そのまま刃更の太股へ指先を滑らせると、ハートマークを何顧も描き始めて、
「と、東城君　凄いけたよっ？」
「た、大丈夫た　鳥肉の香辛料か今になって効いてきたらしい」
冷や汗が止まらない位にな、ともでは言えず刃更が誤魔化していると、
よろしければ、そろそろデザートをお持ちしましょうか」
全員の皿か空いているのを見て、フロア担当の女性が尋ねてきた。
「え、ええ・そうですね、お願いします」
ッとなった俺浦か、慌てて頷きを返すと、
「本日のデザートは、ティラミス、アイスとイヤ　ヘットの盛り合わせ、　ックスベリ　のタルトの　つからお選びいたたけます」
女性の挙げたデザートの中から、刃更達はそれぞれ好きなものを選択。
その注文を伝えに女性が厨房へと向かい、その場の空気か改まったところで、
「・・残るはデザートたけたし、そろそろ例のプレゼント交換を済ませましょうか」
「来たな伝統行事　そんなのあ準備するとすっか」
俺浦の提案に加納か同意の言葉を返すと、
・・・あ　」
机の下でこちらの太股にノートを描いていた長谷川の手か止まった。悪戯を止めてくれるつもりになったのたろうか　刃更が思う思う罠

いでいた手を解くと、長谷川の左手がゆっくりとテーブルクロスの下から出され、

「ふぁ……」

満足げな笑みと共に、長谷川はその手で耳に掛かっていた眼鏡をさらりと掻き上げる。

やれやれ。

サッと胸を撫で下ろした刃更は、机の下にある備品入れの籠へと手を伸ばし、持ってきたプレゼントが入っている紙袋を取り出した。プレゼントの交換会がある事については前もって聞いており、忘れずに準備してきている。予算は最高一千円までで、各人の購入費用もあるため手作りでも構わないとの事だったが、男の手作りが喜ばれるとも思えないため、刃更が用意したのは設定予算の範囲内で購入したものだ。

そして、全員がプレゼントの用意を終えると、加納が隣の空いているテーブルの上に置かれていた、十cmほどの四角い箱を持ってきた。先程から眼に入っていた、上面と四つの側面に直径十五cmの穴が開いている奇妙な箱だ。

「やっぱりそれ、先輩達が用意したものだったんですね　一体何なんです？」

「これか？　こいつは聖ヶ坂学園生徒会に代々伝わる『トキドキボックス君Z』だ」

そう言って、自分の席へと戻った加納がこちらのテーブルの上にその箱を置いて、

「クリスマスにやる打ち上げって事で、当時の生徒会長がプレゼント交換をやろうと提案してな　それを聞いた例の名物副会長が、たたのプレゼント交換じゃ帰りよからないからって、コイツを使ったゲームを考案したらしい」

「穴が全部で五つ開いているでしょう？　上の穴には『振り振り用の番号』が、側面の穴にはそれぞれ『何番の人のプレゼントを貰って』『これだけの時間や回数』『自分　人で、もしくは他の番号の人と』『何をしなければいけないか』書かれたメモが入っているの」

つまり、と梶浦。

「プレゼント交換をくじ引きでやって　それを貰う代わりに、メモに書かれた指令を行なうというゲームなのよ」

？　何か、梶浦先輩はあまり乗り気じゃなさそうですけど……」

梶浦の口調や表情から何となく察した刃更に、

「指令の中には、結構人阿なものもあって　まあ完全に適任せのクジ引きだし、指令が書かれたメモ自体も当時の先輩達が用意したものだから、王様ゲームみたいに誰かが誰かに理不尽な命令をして、人間関係が悪くなるような事はないのがせめてもの救いだけれど」

そ、そうなんですか」

本当に何をしてんだあの親父は　呆れながら相槌を打った刃更は、

「ごめん、あそこにある大きな白い袋の中には　」

ええ。指令に使うための道具が色々と入っているわ」

とんだサンタのプレゼントだな。というか、

「あの　あんまり嫌なら、普通にプレゼントを交換したらとうですか？」

女の子に挟まれるような馬鹿な種目を発案した当時の先輩が考えたものだ。きっと、さぞかし若気の至りな指令が書かれたメモが入っているに違いない。ところが、

「いいえ……これは絶対にやらなきゃ駄目なの」

と梶浦は首を横に振った。

先刻、加納が「伝統行事」って言ったでしょう　十七年前の体育祭で大成功を収めた当時の生徒会は、言うなればウチの学校の伝説なのよ……だからこそ、その成功にあやかれるようにと、この店での打ち上げやプレゼント交換は伝統になったの」

「伝統っていうよりも、もうジンクスって言って良いと思うけどな」

何せ、と加納。

「東城が言ったみたいに、このゲームをやらなかったり、書かれている指令をライトなものへ入れ替えた代がこれまでにも何度かいたらしいんだが　そうすると次の年の体育祭は、必ず何かしらトラブルに見舞われたんだそうだ」

って事は、つまり……」

刃更が七緒と武井を交互に見ると、

「……ううん、ボクも今日初めて聞いたんだけど」

今回やらないと、あと一週の代が取り仕切る来年の体育祭でトラブルが起きる……て訳」

……本当ですか、その話？　何だか、ちょっと胡散臭い感じがしますが……」

刃更が訝しげに問うと、加納は　多分な」と肩を竦めて、

「今年の実行委員は、人数は多いわ、　年の先輩がトラブルを起こすわ、本番には暴漢が発生するわで、まあ散々だった訳だが　表は去年の打ち上げで、　人たす「こんな指令には従えません！」って顔を真っ赤にして拒否した挙げ句、「そんなジンクスなんかに負けず、私達は絶対に成功させてみせます！」　て俺そうに啖呵切った奴がいてな」

「っ　」

加納の言葉にビクッと反応し、頬を赤くしながら気まずそうな顔になった者がいた。

梶浦だ。加納は、そんな彼女の反応に苦笑しながら、

「ま、最終的には今年の体育祭は成功だったと俺は思ってるんだが　来年のためにも、ここは伝統のジンクスを大切にしとこうって話になったんだ」

「そうだったんですか……」

ご免なさいね、東城君まで巻き込む形になってしまって」

いえ、そういう事なら　」

梶浦が謝る事ではないだろう。むしろ、己の不始末的な気がして申し訳ない位だ。

「長谷川先生も……そういう訳なので、ちょっと騒がしくなるかもしれないのですが、少し眼を瞑っていただいて良いでしょうか？」

と、申し訳なさそうに梶浦が言った。

「もちろん飲酒など、法律に違反するような真似は絶対にしませんので」

「もう十何年も前から受け継がれてきている伝統のようなものなんだろう？　ウチの歴代の生徒会が問題を起こしたという話は聞かないし、現に今年もこの店を貸し切りにさせて貰えている。こういう場で行なうゲームからといって、野暮な事は言わないから心配するな」

それに、と長谷川。

「その手のゲームは見た事がないんでな…　観客に回るから楽しませてくれ」
と、楽しそうに笑ったところで、
「　お待たせしました」
メロア担当の女性が、刃更達の注文したデザートを持ってやってきた。そして、
「それじゃあ――甘いものを食べながら、始めるとするか」
加納の言葉と共に、聖ヶ坂学園生徒会伝統のプレゼント交換が始まった。

3

まずは全員で箱の上に開いている穴からクジを引き、それぞれの番号を定めた。
刃更が引いたクジに書かれていた番号は4　つまり、四番目に箱の中からプレゼントの番号や指令内容が書かれたクジを引くというのと、他の人の番でも、この数字が出た場合はその人の指令に巻きこまれるって訳か。
とんだロシアンルレットだ。梶浦は王様ゲームのように、誰かが無茶な指令をして気まずい事にならないのが救いと言っていたが、反対に言えば実際にこの場でクジを引く者の常識や良識に頼る事ができないため、容赦ない指令を引いてしまう可能性がある。
「さて　まずは俺からだな」
そう言って、1番を引いていた加納が側面の穴からそれぞれのクジを引いていった。
そして四つ折りにされている紙片を、加納は自分では開けずに武井へと渡した。
これは、本人ではなく次の番号の者が開ける事で、ドキドキできるようにするためのルールらしい。四つの紙片を受け取った武井は、まず最初にプレゼントの番号が書かれているクジを開け、
加納先輩が貰うのは3番のプレゼントです」
そう言って、全員に書かれている番号を見せている。すると七緒が小さく手を挙げて、
「あの、ボクが3番です…　えっと、どうぞ加納先輩」
「おう、サンキュー」
受け取った加納は、さっそく包み紙を開けて中を見た。小さめの箱に入っているのは、
「えっと…　時計、じゃないな。歩数計か？」
はい、王臨には活動歴計です　歩行距離や消費カロリーなども測ってくれます」
七緒は頷きを返すと、少し恥ずかしそうに、
「ボクは身体がちょっと弱いので、何か健康に役立つものをと思ったんです　良かったら使ってみてくれませんか？」
と、はにかむように言った。使ってみて下さい」ではなく「使ってみてくれませんか？」と控えめにお願いするあたりに、七緒の可愛さは単なる外見からくるものではなく、性格にも出来ている事が解り、刃更の心が思わずほっこりとなる。
「ああ、試してみるよ　ありがとう、後は俺がやる指令を見せてくれ武井」
その問い掛けに、武井は「はい」と頷くと残りのクジを開いていった。まずは「『十分間』、続いて『一人で行なう』と出たところで、加納

意外の全員がホッと、
「ちっ…巻き添えはナシか」
反対に加納本人は舌打ちすると、武井が最後に指令の書かれているクジを開いて、
「…『辺りをぐるっと走ってくる』」
「体育祭の打ち上げで、この巻空のドを　人で走んのかよ…」
思わず「げっ」となった加納に、
あら、桶から買ったプレゼントかさ、そう役に立って良いじゃない」
昨年の打ち上げでの事をバラされた腹いせか、梶浦がふふんと笑った。
「サボっても、数個を見ればすぐに解るから不可ができないもの」
「マジか…誰か使用アイテムもあったよな？」
「…えっと、これですね」
武井が巨大な白い袋の中から、黒いウエストポーチを取り出して、
とうぞ、ポをかいた時用の、タオルと着替えのTシャツです」
「至れり尽くせりだな　クソッ」
加納は武井からバッグを受け取ると、七緒から貰った活動歴計を腕から取り出し、電池を入れて腕に巻いた。そして、デザートのティラスを　口で丸ごと咥えて席を立ち、
「まあ、この後の指令には巻き込まれないと思えば良いか。んじゃ、行ってくるわ」
と、そんな加納を長谷川が呼び止める。
「待て加納、行くならコートも着ていけ」
「いや、でも走ったらどうせ暑くなって脱ぐ事になります」　どうせ終わったらここへ戻ってくるんですから、このままの方が荷物にならなくて楽なんスけど」
それよりも汗をかいて身体を冷やしてしまう可能性の事を考えろ。あと、往後すぐのラーメンは発汗教練としてはあまり勧めたくないし…もし走るなら、十分は軽いウォーキングに留めてまず身体を温めてからにしろ。それが準備運動にもなる」
「え　でも、それじゃあ　時間オーバーって事に」
「明日からの冬休みを、消化不良や風邪を引いての体調不良で迎えたくはないだろう」
そこで長谷川は、自分の財布から五百円玉を　枚取り出すとピンと親指で弾いた。
宙を回転しながら舞った硬貨をパシっと受け取った加納に、
「冬とはいえ大量に汗をかけば脱水症状を起こす…念中での水分補給を忘れるな」
「…うっす、行ってきます」
長谷川のアドバイスに加納は頷くと、コートを羽織りながら店を出ていった。
全員でその後ろ姿を見送った後、
「　それじゃあ、次はあたしですね」

と、2番手の武井がクジを引き、3番手の七緒へと渡した。武井に当たったプレゼントは5番、梶浦の用意した特製のブックカバーだった。そして、

「えっと『このゲームが終わるまで』、『5番と一緒にやる』です」

「あ、プレゼント貰ったのに、すみません梶浦先輩」

七緒が読み上げた後に見せたクジに、武井が申し訳なさそうに謝ると、

「仕方ないわ、ゲームだもの……」

と梶浦は苦笑した。だが　その余裕は長くは続かなかった。

「？　どうした桶？」

ふと刃更が、七緒の様子がおかしい事に気付いて問い掛けると、顔を赤くした七緒が、

「……あの」

指令が書かれているクジを読み上げる事なくこちらへ見せてきた　そして数分後、

「っ」

刃更の下面に座る梶浦は、気の毒になるほど赤面していた。武井への指令は『下着を脱いで過ごす』というもので　彼女と　緒に、梶浦もその指令に従っているため。

「えぇと梶浦先輩　何かすみません」

気まずそうに謝った武井にどこか余裕があるのは、彼女がスカートの下に短パンを穿いてきていたからである。しかしトはノーブラなため、下も直接短パンというのは充分に恥ずかしい格好だと思うのだが、それでも梶浦よりはずっとマシという事なろう。何せ梶浦の方は、完全にノーパンノーブラの状態だ。ノークスを防ぐために長谷川が女性用トイレに付いてゆき、梶浦と武井がきちんと下着を脱いだ事を確認しているため間違いない。

いつもならば、梶浦は常のタイツを穿いているのだが、今日に限って彼女は生足で来ていた。つまり、巻き添えを食らった梶浦の方が恥ずかしい想いをしているのだ。

「まさか、こんな形で去年のツケが回ってくるなんて……」

呟くように梶浦が言った。彼女のこの指令が去年の打ち上げで梶浦が恥ずかしさのあまり拒否したものなのだという。よって普通に考えれば、武井のようにスカートの下に何か穿いてきそうなものだが　このゲームの強力なノークスを身をもって体験していた梶浦は、去年と同じ格好で臨むと同じ展開になりそうで怖かったらしい。

その考えが完全に裏目に出た訳だ。そんな少し前日になっている梶浦に対し、

「先輩、指令はゲームが終わるまでですよ？　さっさと終わらせちゃいましょう」

「……え、ええ。そうね。ありがとう東城君」

刃更が励ますと、梶浦はコクコクと頷いた。そして、

「っ、っふぁあ　ボクが……」

七緒はプクっと喉を鳴らしてクジを引くと、刃更にそれを手渡してきた。当たったプレゼントは、武井の用意した有名ブランドのチョコの詰め合わせだ。そして指令の中身は、

「時間は『十分間』、やるのは『同性の誰か一人からされる』……って事は俺たちな。加納先輩はいないんだし」

「こ、ゴメンね東城君」

いや、良いさ　気にするな」

武井が引いた条件より時間は短いし、緒にやるのではなく、こちらが七緒にやるという事なら、巻き添えではなく手伝いのようなものだろう。だから刃更は、最後に指令の書かれたメモを見て――その瞬間、くわっと眼を見開いた。

「と、とうしたの東城君？　もしかしてボク、凄いの引いちゃった？」

「いやいやまあ何とか大丈夫だ、と思う」

刃更は歯切れ悪く言ってから、他の皆にも書かれている指令を見せた。すると、

「確かに大丈夫ね」ああ、全く問題ないな」「楽で良いなー桶君」

梶浦・長谷川・武井の　人が即座に同意の頷きを返した。たた　人、当の七緒だけが、

「な、何でさっ？　充分に恥ずかしいよっ」

と、顔を真っ赤にして異論を唱える。指令が書かれたメモにはこう記されていた。

『男子は女装を、女子は男装をする』　と。

梶浦達の反応に、七緒はしばらく「うぅ」と不服そうにしていた。

当然だった。人で着替えるならばまだしも、刃更にされるという事は、刃更に服を脱がされ、刃更の手で女装の服を着させられるという事になる。本来、男同士でこれをやったら、されるにとっても、するにとっても相当な罰ゲームだ。

それでも真冬の夜空のドを走らされている加納や、下着を脱いだままでいなければならない武井や、巻き添えの梶浦よりはマシだと納得できたのだろう。

やがて白い袋の中から、女装用の衣装が入っているあの袋を取り出すと、

「東城君、ここで恥ずかしいからトイレで、ね？」

あ、ああ　そうだな」

トイレに逃げて言ってきた七緒に、刃更はトキ・とってしまう。そして七緒の後に続いて男性用トイレに入った刃更は、誰も入って来ないように後ろ手にドアの鍵を閉めると、

で、女装ってどんな衣装なんだ？　ややこしい構造だったりするのか？」

脱がすのは特に問題ないとして七緒が着ているのは刃更と同じ学ラン。たが女の子用の服を着せる場合、特殊なコスチュームだったりすると色々と面倒な事になる。すると、

「え……と、ウチの学校の女子の制服みたい　」

白い袋の中を覗いて確認した七緒は、ホッとしたように、

「良かった　ウチの制服なら、東城君は慣れてるから大丈夫だもんね」

「……いや、そりゃまあ」

七緒が言っているのは冬と仲春の事だろう。

体育祭の一件以降、刃更と七緒は互いの正体や事情を明かし合っている。

そして刃更は、自分が孔明の様である事だけでなく、澪や柚希と主従契約を結んでいる事も七緒に説明していた。学校で主従契約の呪いか発動してしまう可能性はゼロではないため、おかしな誤解をされないように伝えておくべきだと思ったからだ。

とはいえ、そんなに可愛い笑顔で「慣れてるから大丈夫だもんね」とか言われてしまうと、それはそれでちょっと困ってしまうのだが。

まあ、誰かに慣れてきてはいるけどな。

主従契約の呪いが発動してしまった澪や柚希を楽にしてやるために、彼女達が着ている制服を脱がす事は結構ある。それこそ学校や外出先でやらなければいけなくなった時は、澪や柚希は絶頂感が残っていて自分では着られない事もあるため、刃更が着せてやった事もある。お陰で、すっかり女子の制服を脱がしたり着せたりする速さが上がってしまい、最近は万理亜から、

「流石スピードタイプ　戦闘だけでなく、女の子の服を脱がすのも速いですねえ」

などと不本意な事を言われてしまう始末だ。その時のお理亜のムカつく表情を思い出し、刃更が軽くイラッとしていると、七緒が恥ずかしそうにモジモジしながら、

ね、ねえ東城君。梶浦先輩達の事もあるし　早くしよう？」

「つと：そうだな」

この期に及んでまだ終わるまで武士は！　ブラ、梶浦は！　パンツ　ブラだし、七緒も着替えて十分が経過しないと女装を終えられないし。

「じゃ、じゃあ悪いけど脱がすぞ橘」

「う、うん：」

七緒が返してきた了承の頷きに、刃更は可愛い友人の服を脱がしていた。学ランのボタンを全て開けて脱がすと、次にベルトを外し、そのままズボンを下ろそうとして、

「え　？」

な、何だ　どうかしたか？」

驚いたような反応に刃更が慌てて問うと、七緒は首を横に振って、

「う、ううん、何でもないよ：続けて」

こちらに先を促してきた。だから、刃更が七緒のズボンをゆっくりと下ろしてゆくと、

「ん：」

刃更の眼の前で、七緒が恥ずかしそうに身をよじらせた。白く華奢な太股の内側を擦り合わせるその姿に、刃更はひどい後ろめたさを感じて犯罪者のような気持ちになりながら、

「……っ、橘：足を抜いてくれ」「：うん」

頷を赤くして告げると、七緒はコク：と頷いてこちらの言う通りにした。

そして脱がせた学ランとズボンをトイレの個室のドアの上に掛けると、刃更が続けてYシャツを脱がそうとしたところで、七緒はとうとう堪えられなくなったように、

「あ、あのね東城君　ボク、先にスカートを穿かせて欲しいな」

そ、そうなのか？」

取り敢えず、普段の自分が脱ぐ順番でやってみたのだが。すると、

「今回は成瀬さんや野中さんの時みたいに脱がすのが目的じゃなくて、あくまで着替えれば良いんだし」

それに、と恥ずかしそうに七緒。

「実はボクの脚、今：」

「つ　そ、そうなのか：わ、悪い：」

刃更は慌てて謝った。刃更がこの年ごろの女の子の下着事情や、澪達との主従契約という事情を七緒に説明しているように、七緒もまたヴァンパイアという正体とは別に、自分の脚の秘密を刃更に教えていた。刃更はそんな七緒の秘密を受け入れ、互いの友情がぎこちないものにならないように、普段はその事を意識せずに七緒を男友達として見ているが、

それであんなに恥ずかしがったのか：

七緒が梶浦達に対して反論していた理由が解り、刃更が納得していると、

ねえ、東城君。ボクみたいなのでも、女の子だったらトキトキする？」

七緒がふと、潤んだ瞳でこちらを見上げながら問い掛けてきて、

い、いや　どうだろうな」

刃更は思わず言葉を濁した。今の七緒の質問が、単に自身の女の子っぽい外見を卑下するものだったなら刃更は即座に否定したし、それ以上に七緒に対して怒っていただろう。

だが、今の状態の七緒が口にすれば、それは全く意味が異なってくる。

それでも――東城刃更が一番大切にしたいのは橘七緒という存在だ。だから、

「でも、どっちでも：俺にとっては橘だよ」

たとえどちらであろうと、変わる事のない想いを刃更が告げると、

：うん。ありがと」

はにかんだように微笑を浮かべた七緒が、

でも――やっぱりスカートは先に穿かせて欲しいな」

あ、ああ　勿論」

刃更がカクカク頷くと、ふふっと笑って手荷袋の中からスカートを取り出した七緒は、

「あれ　これって：ど、どうしよう東城君っ？」

手荷袋の中を見て、こちらに困惑の声を上げている。

「な、何だ：どうしたっ？」

刃更が何事かと問うと、七緒が袋の中からあるものを取り出してこちらに見せた。

制服と共に入っていたのは、可愛らしいショーツとブラのセットで、

「　　：」

念入りな女装道具に、刃更と七緒はしばし無言のまま見つめ合った。そして、

「……お願い、東城君」

やがて七緒はそう言うと、そっとこちらへノョ ンとブラを手渡してきて、

「いやいや待て、流石にこれは　　っ」

「良いよ、梶浦先輩や武井さんや、加納先輩の頑張りが無駄になっちゃうもん」

たから、と七緒。

「東城君のやりやすい順番で　　ボクの事、女の子にして」

恥ずかしさを堪えながら発された決意の言葉に、東城刃更は頷きを　つすると、

「瞬ごた　　なるへく早く終わらせるから、我慢してくれ」

そう言って七緒の事を　気に脱がしていった。刃更がYノャツと肌着代わりのIノャツを脱がしてやると、上半身が裸になった七緒はボクサ パンツ 枚になり、

「あぁ ィ」

自分の胸が完全に露出してしまった事に、七緒が恥ずかそうに身を震わせる。

それでも七緒は、刃更を 払拒まなかった。少しでも早く終わるようにと、完全にこちらに身を任せてくる。たから刃更は七緒の背後へ回ると、渡されたブラを友人の胸に宛けて背中でホックを留め、さらに両手を挙げさせて 気にセ ヲ 服の上を着せた。

七緒の胸は膨らんでいて、その先端も確実に男とは思えない形をしていたが、それこそブラを着ける際には間違いなく柔らかいものに触れたが、考えるのは後回した。そして、

「　　」

刃更は無言のまま、七緒のボクサ パ ンツに手を掛け――　気に引き摺り下ろした。

金縛に形の良い尻が露わになり、

「っ　　」

思わず声を上げそうになった七緒は、とっさに自身の手で口元を覆って我慢する。

そんな健気な友人に対し、刃更は右の足を順番に上げさせて穿いていたボクサ パ ンツを脱がした。背後に回っているため、七緒の前を見る事はない ィ上半身の変化を考えると、きっと見ないのが正解なのだろう。それでも、

「んぐ　　ああ、東城君　　っ」

今の自分の姉を刃更に初めて見られたからか、七緒は凄く恥ずかしそうにしていた。まるで催淫状態の時の様や柚希のように、無意識に腰を揺らめかせていて　たから、

「済まない ィもうちょっと辛抱してくれ」

刃更は励ましの言葉を掛けると、七緒に女の子用のノョ ンへと足を通させて、

「　行くぞ橘」

そう言うと　ノョ ンのお尻を摘んで、今度は　気に腰へと引き上げた。たか縮っていた事もあって、予定よりもかなりよまでノョ ンを引き上げてまい、

「つ～～～～～～～～」

股間にノョ ンを食い込ませた状態で、「裏たけ姉を浮きトからせてしまった七緒は、刃更の腕の中でビク ィと姉を硬直させると、

「あ ィはあ、つ ィあ ィ♥」

まるで逝った後の女の子のように脱力し、刃更に背もたれて姉を預けてくる。そんな七緒に刃更はスカ トを穿かせてやると、ファスナとホックを閉 てやり、

「急いで少し刺激になって悪かったな ィ慌てなくて良い、呼吸が整ったら戻ろう」

刃更が耳元で囁くと、七緒はとろんとした表情でこちらを見上げて、

「んぐ　　ボクなら平気、たから ィ東城君、早く戻ろ　　う」

そうしないと、いつまでもこのゲームが終わらない　そう七緒の瞳は言っていて、

「そうか ィお前がそれで平気なら」

東城刃更は、頷きながら己の思考を切り替えた。橘のためにも、下着を脱ぐ羽目になっている梶浦や武井のためにも、このゲ ムをさっさと終わらせる事だけに集中する。そうすれば、外を走っている加納が戻ってきて再びゲ ムに参加させられる事もない。

たから――刃更は七緒の腰を抱くようにして支えてやりながらトイレを出ると、皆の待つテ ブルへと戻っていた。すると、

「あ、　人ともお帰り――　」

最初にこちらに気付いたのは武井だった。彼女は、女の子の姿になった七緒を見てとっさに何かを言おうとして――しかし言葉を失った。

何事かと続いてこちらを見た梶浦も、ゴクリと息を呑んで何も言えずにいる。女子の制服を着た七緒があまりに可愛いか、たからか、それとも今の表情が壮絶に艶っぽいせいか。

ただ一人　長谷川だけが、普通にグラスに注がれた赤ワインを飲んでいて、

「　待たせてすみません」

自分の席へと戻った刃更は、また顔に恍惚の色が残っている七緒の腰を抱いたまま、長谷川とは斜向かいの席へと座らせると、

「じゃあ、今度は俺の番ですね……」

そう言って無造作にクジを次々に引くと、それを次の順番の梶浦へと手渡した。

そんなこちらの様子に、梶浦はとまどいながら、内容を読み上げていった。長さは『十秒間』で、対象云々は『3番に対

してする』　そして、

「えっと……『キスする』って」

「……ええっ……嘘りました」

怖ず怖ずと言ってきた梶浦に、刃更はそれだけを言った。深く考えない、悩まない。

今はただ、このゲームを終わらせる事だけが最優先事項だった。だから、

「……良いか橘？」「うん。東城君が良いなら、ボクは平気……」

問い掛けたこちらに、隣の七緒はコクンと頷きを返してきて、

「良いよ……して」

これまでの可愛らしさだけでなく、明らかな色気を漂わせながら身を預けてきた七緒に、刃更はその顎をクイッと持ち上げた。

「えっ　ちょ、ちょっと、二人共っ？」

それを見た武井が驚きの声を上げるが構わない。刃更はそのまま七緒へ唇を寄せてゆき、そしてキスをした　その瞬間、

「ん……　あ、ふあぁぁんっ」

いきなり七緒が、甘い嬌声と共にビクンと躰を仰け反らせるように震わせた。

七緒が声を出せたのは、刃更がキスをしたのが唇ではなく首筋だったからだ。

いくら早くゲームを終わらせるためとはいえ、流石に刃更も馬鹿正直に唇にキスするような真似はしない。指令はキスをするというものだけで、場所までは指定していないのだ。たったら、これでも問題ないだろう。たが七緒が見せた敏感すぎる反応に、その場の誰もが本気となっていて、永遠にも似た十秒が経過した後、刃更に首筋を吸われていた七緒は、ゆっくりとこちらへと倒れてきた。刃更は、そんな七緒の華奢な肩を抱き留めて、

「っ、大丈夫か橘　う」

先程の前菜の時の影響が残ってしまっていたのだろうか。こちらが心配そうに問うと、七緒は「ん　」と甘い吐息をつき出し、ゆっくりと刃更から躰を離した。そして、こちらを恍惚とした様子で見上げている七緒の瞳が、潤んだ十紅く輝いたように見え、

「Par Mistor」

眼の前の刃更ですら聞き取れないほど小さな声で、七緒は何かを呟いた。

「橘……う」

「……ううん、何でもない。ゴメンね、変な声出して驚かせちゃって　」

とうしたのか問うと、七緒は健気な笑顔を返してきて、それ以上は何も言わなかった。

だから、刃更が七緒の呟いた言葉と己の行為の意味を知るのは先の事となった。

首筋からの吸血や血を与える行為などによって、相手を支配するヴァンパイア――その血を半分とはいえ引いている橘にとって、自分から己の首筋を晒し、他人の口がそこへ触れる事を許すという行為が、一体どういう意味を持つかを。

「ほ、本当に大丈夫なの　う」「はい　大丈夫です」

心配そうに問う梶浦に、橘はニッと笑顔で応えて、

「さあ、最後は梶浦先輩ですよ　早くこのゲームを終わらせてしまいましょう」

そう言って、最後のクッキーを引く事を促した。

梶浦立華は不安を感じながら、クッキーの入った箱を見詰めていた。そして、

「……？」

チラッと、梶浦は上面に座る刃更と七緒の様子を窺う。

トイレから戻ってきた七緒は、まるで別人のようだった。

確かに、今の七緒は指令で女子の制服を着ているため外見的な違いは大きい。

……でも。

七緒が可愛いのはいつもの事だ　だが、これは明らかに服のせいじゃない。

梶浦の眼には七緒が女装しているのではなく、本物の女の子にしか見えなかった。

そして――もう一人、普段とは異なる雰囲気を漂わせている青年が梶浦の前にいた。

東城君……？

梶浦の目には、今の刃更はいつも以上に落ち着いていて　それどころか、どこか冷たさすら感じられるように思える。もしかしたら、こんなゲームに付き合わせてしまった事を怒っているのかもしれない。しかし、

「……」

梶浦立華は、そんな刃更に見惚れてしまう。今の刃更の雰囲気が、体育祭実行委員の時に二年の教室から助けてくれた時の彼と重なっていたからだ。

あの日、梶浦は刃更の事を意識するようになっていた。

たから、刃更を生徒会へ誘ったのも単に彼が優秀だったからではない。裏面日なたすが取り柄の自分が、ようやく弱者に抱く事のできたこの気持ちが本物かどうかを確かめてみようと思ったのである。すると、

梶浦先輩？

こちらが見ている事に気が付いた刃更に名前を呼ばれ、

「つ　こ、ご免なさい。今引くから」

梶浦は慌てて箱の中へと手を入れ、1番の加納がいないため、引いたクッキーは2番の武井へと渡った。プレゼントは加納の用意したストラグスかなたり――そして、

「時間は『十分間』、やるのは『4番からされる』　ですね」

「　また俺か」

い　ご、ご免なさい」

やれやれと嘆息した刃更に、梶浦は思わず謝った。すると、

「いえ、先輩は気にしないで下さい……クジは確率によるものなんですから」

ええ、ありがとう」

こちらに優しく苦笑してくれた刃更に、梶浦は泣きたくなる位に嬉しくなって――しかし同時に、指令のせいで刃更に嫌われてしまう事だけは絶対に避けようと思った。

彼から少しでも尊敬される先輩となれるよう、とんな指令だろうと耐えようと思った。

だから――そう心に誓って五分が経過した時、

「やあっ、あぁん　東城君っ♥　ん、んぁうっ、やっ　はあぁあぁあっ♥」

梶浦立華は、刃更の腕の中で女の快楽を得る事になっていた。

梶浦の引いてしまった指令に、「胸を揉まれる」と書いてあったからだ。

既に、武井への指令に巻き込まれて自分はド下着を脱いでいる――だから梶浦は最初、そんな指令など拒否しようと思った。だが、自分が去年の打ち上げで指令を拒んだせいで、今年の実行委員会がトラブル続きだった可能性がある事。来年はそうならないためにも、他の全員はきちんと指令を遂行している事。そして、そうした事情を既に話している刃更に、自分だけ指令を拒否するような勝手な女だと思われたくなかったという事があった。

周囲からは牛真面目すぎたと言われてしまう梶浦にはこれまで縁がなかったが、同級生の女子の中には、合コンなどでもっと過激なゲームをしている者もいるという。だから少し位……ほんの十分間だけ、恥ずかしいのとくすぐったいのを我慢すればそれで済む。

そう思い、梶浦はその指令を受け入れたのだった。

しかし　当然ながら梶浦立華は、刃更が胸や柚希を数え切れないほど絶頂させ、屈服させてきた事など知る由もない。さらに、梶浦にとって運の悪い事に　刃更は、自分が胸や柚希をあそこまで快楽に堕とせるのは、催淫の呪いのせいだと思っていた。

たが、催淫の呪いが発動していない長谷川に、あそこまで快楽を刻んだように、少しでも早く、そして激しく胸や柚希を屈服させられるようにと追求してきた今の刃更は、自分でも知らない内に催淫などなくても簡単に女を快楽に堕とせるようになっていて　たから梶浦は、あっという間に何も考えられなくなった。

解るのはただ、下腹部の奥に堪った熱い快楽が恥ずかしい場所からどんどん溢れて、ノョンを弾いていないのに、快楽に負けていやらしい脚を開いていってしまっている事。七緒や武井、長谷川ら他の　人に見られてしまっている事を想う余裕などない。

それ程までに、刃更に胸を揉まれている梶浦は、初めてとは思えないほど激しい快感を得てしまっていた。たから　その状態で九分までが経過し、

「　あと　分です」

経過時間を計測していた七緒がそう言った瞬間、

「　やあっ　あぁっ　はぁ、あぁ　ふあああぁぁぁんっ♥」

梶浦立華は激しい絶頂した。初めて男の子に胸を揉まれたにも拘わらず、これでもう　度目だった。既に梶浦は、刃更にセラ　服の下から中へと両手を入れられ、直接胸を揉まれている。服のトから揉むと暖になる、刃更の手が見えていると胸を揉まれているのが他の人の眼によく解ってしまうからと七緒が言い、それで刃更からどうするかを問われた気がするが、梶浦は自分が何と答えたか覚えていない。たた、今こうして刃更に直接胸を揉まれ、先端をいやらしく擦られているのがその答えなのだろう。そして、

梶浦先輩、あと十秒です。九、

七緒が始めたカウントダウンに、今度こそ自分の役目を果たせるのだという安堵を得た梶浦は、最後まで耐えられたご褒美にそれまで我慢

ていた事を己に許して、

「っ……はぁあ……東城くん……東城くん……っ」

とろんとした顔で、左の肩越しに背後を振り返った。こんなに感じている自分の顔を彼に見られてしまうのは恥ずかしい　それでも、変に落ちたかもしれない相手の顔をもう一度この眼に焼き付けておきたかった。すると、梶浦の背後には誰かに彼がいて、

「あと少しです、先輩」

そう彼に励まされた瞬間　これまでの苦しかった全てが報われた気がして、

「はぁっ　私、もう少しで　あっ　あぁあああああぁっ♥」

ゼロになった瞬間　梶浦立華は両胸を揉まれながら女の官能を咲き乱れさせた。

4

刃更が胸を揉むだけで梶浦を四度も絶頂させ、意識まで飛ばせてしまった後。

伝統のプレゼント交換ゲームが開かれた事もあり、この日の打ち上げは幕を閉じた。

そして現在　東城刃更は帰りのタクシーの後部座席のシートに座っていた。窓の外には美しいクリスマスのイルミネーションが輝く幻想的な景色がある。しかし、

「……」

激しい後悔を得て、自己嫌悪に陥っている今の刃更の眼に外の風景は入らない。

……ああ、もう。

やってしまった。大失敗だ。昨今は若者の性の乱れが叫ばれている、つ前の指令では梶浦や武井が下着を脱いでいて、直前には自分は七緒を裸にして着替えさせたりもしていた。梶浦が「胸を揉まれる」という指令を引いた時も、武井は結構平然としていた、当の梶浦も恥ずかしそうにしながらも最後は受け入れていた。よって合コンなどに行った経験がなかった刃更としては、問題ないものとばかり思っていたのだが　胸を揉むのはセーフでも、イカせてしまうのは完全にアウトとか、何たるボーダーライン。クラスでは最近ようやく「ぼっち状態」は脱したものの、やはりどこか一線を引かれており、普段はまた従契約で澪や柚希を屈服させ、与奪権によって日々価値観をサキュバス仕様にされている刃更が、不純異性交遊のオフサイドラインを見極めるなんて無理だったのだろうか。刃更としては自分と澪や柚希の関係は、業界そこまで異常ではないのかもしれない……などと淡い期待を抱いていたのだが。とはいえ、

桶も困ってたな。

刃更と同じく合コンの経験など全くなかった七緒もまた、先に指令で裸にされて下着まで女装させられるという恥ずかしい想いをしていた事もあって、あの場の雰囲気ライバルが解らなかったという。そのため刃更が梶浦の胸を揉み終わった後、店内の空気が気まずいどころの騒ぎではなくなっていた事に驚いた七緒は、ヴァンパイアへの敵愾心で梶浦達や店員らの意識や記憶をいじってフォローしてくれた。勿論、本来は人の記憶を操作するような真似はしない方が良いため「刃更は梶浦の胸を揉んだが、絶頂まではさせなかった」という、必要最低限の改変に留めてだ。

そのため刃更にこそ激しい後悔を刻んだものの、梶浦の名誉はどうにか守られて。

そして加納がマラノンから戻ってきたタイミングで会計を済ませて店を出ると、年の瀬の別れの挨拶と、新学期に再会する約束を交わし、梶浦は武井がタクシーで送り、七緒は加納と共に帰っていった。よって　差し当たり残る問題は、

あの先生　別に逃げたりしませんから、そろそろ離して貰えると」

「嫌だ」

刃更の頼みに、拗ねた声の拒否がきた。膝のシートに座ってこちらの右肩へ頭を乗せ、さらに腕まで絡めたまま離してくれないのは、余りにも美しすぎる養護教諭だ。

刃更は現在、長谷川とタクシーを共にしている。牛徒会メンバーと別れた後――刃更は長谷川のためにタクシーを捕まえ、彼女を乗せて送り出そうとしたのだが、後部座席へ乗り込んだ長谷川に、強引に腕を摑まれるとそのまま車内へと引き摺り込まれたのだ。そして刃更が驚いている内に、長谷川はタクシーを出発させてしまったのである。

長谷川はタクシーに乗り込んでからしばらくは不機嫌だった。そのため刃更がどうにか宥めようと試みると、長谷川はプレゼントから欲しいとねだってきた。

その甘い匂いと人人の色気に、刃更はくらくらと理性を揺らされながら、

交換ゲームでどのプレゼントを貰うかのクジを引き忘れていた刃更には、自分が用意したものしか残っておらず、梶浦の事もあったため那つて引き取ってきたのだが、長谷川はそれを欲しいと言ってきたのだ。そして、それをあげると長谷川は機嫌を直してくれたのだが、今度は刃更と腕を絡めたまま離してくれなくなった。それところか、ドレスから零れそうになっている豊かな乳房を、明らかにわざと押し付けてきていて、

成瀬や野中と同居しているんだ、私は別に、お前が私の眼の届かない所で誰と何をしようと構わない。他の教職員や牛徒がいる前では、教師の立場を貰へとも」

でも、と長谷川は揃れた瞳でこちらを見上げると、

「そんな私の前で、見せつけるみたいに梶浦の胸をあんなに揉んで……酷いぞ」

その甘い匂いと人人の色気に、刃更はくらくらと理性を揺らされながら、

いや、あれはゲームで仕方な　つい」

長谷川に言い聞かせようとして、そこで思わず身を硬直させた。膝からこちらの側頭部へ唇を寄せてきた長谷川が、刃更の耳たぶを甘く噛んできたのだ。

「ちょっ……先生、駄目ですって」

ここはタクシーの車内だ。そして刃更は制服で、長谷川の事を先生と呼んでしまっている。運転席のドライバーは何も言ってはこないが、狭い車内でこちらのやり取りは筒抜けだろう。この程度なら長谷川が酔っていたという言い訳が通るかもしれないが、これ以上は流石に学校へ連絡が行きかねない。だから刃更が両肩を摑んで押し止めると、長谷川はふぁっと笑ってから、

「解っている……続きは部屋でな」

刃更にだけ聞こえるように、そっとこちらの耳元に囁いてきた。

東城刃更は現在、長谷川千里と　人たちの秘密の関係にある。

保健室で水着を脱げなくなっていた長谷川を助けた日、彼女の家へ招待されて手料理をご馳走になった刃更は、牛徒からの恋愛相談に乗れるように、男女間の様々な経験をしたいという長谷川の要望を受けて、成り行きから彼女と入浴を共にした。

そして無防備な長谷川は豊かな胸で刃更の背中を洗ってきて、そんな彼女に刃更は理性を飛ばしてしまい　自分からも長谷川の事を求めてしまったのだ。

最後の一線こそ越えなかったものの、互いに裸で絡み合った結果、長谷川は刃更に胸や尻を改められて何度も絶頂したし、刃更もまた途中で意識を失いはしたものの、長谷川の胸で果てるところまで行ってしまった。それでも、目は故崎の言葉に乗せられて、体育祭が終わるまでは警戒して距離をとはいっても、いたのだ。なお無事に事件が解決した後に、放課後の保健室を訪れて　避けるような真似をしていた事を謝ると、長谷川は条件付きで刃更の事を許してくれた。

それが、特別な関係になるというものだった。

女の園から、それとも護衛執事として多くの生徒を見てきたからか　長谷川は、刃更が同居している葉や柚希を相手に理性を飛ばして、一線を越えてしまわないように必死に我慢している事に気が付いていた。そして、そんな刃更を葉や柚希の代わりに自分が楽にしたいと言ってきたのである。

長谷川の言った事は、力的に刃更にとって都合の良すぎる話だ。葉や柚希を裏切る事にもなる。だから断らなくては――そう思ったのだが、縋るように抱き付かれ、

「お前にされた、あの日から変なんだ　」

潤んだ瞳の長谷川に刃更は告白された。刃更と将来で互いに快楽を求め合ってから、自分の中で何かのスイッチが入ってしまった気がすると。刃更の事しか考えられなくて、教師と生徒の関係だというのに、その想いが抑えられなくて苦しいのだと。そして、

「・・・助けてくれ、東城」

そう長谷川に懇願された瞬間　刃更の中から断るという選択肢が消え去った。

刃更が葉や乃理華の事を助けたのは、そのままでは危険だった彼女達を放っておけなかったからだ。そんな葉や乃理華を助けておいて、長谷川を助けないのは理屈が通らない。

刃更は、これまで何度となく長谷川の助言に救われてきた。東城刃更にとって、長谷川千里という女性は既に大切な存在なのだ。よって、長谷川から助けて欲しいと求められたら、刃更には心える以外の選択肢はない。

だから、刃更は条件付きで長谷川の望みを受け入れた。

つ目は、長谷川と刃更の教師と生徒という立場を守るため、自分達の関係を関係に秘密にする事。そして　つ目は　最後の　線だけは越えない事だ。

そうすれば、葉や柚希らを裏切らずに済むなどと都合の良い事を言うつもりはない。

長谷川との関係を結んだ時点で、刃更は彼女達を裏切る事になる。それでも刃更が長谷川との間に越えてはいけない　線を引いたのは、長谷川の刃更に対する想いが、初めて女の快楽を与えてくれた存在への錯覚という可能性があるからだった。

これは主従契約を結んでいる葉や柚希にも言える事である。たからこそ刃更は、今の状態のまま恋愛関係になる事はないようにしている。たとえ恋愛感情そのものが錯覚だったとしても――それが後に彼女達を傷つけるものにだけは決してならないように。

その　つの条件を互いのために守れるならば、自分は可能な限り長谷川の求めに応えると刃更は告げた。そもそも――長谷川のような魅力的すぎる女性に、大人の色気を全開にして求められたら、自分に抗える筈などないのだからと。

そんな刃更の提案に、長谷川は嬉しそうにとろけるようなキスをしてきた。

たから唇を離れ、たっぷりと舌を絡め合った後――刃更と長谷川は、服とカーテンを閉めきり　人きりになった放課後の保健室で、互いの性別を何度も確認し合って。

その日から、東城刃更と長谷川千里の秘密の関係が始まったのである。

5

タクシーが長谷川のマンションへ着いたのは、八時半を少し回った頃だった。

支払いを済ませた長谷川の後に続いて、東城刃更はエントランスへと向かう。

イヒールの長谷川が前を歩くと、形の良い尻が色っぽく左右に揺れて、

「っ」

もう少しで自分はあの尻を――そんな煩悩した思考に陥っている事に、刃更は早くも自分の理性のタガが外れかかっているのを感じた。

長谷川は二人の時はいつも、刃更に甘えて欲しいとねだってくる。

葉や柚希が無意識の呪いを発動させた時の色っぽさも魅力的だったが、それでも彼女達を屈服させる時は、またどうにかギリギリのラインは見極める事ができている。

しかし　初めて入浴を共にした時もそうだったが、長谷川から誘惑されると、刃更はどうしても己を止められなくなり、自分から彼女を求めてしまう。おまけに長谷川は、葉や柚希にはさせられないような事も、自ら進んで刃更にやってくるのだ。だからこそ、催淫状態の葉や柚希を前にしても何とか理性を保っていられるのだが、

っ、気を付けないと　。

武井が言っていたように、ただでさえ綺麗だった長谷川は、刃更との関係を始めてからというもの、その艶っぽさを加速度的に増している。このまま大人の長谷川に甘える心地良さに溺れていったら、間違いなく刃更のもが彼女から離れられなくなってしまうだろう。

すると　カートキで開けるタイプのオートロックの扉を　つ抜け、エレベータホールでトへのボタンを押したところで、

「・・・今夜はどのくらい一緒に居られるんだ？」

隣の長谷川が、エレベータの位置表示を見上げながら尋ねてきた。

長谷川のマンションから東城家まで、電車と徒歩だと　時間近く掛かる。

たが、タクシーを使えば　十分で着く。よって十　時頃に長谷川の部屋を出れば、ルキアが来る深夜二時までには問題なく帰宅できるだろう。それでも、

特間　らいですかね」

己の欲望に流される事なく、刃更が短めに時間を告げると、

「　そうか」

と、長谷川が呟いたところでエレベータが到着し、高い電子音と共に扉が開いた。

先に乗り込んだ刃更は、階数ボタンのあるパネルの前へ移動しようとした。

たが、後から入ってきた長谷川が腕たけを掴り込ませるようにして最上階を押すと、こちらの胸へ飛び込んでくるように抱き付いてきて

彼女のバッグが床へ落ちるより先に、東城刃更は飛びきり濃厚なキスをされた。
そのまま壁に背中が付くまで後退にエレベーターの奥へと押しやられ。
「んっ　ちょっ、先生　？」
突然の事にドアを閉じるボタンを押す暇もなく、エレベータの扉は開いたままの状態だ。刃更は長谷川の両肩を掴み、何とか唇を離していきなりの凶行を問おうとするが、部屋までお預けにさせる気か？」
「……時間しかないのに、部屋までお預けにさせる気か？」
長谷川は官能に酔んだ瞳でこちらを見上げてきて、
「東城、私だって嫉妬するんだ？　それを忘れないで欲しい」
「っ　それは　」
至近距離で拗ねた表情を見つめられ、刃更が思わず息を呑むと、
部屋へ行く前に、お前の頭から私以外の女を追い出してやる」
悪魔的な笑みを浮かべた長谷川が、刃更の仏の手首を掴んで自分の胸へと導いた。
大きく胸元が開いたドレスの都合上、長谷川はブラジャをしていない　よって、開いた胸元から溢れそうになっている長谷川の乳房に直接触れた刃更は、
「……あ　。
長谷川が既に、胸の先端をピンと張り詰めさせていた事を知った。
刃更にされる事を考えただけで、興奮してこんなにしてしまっていた。
体いつから――ひょっとしてタクシの中に居た時からか。すると、
「ふっ？東城」
エレベータの扉が閉まってゆくのを背に、長谷川が驚くほど艶やかな挑発の微笑と共に刃更を誘ってきた。それは、長谷川が既に性的な興奮を得ている事と、そんな彼女がこちらを求めている事を強烈に刃更へ伝えてきて　エレベータが上昇を始めた時にはもう、刃更の頭の中から長谷川を諦めようとしていた事など消し飛んで、
「っ」
東城刃更は長谷川千里へ強引に唇を重ねた。そして自分から舌を絡めながら、左手で長谷川の腰をぐっと抱き寄せ、右手で彼女の乳房を優しく揉む。すると、
「んんっ、東城、んちゅる、んふ、くちゅ、あぁ、はあぁっ♥」
長谷川は嬉しそうに腰をくねらせると、甘えた声を上げながらこちらの首の後ろへ両手を回してより強く刃更を求めてきて　それに応えるように、刃更が長谷川の腰を抱いていた左手を下ろして彼女の尻を揉み始めた時だった。
途中の階でエレベータが停止し、ゆっくりと扉が開いていったのは。そして、
「
刃更達を見て、エレベータを止めた若い女性が固まった。ラメなスウェット姿を見るに、他の階の知り合いの部屋へ行くのか、或いは自分の部屋へ戻るのか。「本当」と立ち尽くす彼女に長谷川はこちらとのキスを中断すると、刃更の首の後ろに両手を回したまま、

「遠慮」して貰えないか」
悠然と告げると、女性が何か反応するより先にエレベータの扉が閉まって。
そして刃更達がキスを再開すると、今度こそエレベータは最後まで止まらなかった。
たが、目的の最上階へ着いて扉が開いても、長谷川は刃更を離してくれなくて。刃更はすくいあげるようにして床に落ちていたバッグを拾いあげると、そのまま長谷川を横抱きにかかえあげてエレベータを降りた。
すると、その拍子に長谷川のドレスがはだけて乳房がふるんと零れるように露出した。
互いに両手は塞がっている――たから刃更は自分の顔で隠す事にした。長谷川の仏の乳房へ顔を近付けると、先程よりもビンと張り詰め、もの欲しそうにしている桜色の先端が眼に入って――たから刃更は、そんな長谷川の乳首へむしゃぶり付いた。すると、
「っ　はあぁぁっ♥」
刃更に抱きかかえられた状態で、長谷川はビクンと甘く悶えると、こちらの首の後ろへ回した手にギュッと力を込めてより一層抱き付いてくる。だから、刃更は抱きかかえた状態で長谷川の胸の先端をしゃぶりながら、彼女の部屋を目指して廊下を進んだ。
そして部屋の前へ着くと、刃更は長谷川の乳首から口を離して彼女を床へ下ろし、
「先生、鍵を」
刃更の求めに、胸への愛撫で表情をとろけさせた長谷川は、こちらの腕に掛かっていた彼女のバッグを受け取ると、カードキーを取り出して開錠した。そして扉を開けて中へ入ると、人はすぐさまキスを再開――無言作にも扉に鍵を脱ぎ散らかし、長谷川のバッグや手袋、刃更の学ランを廊下に落としながら部屋を奥へと進んでいった。すると、
「んっ……今日は寝室へ行こう」
キスの合間に長谷川にせかされ、刃更は応じる事にした。そして、今まで開けた事のない長谷川の寝室の扉を開けると、中へと足を踏み入れて　そのままもつれ合うようにベッドへ倒れ込んだ。
そう言って、悪魔的な笑みを浮かべて刃更を誘ってきた。たから後を追うようにしてベッドへ上がった刃更は、本格的に長谷川と互いの服を脱がせ合った。
長谷川を脱がすのは簡単だった。首の後ろの結び目を解くと、トレスはあっという間にたたの布になって――そしてトレスを剥ぎ取った刃更は、この日の長谷川の下着を見た。
それは胸の下までしかない、いやらしいビスチェのような下着で、
今日のドレスと合わせて　お前のために買ったものだよ」
こちらのセクシャルと肌着のインナを脱がしながら、長谷川が微笑した。
長谷川が自分のために、あのトレスやこんないやらしい下着を　そう思ったら、刃更の興奮は　気に高まって、こちらのベルトを外してズボンを脱がした長谷川は、そんな刃更の状態にすぐに気が付いて、
「私で興奮して、こんなにしてくれたんだな　」

こちらを見上げる長谷川の瞳は、すっかり官能に潤んで、

「嬉しいよ」

そう言って、そっと刃更のパンツを脱がせると――当然のように両手で乳房を持ち上げ、すっかり大きくなった刃更のそこを深い谷間で挟んできた。いやらしくも私の胸を揉み合わせながら、上下へ揺らすようにしてこすれ、

「っ……ふ……」

叫くように刃更が快楽を伝えると、

「んっ　あぁん　ふふ、随分と上手くなったろう」

こちらへ乳房で奉仕している長谷川が、自身も胸で感じ始めながら、

「私をこんないやらしい女にして……年上の女をここまで調教した気分はどうだ？」

官能に瞳をとろけさせながら、悪戯っぽく微笑んでいる。

「っ……俺たけの、せいですか……う」

この関係は長谷川が望んで始まったものだ。納得できずに反論した刃更は、長谷川の頭をそっと撫でた。それは一人の間で交わされている合図で、

「よく言うな……こんな事をさせる奴が」

ふふっと長谷川は笑うと、胸だけでなく口でも刃更への奉仕を開始する。

嬉しそうにふふられ、愛しげに舌を絡ませられると、刃更のものはさらに大きさと硬さを増して　初めて会った時の長谷川からは想像もできないその淫らな姿に、どうしようもなく興奮した刃更は　気に快感を駆れ上がらせる。

そして――刃更がそのまま長谷川の口で果てようとした時だった。

「ふふ　また私の負けだ」

長谷川は刃更のものから口を離すと、そのまま仰向けに寝転がった。体何を――そう思ったこちらに、長谷川は豊かな胸の谷間に人差し指を滑らせると、

「今夜は年上の女を感じさせる苦労にしてみないか？」

平然と、刃更の本能を掻き立てる言葉を口にしている。

「お前は私に気を遣って、私の求めにはいつも応えてくれるか　初めて　緒に風呂に入った時に少し見せてくれたたけで、本気で自分の好きに動いた事はないだろう」

「　それは　いやでも」

長谷川の指摘は事実だった。しかし、刃更がそれをしないのは長谷川を傷つけたくないからだった。男が己の本能のままに振る舞ってしまったら、必ず相手の女性を傷つけてしまう。

刃更は、長谷川を傷つけるような真似はしたくなかった。それなのに、

「東城　そろそろ私に、お前の好きにさせてやれと言われる悦びをくれないか」

長谷川は、そう言って刃更の事を誘った――全てを許す女神のように優しんで、

「たまには少しくらい乱暴にして……お前が男たと、私に思い知らせてくれ」

こちらの正気を優しく奪う殺し文句を言げてくる。だから、

「　」

長谷川の腹の上に跨がると、刃更は彼女の胸の谷間へ自分のものを差し込んで――豊かな双乳を両からくっと挟んで谷間を限界まで窮屈にすると、ゆっくりと動き出した。

それは長谷川の胸で、無理やり己をしゃぶらせるフェラチオだった。

こちらが腰を振る度に、長谷川はいやらしく胸を震わせながら、

「やあっ、はぁんっ……ふうっ、東城ぉっ……はぁ、ふあぁっ……はあぁっ♥」

刃更に乳房を蹂躙される悦びに、長谷川はこれまでにない官能に打ち震えていた。

あの長谷川先生が　。

誰よりも美しく凛としている女性が、自分に胸を犯されて悦んでいる　その事実は、刃更を昂らせるには充分で。爆発する寸前まで快楽を我慢した刃更は、

「　」

初めて自分の意思で、そのまま長谷川の胸へ己の精を解き放った。

6

長谷川千里は、己の胸に接まれた刃更のものが熱く脈動したのを感じた。

勢い良く吐き出された刃更の精が、長谷川の胸の谷間を淫らな白へと染めてゆく。

「ふふ……愛い男だな……」

こちらがうっとりと嬉しそうに笑うと、刃更はゆっくりと腰を引いていって　そして長谷川は、自分の胸の谷間から刃更のものがずるりと引き抜かれたのを見た。刃更のそこは、彼の精液と長谷川の唾液とがいやらしく絡み合った液体を垂らしていて、

「今、綺麗にしてやる……」

たから長谷川は体を起こすと、刃更の快楽の残滓を舌で舐め取り始めた。すると、

「っ……っ……」

そんなこちらの胸へ、刃更が手を伸ばして揉んできた。

「んちゅっ　こら、そんな悪戯を　ああん　ちゅぷ」

さらに胸の先まで指で摘まんでいじられたが、長谷川は己の胸を刃更の好きに揉ませて、乳房をいやらしい形にされながら、口に含んだ彼のものを舌で綺麗にしていく中で、

かなり積極性が増してきているな。

長谷川千里は、刃更の僅かな変化を感じていた。

長谷川が刃更を甘えさせているのは、無償の愛を与えたいと思っているからだった。

勿論、長谷川が刃更に対して本気になってきてしまっている事は否定しない。

人の性格の関係を求めたのも、刃更を男として意識しての事だった。

だが　こうして刃更を誘惑しているのは、刃更を喜ばせるためだ。

普段の刃更はセルフコントロールができすぎているきらいがあるが、それは内在しているブリュンヒルドの凶暴性を抑え込むためだろう。故郷を相手に数命闘を演じた際に、ブリュンヒルドが顕在化すると暴走してしまったのがその証拠だ。

しかし、あの時の刃更は　気に戦闘力が増し、〝無次元の斬撃〟を連発できていた。

あれは戦闘ブリュンヒルドと、刃更自身の本来の力の発露によるもの。

そして。

その力は、刃更が戦場での戦いを最後まで生き抜くためには必要となるものだ。

長谷川は、刃更がこれから戦場へ行こうとしている事を知っている。

レストランでしたアドバイスも、それを踏まえてのものだ。

しかし〝魔刀〟咲耶〟に認められている他者のように、刃更もまたブリュンヒルドの力を使いこなせるようにならない限り、現魔十流との戦いで命を落としてしまいかねない。

刃更達が相手にしようとしているのは、それ程までに強大な相手なのだ。だから、

絶対に死なせたりするものか。

長谷川千里は、かつて姉のように慕っていた大切な女性を失った。よって彼女から託された刃更だけは、何があろうと守ると決めたのだ。

それだけは絶対に譲れない。

だから長谷川は刃更の潜在性を飛ばす事で、刃更の積極性を高める事で凶暴なブリュンヒルドと同調しやすくさせ、意識を保ったままでも使いこなせるように導く事にしたのである。刃更自身は気付いていないようだが、長谷川と　人だけの関係を始めてからこの　ヶ月の間に、刃更とブリュンヒルドとの同調はかなり進んでいる。

理想を言えば、故郷を手玉に取ったレベルまで力を使えるようにしてやりたかったが、現状でも新しい技を繰り出せるようになるなど間違いなく成長はしているし、後は戦闘中にきっかけさえあれば恐らく　気に化けるだろう。そして、

「ちゅっ　ちゅむ、んふぅ　ちゅぱ　ぷはっ、綺麗になったぞ」

そう言って長谷川が口を離した時には、こちらの唾液でコーティングされていやらしく艶めいた刃更のものは、再び熱く膨れ上がっていて、

「……先生……っ」

こちらを見下ろすノクノクする性と男を感じさせる刃更の瞳に、

そんな顔をして。

いつもの刃更からは考えられないような、淫らな雄のオーラに当てられた長谷川は、

「またまた元気だな　たったら、こっちへ来てくれ」

刃更のものを手でくちゅくちゅとごきながら、艶っぽく微笑み掛けた。

東城刃更が強くなれる可能性を、より高いものへとするために。

長谷川に手を引かれて、東城刃更はベットを下りた。そして　人で窓際のカーへ移動すると、長谷川は窓一面に広がる窓ガラスへ右手を突き、刃更の方へと振り返って、

今度はここでしていいよ　」

そう言って、こちらへ向かっていやらしく尻を突き出すと　長谷川は信じられない事をしてみせた。シャツ部分のクロッチ　そこへ左手の親指を差し入れて、下へと引っ張って隙間を作ったのだ。

「っ　」

たから、東城刃更は思わず息を呑んだ。

横へずらしてはいないため、長谷川の女の象徴は見えない。たが、それでもその体勢で微笑んでくる長谷川は、これまで刃更が見てきた中で最高に淫らな彼女で、

お前との約束は忘れていない　でも、下着の中までなら構わないだろう？」

たからお前のを下着の中へ入れて、後背位でして欲しい　そうねだられ、

「……っ……っ」

刃更は、まるで吸い寄せられるように長谷川の真後ろへ立った。窓の外に見える街の夜景は、もう目に入らない　それよりも、もっと美しいものが刃更の眼の前にあった。

聖なる夜に、窓から差し込む青い月明かりを浴びて浮かび上がる長谷川の裸体は、神々しさを覚えるほど綺麗で、彼女の指で引き延ばされてできているその膨らみからは、長谷川が下の口から溢れさせたいやらしい蜜が滴れ落ち、月光に照らされた内股をいやらしく濡らせていた。そこは、一向に途絶えなく、刃更が挿入しても良い長谷川の女の割れ目だった。

だから刃更は長谷川の腰にお手を添え、右手で己の位置を合わせると、いやらしく口を開けているその穴に、ゆっくりと自分のものを差し込んだ。

中はかなり窮屈だったが、先端が入ってしまえばこっちのものだった。腰に力を込めて奥へと押し入れると、熱く蕩れてとろとろになっているそこは、まるで本当の女性自身のように刃更のモノをキュッと締め付けてきて。

「つ、ぃ、あ、ぃ、ぃ」

その感覚に腰から力が抜けてしまいそうになりながら、それでも根元まで差し込むと、自然と刃更の腰が長谷川の尻へぶつかって、その瞬間。

「つ　あ　はぁあぁぁ、つ❤」

長谷川は嬉しそうに腰をくねらせ、甘えた声を上げた。窓ガラスを鏡にして映る長谷川の恍惚とした顔は、これまでのどんな行為の時よりも悦んだ表情をしていて、だから、

「くっ、、、っあぁぁ！」

東城刃更は両手で長谷川の腰をぐっと摑み、気にグライドを開始した。すると、

「はぁっ、んっ、、、東城ぉ、、❤　あんっ、はぁ――っふぁぁぁんっ❤」

長谷川は敏感に反応し、腰まである長い亜髪を振り乱しながら、女に生まれた事を悦ぶ嬌声をトげ始めた。そんな長谷川の声をもっと聞きたくて、刃更が腰を突き入れて彼女の白く柔らかな尻に腰をぶつけると、長谷川は尻たぶをいやらしく波打たせながらどんどん淫らに乱れていって　腰く間にジュブっ、ジュブっと淫らな水音が生まれだし、二人の結合部がいやらしく泡立ってゆく。そして、

「やぁっ、あぁん　東城、お前のが　動いて　っ」

陶酔を深めた長谷川の声に眼の前の窓ガラスを見ると、快楽に乱れている刃更達の姿が映し出されており――こちらの激しい抽挿で、艶かな胸を密へ押し付けていやらしい形に潰れさせている長谷川の下着のノョ　ン部分が、完全に刃更の形に盛りトがっている。

たが、それを見た刃更が得たのは、興奮ではなく　つの事実だった。

長谷川がンョーツの中を濡らし苦茶に濡らしていたため解らなかったが、クロッチの横から挿入しているためか角度が合わず、刃更は己が長谷川の手中を――彼女の最も敏感な場所へと当てられていなかった事に気が付いた。

思わず腰の動きを止め、クリと喉を鳴らしたこちらに、

「んぅっ　東城　ぅ」

切なげな表情で、長谷川がこちらを振り仰いでくる。その表情は、刃更が気付いた事実を想像すらしていないようだった。だから、東城刃更は見たくなる――もっと淫らな女の快楽がある事を知った時、長谷川がどうなってしまうかを。

「　」

だから位置を合わせた刃更は、様子を窺うように軽くそこへ突き入れた――その途端、

「やっ　ふあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ　っ❤」

密が震える程の嬌声を上げた長谷川が、ビクンと躰を仰け反らせたと思った瞬間、彼女のノョ　ンの中が　気に温かい液体で満たされた。

想像を絶するその反応に、

「っ、これって、、。」

突き入れた己のものを熱く濡らされた刃更は、何が起こったのかを理解した。敏感な場所を擦られて深く絶頂した長谷川が、いやらしい女のノャワ　を迸らせたのだ。

快楽で全身を紅潮させた長谷川が、蒼白い月光を浴びて躰をいやらしい桜色にしながら激しく絶頂する姿は最高に綺麗で、

「　　」

そんな長谷川を目の当たりにした刃更の中で、何かが完全に弾けた――だから、

「つ！　あっ！　あぁっ！　はぁ、んっ！　あ！　っ」

これまでとは次元の異なる絶頂に、驚めかしく情欲に濡れた声を漏らしながら、腰と膝の力を完全に失ってズルズルと床へ崩れ落ちそうになった長谷川を、刃更は彼女の腰を摑んでいた両手を脇腹からトへと滑らせ、乳房を鷲摑みにする形で受け止めた。

「っ　はぁあぁあっ♥」

激しい絶頂の余韻が治まっていない長谷川は、それだけで再び軽く達してしまう。

いつもの刃更なら、間違いなくここで止めていたろう。

長谷川を傷つける事のないように　けれど、今はいつもの刃更ではなくて。

だから止めなかった。長谷川の乳房を手から溢れそうな位に乱暴に揉みしだきながら、刃更は　気に抽挿を再開した。途端に、

「やあぁっ　東城わ、駄目っ　東城わ　っぁあぁあぁあ」

長谷川は　度目の快楽を喚きながら　しかし、刃更は容赦しなかった。

その場所を攻める度、噴みたいに何度も絶頂する長谷川があまりにも綺麗で　己を昂ぶらせた刃更は、そこから数え切れない程の絶頂を長谷川へと刻んでいった。

だが、やがて刃更は、自分達が何度果てたかをはっきりとは覚えていない。

だが、やがて絶頂している状態が当たり前になった長谷川が、

「はぁっ　東城わ　っ♥」

こちらの動きに合わせて、自分からもいやらしく腰を振り始めて。

恥ずかしい角度を強れば本当に結ばれてしまいそうなスリルに、刃更も長谷川もとんでん互いを昂ぶらせてゆき――激しい絶頂した長谷川が再び女のシャワーを迸らせたのと、刃更もそのまま己の精を膣内に解き放った所まではぼんやりと覚えている。

最後に長谷川の髪が金色に輝いた気がするが　あれは、幻だったのだろうか。

7

密着で刃更と繋りなくセックスに近い交わりをしてしまった十分後。

絶頂して意識を失ってしまった刃更と共に、そのままズルズルと床へ倒れていた長谷川は、ようやく動ける状態まで回復した。そして、

「　まさか、人の姿を保てなくなってしまうなんて」

かつて十神の　柱として大尊の原点に君臨していた頃の　アフレイアの姿で、長谷川千恵は苦笑した。確かに刃更にされると、自分はどこまでも官能を高めてしまうか、まさか尚次へぺもの封印が解けてしまうほどの悦びを刻まれるとは思わなかった。おまけに封印が解けた拍子に、先程まで身に纏っていた下着を消し飛ばしてしまうとは。

「やれやれ　刃更が気に入ってくれていたのに」

普通に意識を保っている時は、そんなミスは絶対にしないのだが　せっかく刃更がこちらへ七回も精を放ってくれたのに、その余韻を味わい損ねてしまった。

「ふふ、まあ良いか」

何せ、刃更があそこまで開性を飛ばしたのは初めてだ。プリュ・ヒルトとの同調を遮めて刃更の力を上げたい長谷川としては嬉しい誤算である。それに、

「それにお前が、私に夢中になってくれたという事だからな」

そう言って長谷川は微笑むと、こちらの背中に覆い被さったまま疑惑を立てている刃更と共に、ヘッドのよ　掛け布団の中へと短距離転移した。

そして互いの腕を絡めながら刃更の頭を優しく抱き抱き、彼の顔を己の胸へと埋めると、長谷川は念るだけでバッグの中にある携帯電話を操作。相手と通話が繋がると、

「　タクシーを　台頼みたい」

己の声をバッグの中へと転移させ、刃更が帰るタクシーを手配した。こちらへの到着時間は当然、刃更が先程と口にした　組にいられる時間ギリギリである。

それでもまた、時間以上は　組にいられる計算だ。だから、しばらくこのままこうしていて、残り十分になったら刃更を起こして、組にシャワーを浴びよう。

その時までには、元の姿に戻らないとな」

と、苦笑した時だった――長谷川は信じられないものを聞いた。

眠ったままの刃更の口が、抱き寄せている長谷川の胸のトで小さく動き、

「　長谷川　先生　」

寝言でこちらの名前を呼んできたのだ。これから魔界へ赴くというのに、成瀬邸でも、野中柚希でも、成瀬与助や野中胡桃でもなく。東城刃更は、無意識に長谷川の名を口にしていて　その事実に、

「　」

長谷川はたまらなくなって、一瞬本気で我を忘れかけた。制限が掛かっているとはいえ十神の力を全て解放すれば、下位次元のこの世界の時間を遅らせる事など容易に可能だ。この部屋の中だけに限定してしまえば、それこそ残る　時間を幾らでも引き延ばせるだろう。そして刃更の体力や精神力を回復させれば、先程のように交わるだけでなく、本当の男女の営みだって半永久的に行なえる。

だが、それはできない。

そのためには、刃更にこの姿を晒す必要がある――しかし、長谷川はまた、自分の本体を刃更に明かす訳にはいかないのだ。勿論、こちらの手体が神族だと解っても、刃更は長谷川の事を受け入れてくれるだろう。だが、

眼が覚めたら、お前は成瀬邸の下へ戻される事を望むだろうからな」

長谷川より優遠を選ぶという訳ではない――光代慶士の　人娘として、その血と力を受け継いでしまった為を、残酷な宿命から解き放つために。

だから長谷川は布団の中で刃更のトへ覆い被さると、己の唇を彼に重ねた。

すると、刃更の身体が金色に淡く輝き始めた。互いの口を通して長谷川が力を送り込み、刃更の体力を回復させているのだ。人型を失

わい損ねてしまった。

いた状態で、刃更を縁等へ逝かせる訳にはいかない。長谷川が刃更と一人の関係を結んだのは、縁昇で待ち受けている死臨で、刃更が命を落とさないようにするためでもあるのだから。

そして刃更の体力を完全に回復させると、長谷川は一度口を離して、

「全てを乗り越えて戻ってきたら、また私を回収させてくれ刃更。今度は朝まで」

そう言って微笑むと、再び彼に唇を重ねて。今度は互いの舌と唾液を絡ませた。

「あぁ、ん、ちゅ、ふぁ、れちゅ、んむ、ちゅぶ、れろっ、んちゅ」

それは体力を回復させるものではなく、純粋な愛を伝える情熱的なキスだった。

刃更を起こさなければいけなくなるまで、残りわずか十分。

その時が来るまで、長谷川は刃更の寝顔を見詰めながら幸せな時間を過ごした。

静かにそっと身を寄せて。今だけは長谷川が刃更へと甘えるように。

The Testament of Sister New Devil

あとがき

既に本編をお読みの方も、これから読まれようとしている方も、本書を手に取っていただきましてありがとうございます。上栖綴人です。

さて、まず最初にアニメ化の続報から。本書の帯や先だって開催された夏コミでも部分開示されていますが、どうやらTVアニメみたいですっ！アニメのホムヘノもできているみたいですので、既に紹介されているメインスタッフに加え、今後はキャストや詳しい放送時期などの情報が徐々に解禁されてゆくと思います。とうぞお楽しみに

では本書についてなんですけど。この5巻は短編というか、各ヒロインをクローズアップした5巻までのサイドストーリーサービス仕立てになっています。1章の「帝&仙希編」は2巻と3巻の間くらい、2章の「ありす編」は3巻第2章の途中、3章の「胡桃&ゼスト編」は5巻第3章と4章の間、4章の「橘&長谷川編」は4巻と5巻の間の話です。基本的には時間軸に沿った順序構成なのですが、「橘&長谷川編」だけは最後に回っています。心この巻はカバーにもなっている胡桃がメインのため、彼女に一番多くページを割いているものの、4巻の後に一部の読者さん達の間で長谷川の人気がどえらい事になっていまして　念のためプロット段階からこの構成にしていたのですが、やはり正解だったと思います。今回も、長谷川は色々と最強すぎるので。まあ5巻がそうだったように、異世界編の間は彼女の出番は厳しいので良しとしましょう。次の7巻は、いよいよその5巻の続き　異世界編が再開しますので、どうか楽しみにしていただければと。

では、今回も本作に携わってくださった皆様に謝辞を。トロプラスの入賀さん、毎度最高のイラストをありがとうございます！　今回は長谷川の破壊力が凄かったです！　みやこ先生、毎月の連載＆単行本3巻の作業をありがとうございました　最近は、私など足下にも及ばないような売れっ子作家さん達から、みやこさんのコミックを薦められています。木曽先生、毎月の連載ありがとうございます！　そろそろ単行本の1巻が山そうな感じですね。今から楽しみにしています　そしてアニメスタッフの皆さん、作業が色々と大変かと思いますが、とうぞよろしくお願いします！　後は担当さんやその他の関係各所の皆さん、各書店さん、何より本書をお買い上げいただいた読者の皆さん、今回もありがとうございました。本作が、巻を進める度にユザを増やせている幸せな作品になる事ができているのは皆さんのお陰です。引き続き、応援よろしくお願い致します。

それでは、次巻でまたお会いしましょう。

上栖綴人

滝川の「全ての決着を付けよう」という言葉は真実だった。
現魔王派から決戦を申し込まれ、レオハルトの王城へと向かう刃更達。
穏健派と現魔王派に加え、枢機院の思惑までもが複雑に絡み合う中、
刃更が見据える澪を巡る戦いの結末の形とは――……

時は来た……始めよう。
この魔界の未来を決める戦いを――……

新妹魔王の契約者（テスタメント） VII
COMING SOON!

祭VI

アニメ化も
おめでとうございます!

かずま

神乳

エロもバトルも激しすぎて
目が離せません!!!

梅ラボ

あとがき。

高橋慶太
6巻!!

6巻まで来ました!!
ここまで来れたのも
皆様のおかげです
<(_ _)>

カバー・口絵・本文イラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
カバー・口絵　本文デザイン／横崎上陸（ムシカゴグラフィクス）

新妹魔王の契約者VI

[illegible]

[illegible]

平成[illegible]年[illegible]日　発行

(C) 2014 Tetsuto Jesu, Nekonoke Ohkuma

本書の無断転載・複製を禁じます

印刷・製本　[illegible]
[illegible]　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8[illegible]（営業）
[illegible]　角川書店
〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19
03-3238-8696（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/

新妹魔王の契約者（テスタメント）VI

The TestAmenT or SisteR New DeviL

上栖綴人

イラスト◎大熊猫介［ニトロプラス］

角川スニーカー文庫

The Testament of Sister New Devil

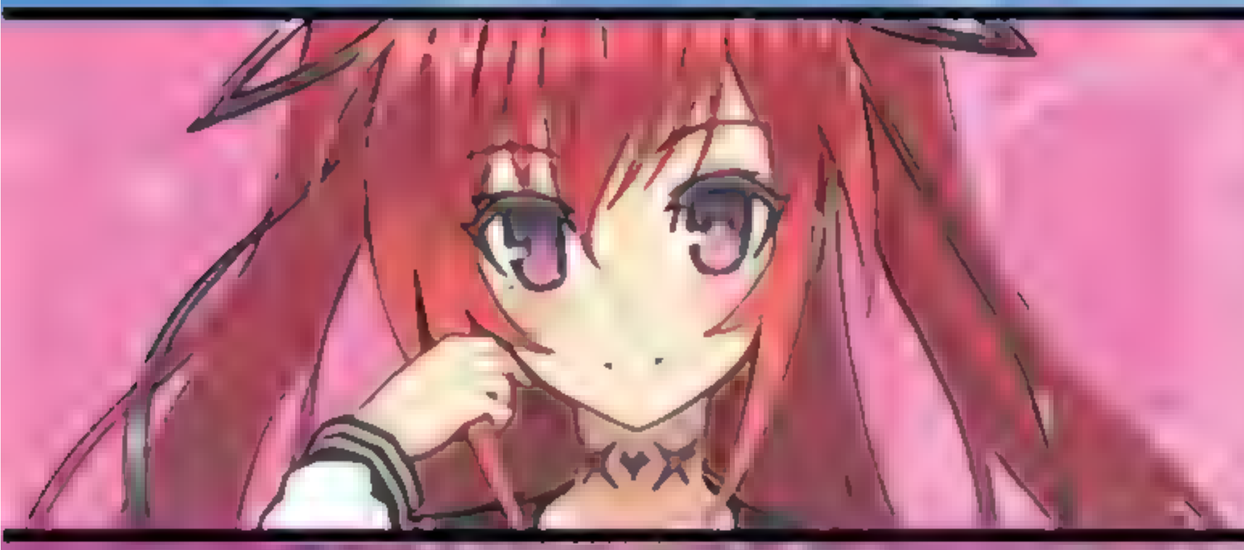
新妹魔王の契約者 VI

テスタメント

東城刃更

Hazuki Tojo

➤澪と万理亜の“兄”。特異能力《無次元の執行》の使い手



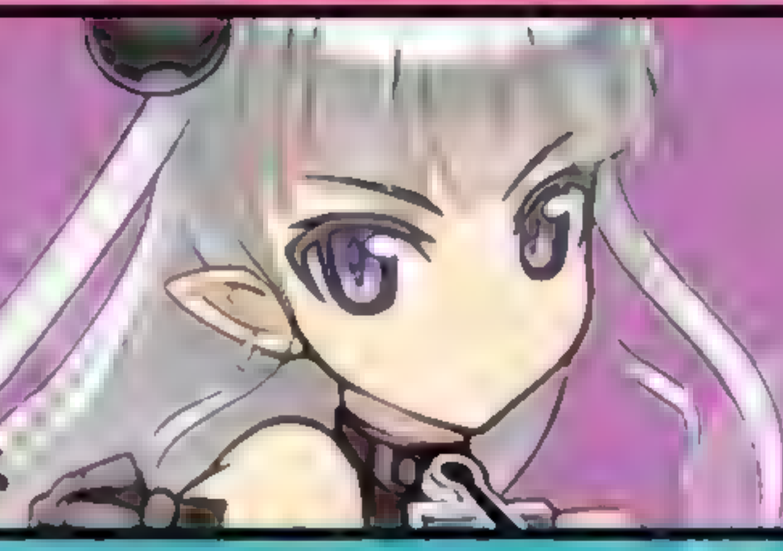
成瀬澪

Mio Naruse

➤先代魔王の娘で、刃更の"妹"になった少女

成瀬万理亜

Maria Naruse



➤刃更と澪を主従契約させた下の"妹"。ロリエロサキュバス

野中柚希

Yuki Nonaka

➤幼馴染の刃更が好きな、勇者一族の少女

野中胡桃

Kurumi Nonaka

➤柚希の妹で、最近は刃更の家で生活している

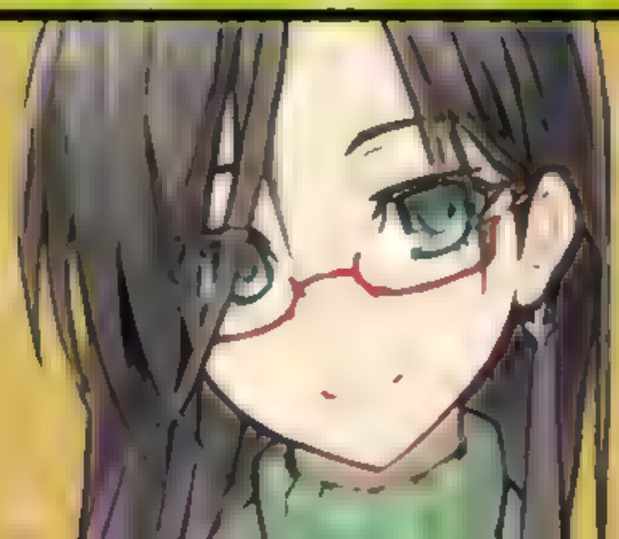
ゼスト

Zest

➤刃更に救われた魔族の美女。刃更に忠誠を誓っている

長谷川千里

Chisato Hasegawa



➤刃更達が通う高校の、美しすぎる養護教諭

「……今夜は年上の女を
滅茶苦茶にしてみないか？」

VIP

アニメ化も
おめでとうございます!

おわり

私、
参上！！

エロもバトルも激しすぎて
目が離せません!!!

あとがき。

新妹魔王
6巻!!
お買い上げありがとう
ございます!!

"股"の感度に
定評のある胡桃ちん
ですが、実は大熊
的には"スパッツ"の
キャラを想定しとりました…
ムレムレ スパッツ クンカクンカ
なお話を夢見て
今日を生きる
<(｀ω´)っ